

八尾市文化財調査報告12  
昭和60年度国庫補助事業

# 八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書

1986. 3

八尾市教育委員会



正 誤 表

頁	行	誤	正
88	4	背部	背幅
91	6	底部	底板
100	12	黑白	黑色

## は し が き

文化財保護法第57条の2による届出件数は、年々増加し、本年度も昨年度に引き続き、約500件を数え、その内約200件について、発掘及び立会調査をいたしました。

大規模開発の調査を必要とする7件については、(財)八尾市文化財調査研究会に指示し、調査をしましたが、小規模開発や立会調査については、国庫補助事業の対象として、八尾市教育委員会文化財室が担当実施しました。

この報告書は、文化財室が発掘調査しました高安古墳群をはじめ、数遺跡の調査概要であります。それぞれの遺跡の解明に、貴重な資料を提供できたと思います。

終わりに、数多くの調査に、温いご理解とご協力をいただきました事業主をはじめ、関係各方面の方々に、心からお礼申し上げます。





昭和61年3月20日

八尾市教育委員会  
教育長 西 崎 宏

## 例 言

1. 本書は、八尾市教育委員会が昭和60年度国庫補助事業として実施した八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室が実施した。  
なお、調査は米田敏幸・嶋村友子が担当した。
3. 本書には昭和60年度に実施した181件の立会・発掘調査(第17表)のうち、4遺跡4調査地(第1表、第1図)の概要報告を収録した。
4. 調査に際しては、丸山晋司、松島賢治、細合光子、西森忠幸、中谷 伸、中野竜介、本多由郁、木山俊彦、曾崎光也、横山妙子、大黒静子、浅井 健の参加を得た。
5. 本書の執筆は米田、嶋村が行なった。また、石材の鑑定を八尾市立刑部小学校奥田 尚氏に依頼し、玉稿を寄せていただいた。編集は嶋村が行なった。
6. 本調査期間中には以下の諸氏の御教示、御協力を得た。記して感謝の意を表する。  
堀江門也・福田英人(大阪府教育委員会)、田中和弘・岸本道昭(財団法人大阪文化財センター)、杉山晋作(国立歴史民俗博物館)、河上邦彦(橿原考古学研究所)、上田 睦(藤井寺市教育委員会)、工藤千代太郎・坂上弘子(高安城を探る会)、財団法人八尾市文化財調査研究会(以上、敬称略)
7. 出土遺物並びに記録図面は一括して八尾市教育委員会文化財室に保管してある。

## 凡 例

1. 遺構は各遺跡ごとに種類別に通し番号をつけ挿図・図版の番号を一致させた。  
土坑……SK 小穴……SP 溝……SD その他……SX
2. 遺物の縮尺率は土器 $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{2}$ 、埴輪 $\frac{1}{3}$ 、金属製品 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{1}$ 、玉類 $\frac{1}{1}$ 、石棺 $\frac{1}{8}$ とした。
3. 遺物実測図の表示は以下のとおりである。  
弥生土器・土師器・埴輪・金属製品・玉類—, 須恵器—  
器表の赤彩—, 石棺—
4. 土器拓影図は外面を断面の右側、内面を左側に掲載した。
5. 遺物観察表における遺物の色調は小山正忠・竹林秀雄「新版 標準土色帳」(1976)に従って記述した。また、砂粒の大きさは0.5mm未満を小、0.5mm以上で2mm未満を中、2mm以上を大として記述した。
6. 遺物には土器、金属製品、石棺、玉類の別に通し番号をつけ、挿図・図版の番号を一致

させた。

7. 本書で用いた方位は座標北を指す。
8. 本書で用いた高さの基準は東郷遺跡では大阪湾の平均海面であり、楽音寺遺跡・高安古墳群では東京湾の平均海面である。それぞれ、OP、TPと略して記載した。

## 本文目次

はしがき

例言

凡例

1. 東郷遺跡の調査 .....	1
2. 楽音寺遺跡の調査 .....	43
3. 高安古墳群の調査 .....	49
4. 小阪合遺跡の調査 .....	105
5. 昭和60年度の埋蔵文化財調査について .....	109

## 挿図目次

第1図 八尾市埋蔵文化財分布図 (S=1/50000)	
第2図 調査地周辺図 (S=1/5000) .....	1
第3図 調査区設定図 (S=1/800) .....	2
第4図 西壁土層断面図 .....	3
第5図 遺構全体図 (S=1/100) .....	4
第6図 SK1土器出土状況 (S=1/20) .....	6
第7図 SK1出土土器 (S=1/4) .....	7
第8図 SK2土器出土状況 (S=1/20) .....	8
第9図 SK2出土土器 (S=1/4) .....	9
第10図 SK4出土土器 (S=1/4) .....	9
第11図 SK4土器出土状況 (S=1/20) .....	10
第12図 SD3出土土器 (S=1/4) .....	11
第13図 SD4出土土器 (S=1/4) .....	12

第14図	S D12出土土器 ( S = 1/4 )	12
第15図	S D13土器出土状況 ( S = 1/20 )	13
第16図	S D13出土土器 ( S = 1/2、1/4 )	14
第17図	S D14出土土器 ( S = 1/4 )	14
第18図	S X 1 土器出土状況 ( S = 1/30 )	16
第19図	S X 1 出土土器〔 1 〕 ( S = 1/4 )	18
第20図	S X 1 出土土器〔 2 〕 ( S = 1/4 )	19
第21図	S X 1 出土土器〔 3 〕 ( S = 1/4 )	20
第22図	S X 1 出土土器〔 4 〕 ( S = 1/4、1/2 )	21
第23図	遺構外出土土器 ( S = 1/4 )	22
第24図	調査地周辺図 ( S = 1/5000 )	43
第25図	周溝平・断面図 ( S = 1/200 )	44
第26図	表採遺物 ( S = 1/3、1/4 )	46
第27図	調査地周辺図 ( S = 1/5000 )	49
第28図	調査区設定図 ( S = 1/500 )	51
第29図	1～3号墳位置図 ( S = 1/500 )	52
第30図	1号墳墳丘出土土器 ( S = 1/4 )	53
第31図	1号墳墳丘平・断面図 ( S = 1/100 )	54
第32図	1号墳石室 ( S = 1/50 )	56
第33図	1号墳石室内出土土器 ( S = 1/4、1/2 )	57
第34図	1号墳遺物出土状況 ( S = 1/20 )	58
第35図	1号墳出土金環 ( S = 1/2 )	62
第36図	1号墳出土武器 ( S = 1/2 )	63
第37図	1号墳出土石棺 ( S = 1/8 )	63
第38図	1号墳出土金具 ( S = 1/2 )	66
第39図	2号墳墳丘断面図 ( S = 1/100 )	67
第40図	2号墳石室検出状況 ( S = 1/50 )	68
第41図	2号墳石室平面図 ( S = 1/50 )	68
第42図	2号墳石室 ( S = 1/50 )	69
第43図	2号墳遺物出土状況 ( S = 1/20 )	70
第44図	2号墳石室内出土土器 ( S = 1/4 )	72
第45図	2号墳出土石棺 ( S = 1/8 )	74

第46図	2号墳出土金具 (S = 1/2) .....	75
第47図	3号墳墳丘平・断面図 (S = 1/100) .....	76
第48図	3号墳石室検出状況 (S = 1/50) .....	79
第49図	3号墳石室 (S = 1/50) .....	80
第50図	3号墳遺物出土状況 (S = 1/20) .....	82
第51図	3号墳出土土器 (S = 1/4) .....	84
第52図	3号墳出土玉類 (S = 1/1) .....	87
第53図	3号墳出土金環 (S = 1/2) .....	87
第54図	3号墳出土武器 (S = 1/2) .....	88
第55図	3号墳出土金具〔1〕 (S = 1/2) .....	89
第56図	3号墳出土金具〔2〕 (S = 1/2) .....	90
第57図	3号墳出土金具〔3〕 (S = 1/2) .....	91
第58図	1～3号墳石室内出土土器 .....	96
第59図	古墳に使用された石材 .....	102
第60図	調査地周辺図 (S = 1/5000) .....	105
第61図	調査区平・断面図 (S = 1/200、1/80) .....	107

## 表 目 次

第1表	本書報告調査一覧表	
第2表	小穴一覧表 .....	11
第3表	出土遺物観察表 .....	23
第4表	表採遺物観察表 .....	47
第5表	出土遺物観察表 .....	60
第6表	1号墳出土金環計測表 .....	62
第7表	1号墳出土金具計測表 .....	64
第8表	出土遺物観察表 .....	72
第9表	2号墳出土金具計測表 .....	75
第10表	出土遺物観察表 .....	85
第11表	3号墳出土玉類計測表 .....	87
第12表	3号墳出土金環計測表 .....	87
第13表	3号墳出土金具計測表〔1〕 .....	92

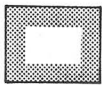
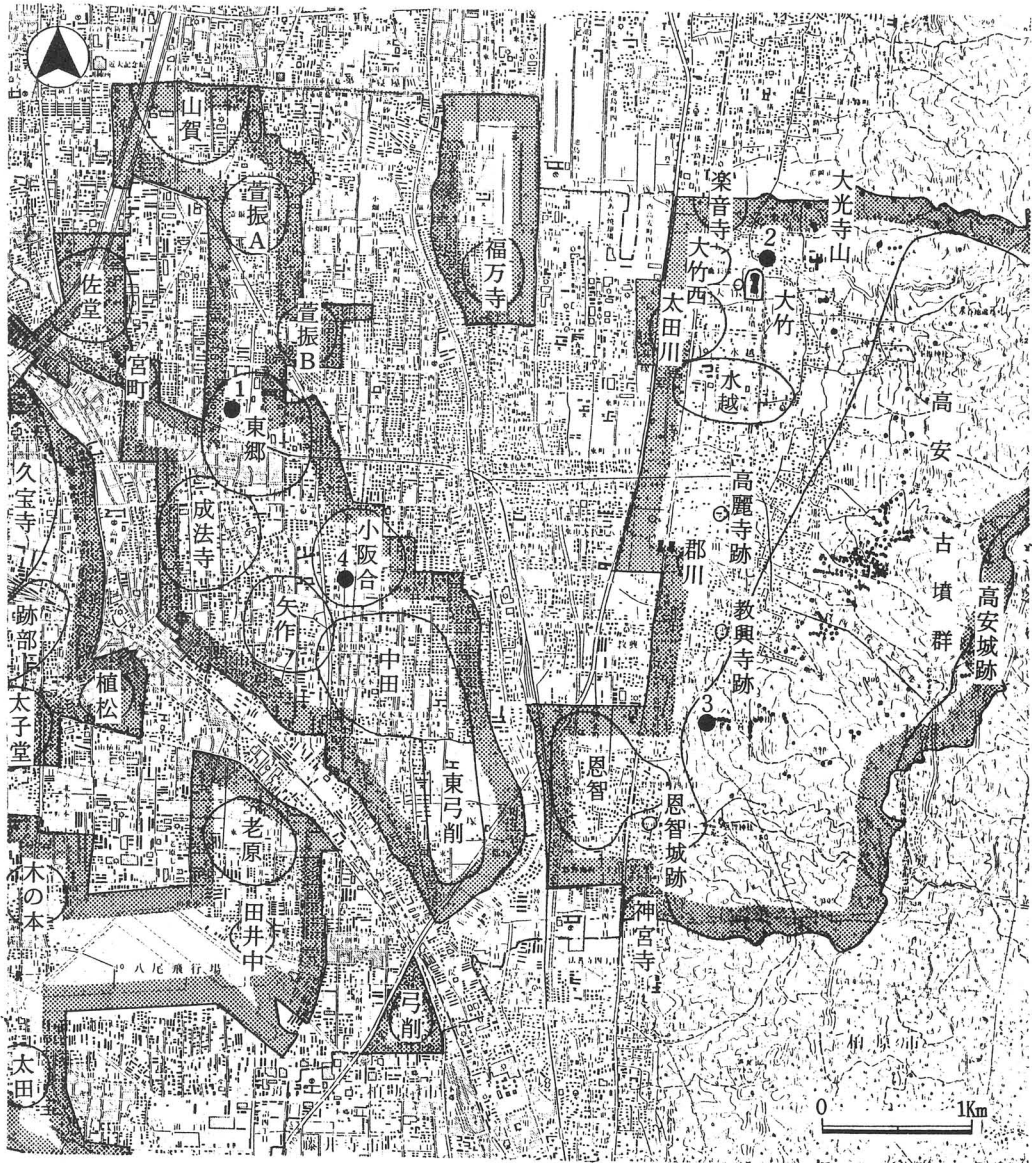


第14表	3号墳出土金具計測表〔2〕	94
第15表	試掘調査一覧表	106
第16表	財団法人八尾市文化財調査研究会事業成果一覧	110
第17表	八尾市教育委員会文化財室調査状況	110
第18表	文化財保護法98-2条に基づく調査結果一覧	111

## 図 版 目 次

図版1	東郷遺跡	遺構検出状況、S X 1 土器出土状況
図版2	東郷遺跡	S X 1 土器出土状況
図版3	東郷遺跡	S X 1 土器出土状況、S K 2 土器出土状況
図版4	東郷遺跡	S K 1 土器出土状況、S K 4 土器出土状況
図版5	高安古墳群	調査前全景
図版6	高安古墳群	調査前全景 3号墳付近、1号墳石室
図版7	高安古墳群	1号墳
図版8	高安古墳群	1号墳石室、1号墳石室奥壁
図版9	高安古墳群	1号墳側壁、1号墳石室遺物出土状況
図版10	高安古墳群	1号墳奥壁付近遺物出土状況、1号墳石室遺物出土状況
図版11	高安古墳群	1号墳奥壁付近遺物出土状況
図版12	高安古墳群	1号墳袖部遺物出土状況
図版13	高安古墳群	2号墳石室全環出土状況、2号墳石室検出状況
図版14	高安古墳群	2号墳石室、2号墳石棺材出土状況
図版15	高安古墳群	2号墳側壁
図版16	高安古墳群	3号墳石室遺物出土状況
図版17	高安古墳群	3号墳全景、3号墳石室検出状況
図版18	高安古墳群	3号墳石室
図版19	高安古墳群	3号墳奥壁、3号墳側壁奥壁→羨道部
図版20	高安古墳群	3号墳側壁奥壁→羨道部
図版21	高安古墳群	3号墳側壁奥壁→羨道部
図版22	高安古墳群	3号墳側壁奥壁→羨道部
図版23	高安古墳群	3号墳石室遺物出土状況、3号墳石室羨道部遺物出土状況
図版24	高安古墳群	3号墳袖部遺物出土状況、3号墳羨道部遺物出土状況

- 図版25 高安古墳群 3号墳石室金環・鉄製品出土状況、3号墳石室管玉出土状況
- 図版26 高安古墳群 3号墳石室金環・鉄製品出土状況、3号墳金環出土状況
- 図版27 高安古墳群 3号墳鉄製品出土状況
- 図版28 高安古墳群 3号墳直刀出土状況、現地説明会風景
- 図版29 小阪台遺跡 遺跡破壊状況、調査状況、遺構面調査状況
- 図版30 小阪台遺跡 土層断面、完掘状況、布留式土器出土状況
- 図版31 東郷遺跡出土土器
- 図版32 東郷遺跡出土土器
- 図版33 東郷遺跡・大竹遺跡・高安古墳群出土土器
- 図版34 高安古墳群出土土器
- 図版35 高安古墳群出土土器
- 図版36 高安古墳群出土土器
- 図版37 高安古墳群出土土器
- 図版38 高安古墳群出土土器・金属製品
- 図版39 高安古墳群出土金属製品
- 図版40 高安古墳群出土金属製品
- 図版41 高安古墳群出土金属製品
- 図版42 高安古墳群出土金属製品
- 図版43 高安古墳群出土金属製品



八尾市域で土木建築の工事を行う場合、文化財保護法第57条の2  
による届出を必要とする区域

第1図 八尾市埋蔵文化財分布図 (S = 1/5万)

第1表 本書報告調査一覧表

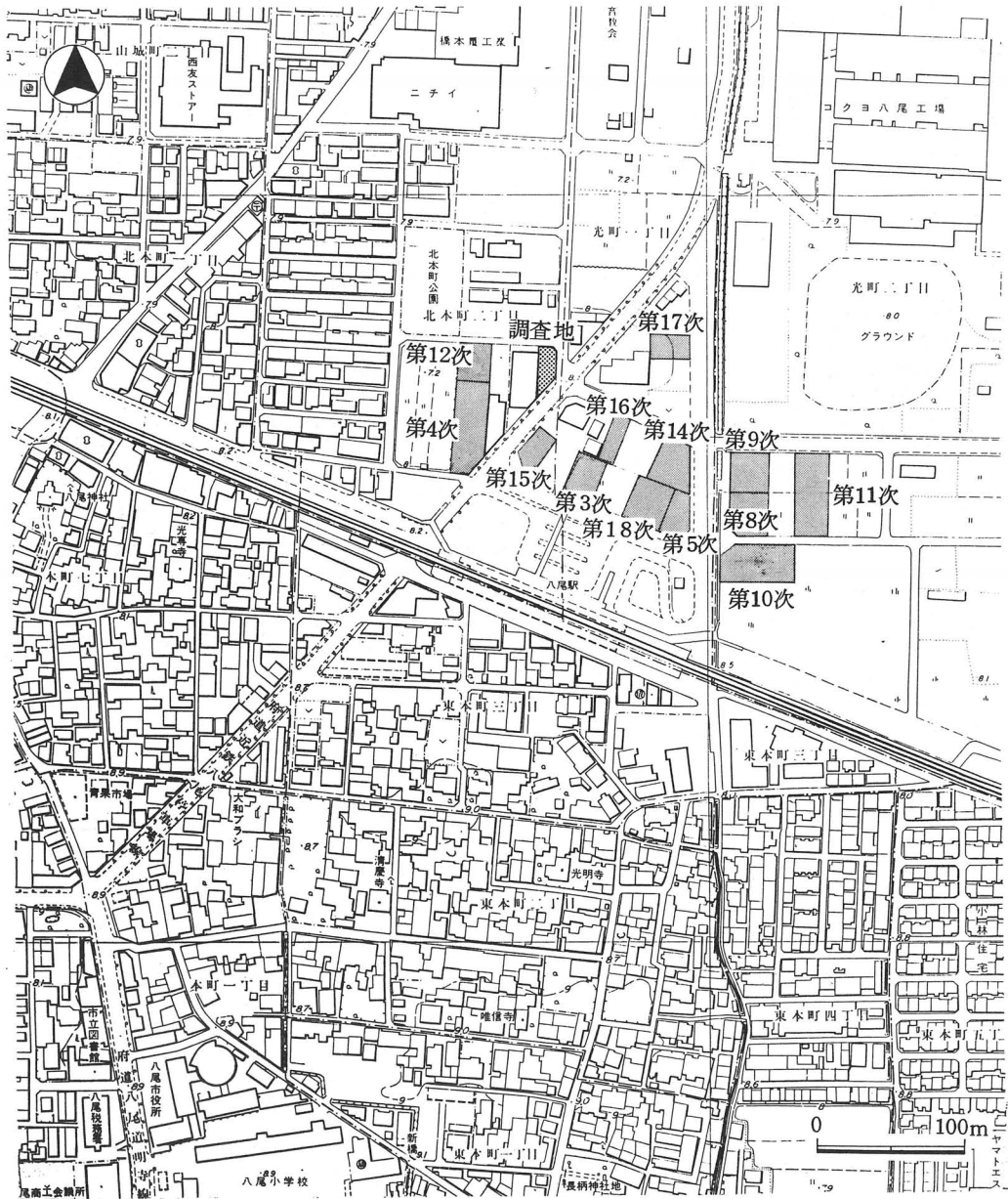
番号	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積
1	東郷遺跡	北本町2丁目232	昭和60年4月1日～4月27日	207 m <sup>2</sup>
2	大竹遺跡	楽音寺2丁目40	昭和60年6月3日	110 m <sup>2</sup>
3	高安古墳群	垣内412-1他、教興寺561・562	昭和60年6月6日～7月15日	300 m <sup>2</sup>
4	小阪合遺跡	小阪合町1丁目	昭和61年2月7日～2月8日	20 m <sup>2</sup>

# 1. 東郷遺跡の調査

調査地 八尾市北本町2丁目232

調査面積 207 m<sup>2</sup>

調査期間 昭和60年4月1日～4月27日



第2図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

## 1. 調査の経過

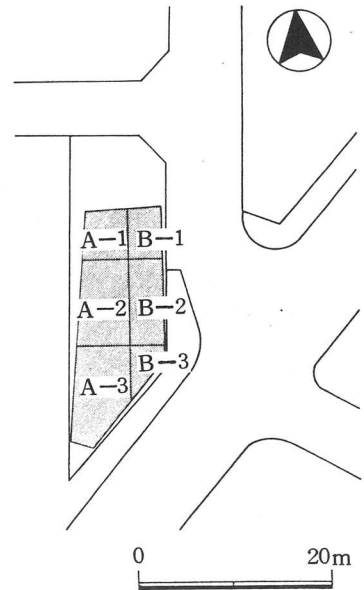
東郷遺跡の一面にあたる北本町2丁目232において昭和60年2月4日付で 氏よりビル建設を計画している旨の届け出に基づき、昭和60年2月13日に試掘調査を行なったところ、古式土師器を含む遺構を検出した<sup>1)</sup>。その結果、基礎工事で当該遺構を破壊されることが明らかであるので、全面発掘による記録保存を行なうことに決定した。

調査は申請者より調査労務、資材等の提供を受け、市教育委員会文化財室職員が当該調査に立会い、掘削を指導する形で実施した。当該調査地周辺では、昭和56年以来、近鉄八尾駅前のビル建築に伴う発掘調査を断続的に実施している。付近からは、弥生時代～庄内・布留式期に至る時期の井戸、住居跡、方形周溝墓等が検出されており、八尾市内の遺跡の中でも比較的実態が把握された地区である<sup>2)</sup>。調査は昭和60年4月1日より開始し同4月27日に終了した。(米田)

## 2. 調査の方法

試掘調査によって、調査区内中央付近で表土下160cmの灰色粘土より古式土師器の出土が確認された。その結果、表土下140cm付近の第6層上面まで機械掘削したのち、手掘りで調査を行なった。

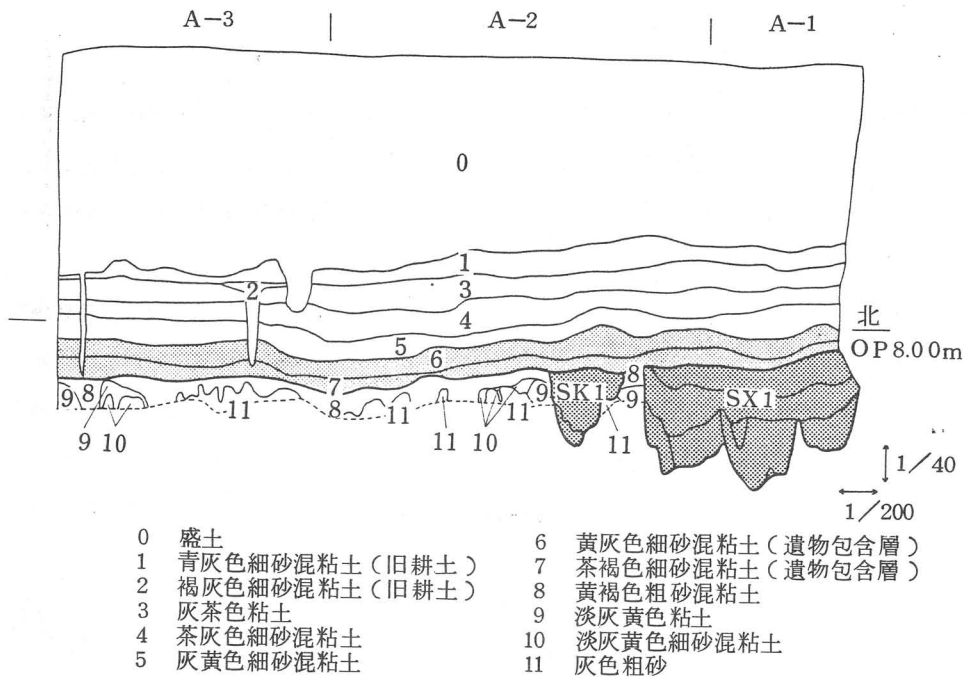
調査区の地区割については、調査地の北東・北西隅にある2本の八尾市境界杭を基準とし、東西ラインを設定した。南北ラインは東西ラインに直交させ、ほぼ調査区を東西に二分するよう設定した。10m毎に南北ラインを区切り、北から1・2・3とし、東西をA・Bで表わした。調査区は6区に区割され、各区は数字とアルファベットの組み合わせで呼称した。



第3図 調査区設定図(S=1/800)

## 3. 層位

調査区の層位は、第4図に示すとおりである。盛土下に第1層 青灰色細砂混粘土がみられ、部分的に第2層 褐灰色細砂混粘土が堆積する。以下、第3層 灰茶色粘土、第4層 茶灰色細砂混粘土、第5層 灰黄色細砂混粘土、第6層 黄灰色細砂混粘土、第7層 茶褐色細砂混粘土、第8層 黄褐色粗砂混粘土、第9層 淡灰黄色粘土、第10層 淡灰黄色細砂混粘土、第11層 灰色粗砂が堆積する。



第4図 西壁土層断面図

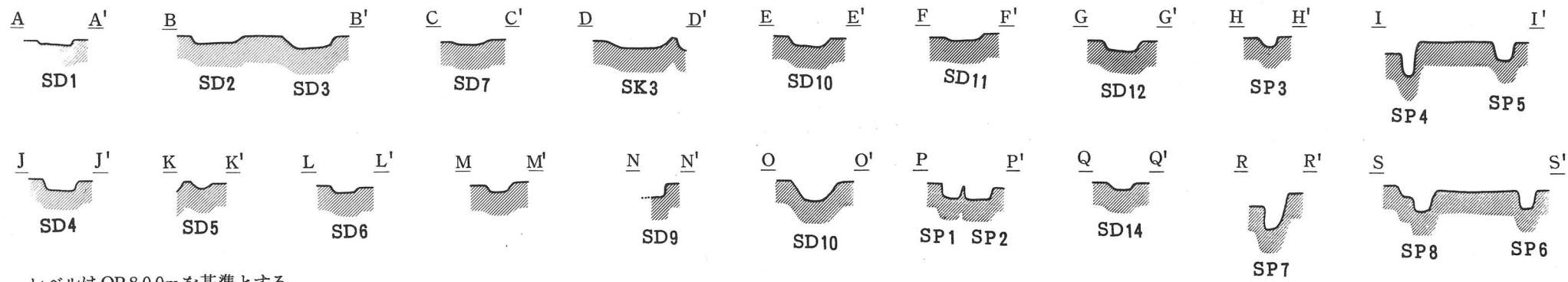
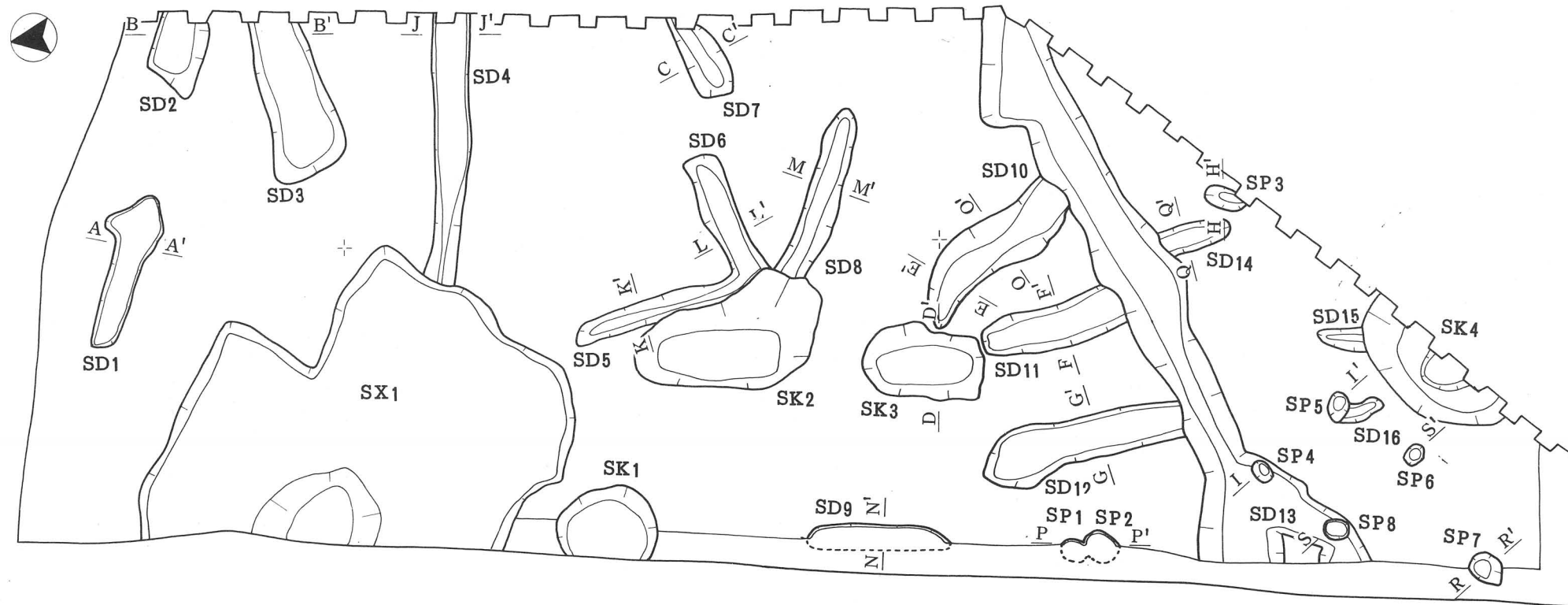
第1・2層は旧耕土である。第6・7層は遺物包含層で、古墳時代初頭の遺物、古墳時代後期の遺物、鎌倉時代～室町時代の遺物をまばらに含む。量的には古墳時代初頭の遺物が最も多く、古墳時代後期の遺物、鎌倉時代～室町時代の遺物は少量である。第8層上面では古墳時代初頭・古墳時代後期の遺構が検出された。第8層上面はOP 7.7m～7.9mを測り、北側が徐々に高くなっている。第8層以下は複雑で、粗砂・細砂・粘土がブロック状に堆積している。第8層以下には遺物は含まれておらず、人為的な痕跡も認められなかった。したがって、当調査区では自然環境が安定し、古墳時代初頭になって初めて居住地として利用されたものと考えられる。

#### 4. 検出遺構・出土遺物

当調査区では第8層（黄褐色粗砂混粘土）上面のOP 7.7～7.9m付近で古墳時代初頭の土坑4基（SK1～4）・小穴8個（SP1～8）・溝15条（SD1～3・5～16）・不明遺構1ヶ所（SX1）、古墳時代後期の溝1条（SD4）が検出された。（第5図、図版1）

##### 1. 土坑

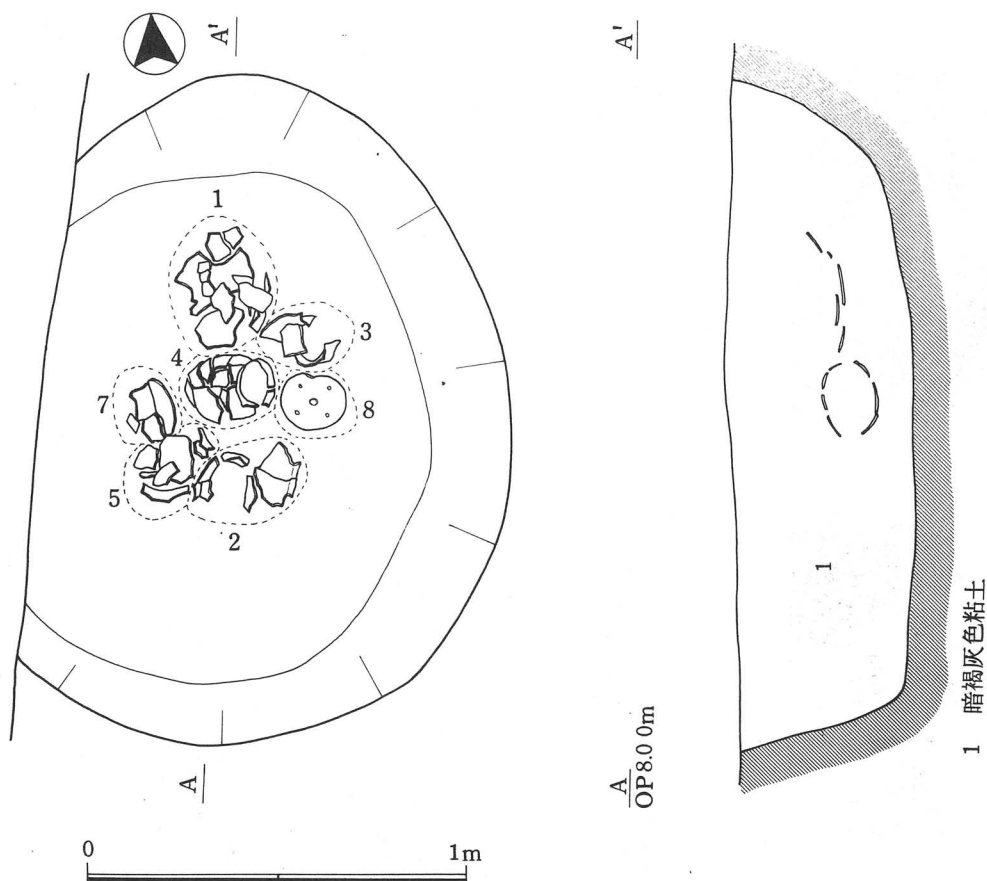
SK1（第6図、図版4） A-2区で検出された、西側は調査区外に及ぶため全体は不明



レベルはOP 8.0mを基準とする



第5図 遺構全体図 (1/100)

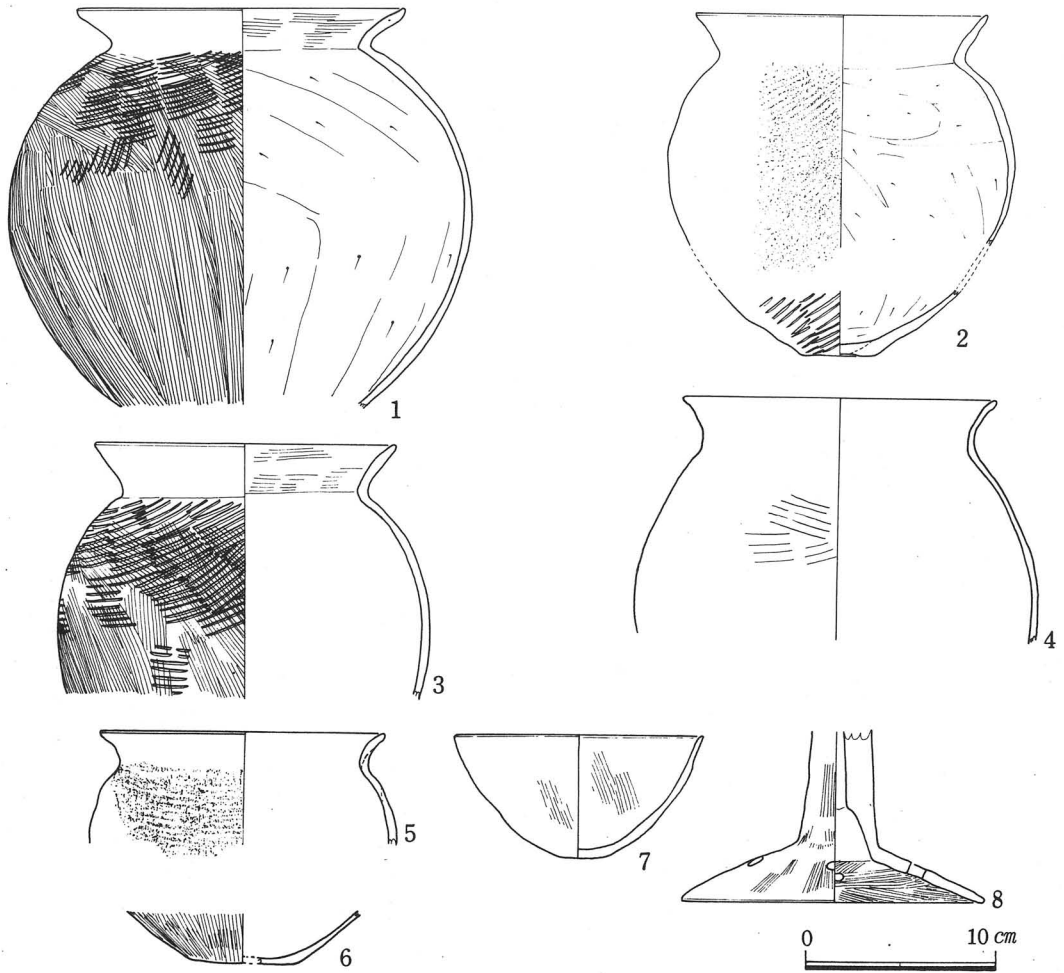


第6図 SK1 土器出土状況 (S=1/20)

である。平面形は楕円形を呈すると思われる、長径1.8m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土で、下部より甕(1~6)、鉢(7)、高杯の脚部(8)がほぼ同レベルで出土した。中央に4が口縁部を斜上方に向けた状態で胴部中位~底部を一部欠損して出土した。4を取り囲むように1~3・5がいずれも口縁部を下に向けた状態で胴部下半~底部を欠損して出土した。7・8は底部を下にした状態で出土した。いずれも破損しているのは上部のみであることより、破損した土器を投棄したものではなく、意識的に完形土器を土坑内に裾え置いたもので、いくらかの時間の経過ののち、埋没したものであろう。

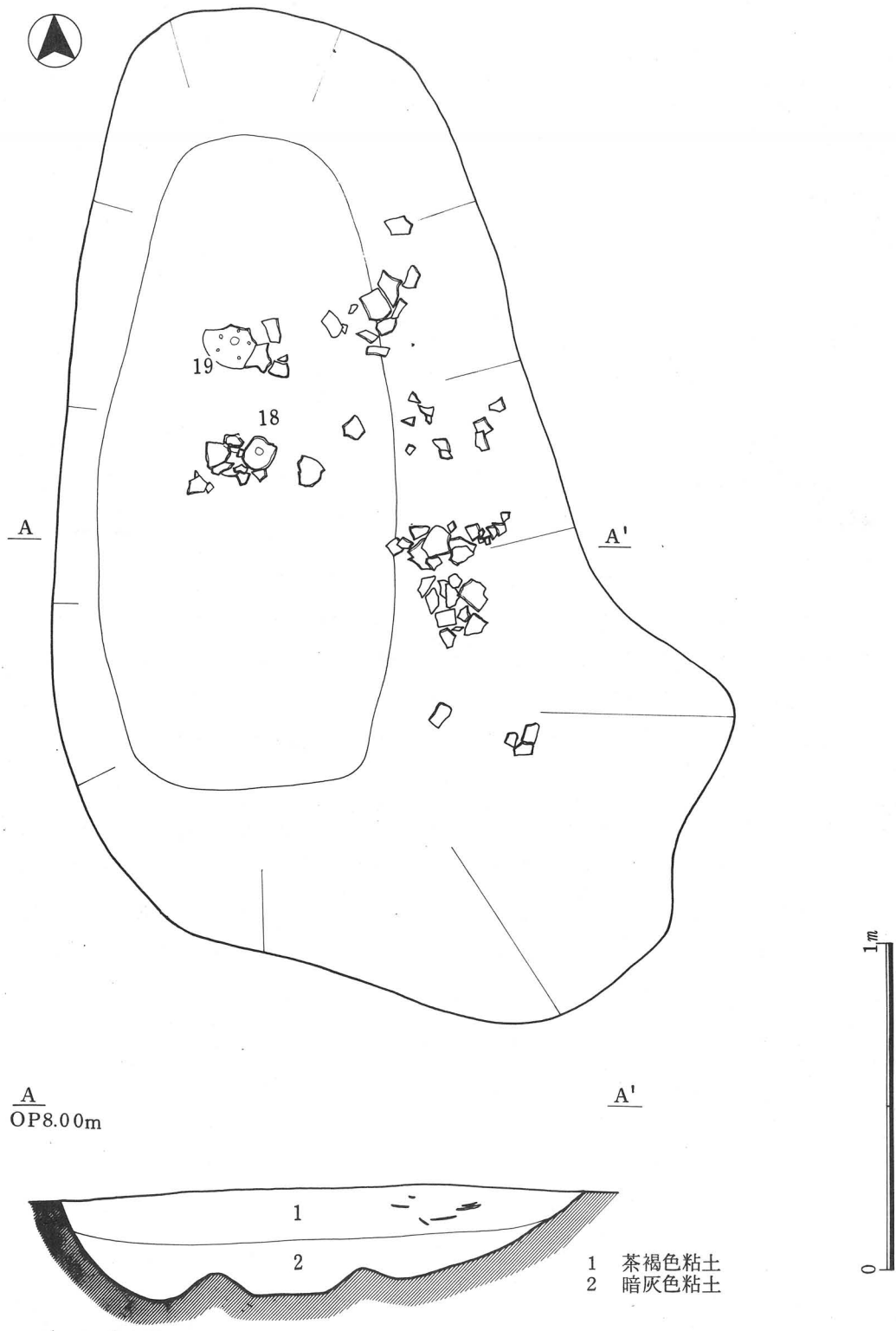
1~4は生駒西麓産以外の胎土をもつ甕で、おそらく東郷遺跡の周辺で製作されたものであると思われる。1は若干口縁端部がつまみ上げられており、内面にヘラケズリが施される。2は1と同様内面にヘラケズリが施されており、平底の底部をもつ。形態的には第V様式の特徴をもつが、製作技法の一部に庄内式の要素が認められる。5はいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ、第V様式の甕である。また、7は矮少化した平底をもち、形態的には庄内式の特徴が認められる。



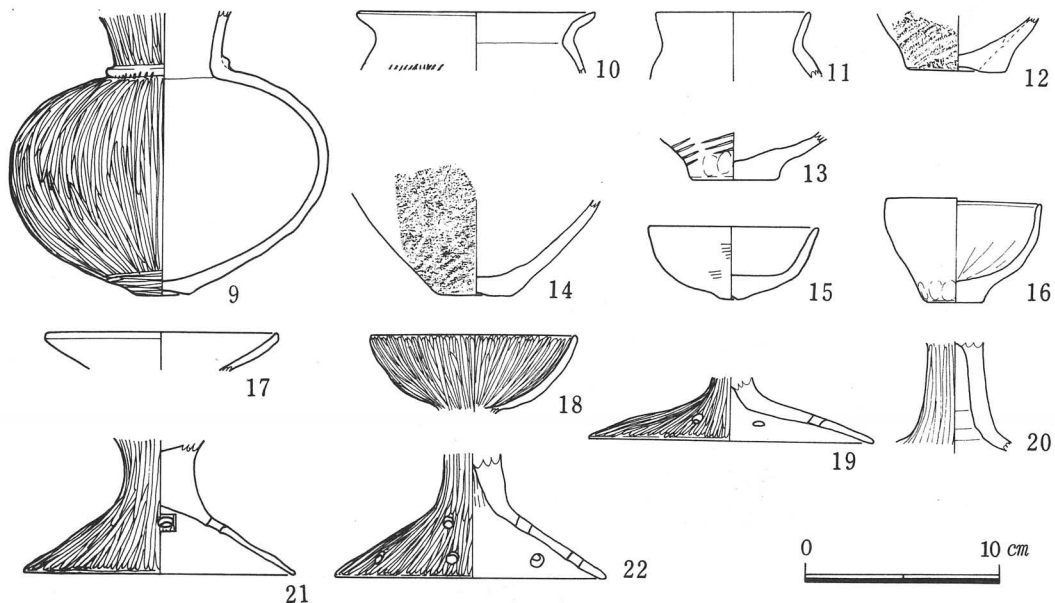


第7図 SK1 出土土器 (1/4)

SK2 (第8図、図版3) A-2区で検出された。平面形は不整円形を呈し、南北2.9～3.1m、東西1.5～2.1m、深さ0.2～0.3mを測る。底面は凹凸がみられ、平坦ではない。埋土は2層に分層され、上層には茶褐色粘土、下層には暗灰色粘土が堆積する。土器は主に茶褐色粘土から出土した。土器はほとんどが小破片で、散乱した状態で出土した。土器には煤が付着することから、使用時に破損した土器を土坑が幾分埋没したのち、投棄したものであろう。壺(9)、甕(10～14)、鉢(15・16)、器種不明の口縁部(17)、高坏(18～22)の他、少量のV様式系甕の口縁部・胴部破片、庄内式甕の口縁部・胴部破片がみられる。9はキサミメをもつ突帯を頸部下端にめぐらしており、装飾性をもつ。10・11は生駒西麓の胎土をもつ甕の口縁部である。口縁端部のつまみ上げや内面ヘラケズリはみられない。12～14は平底を呈する甕の底部であり、12に底部輪台技法が認められた。19は低脚の高坏の脚部であらう。19は低脚の高坏の脚部であらう。19は低脚の高坏の脚部であらう。19は低脚の高坏の脚部であらう。



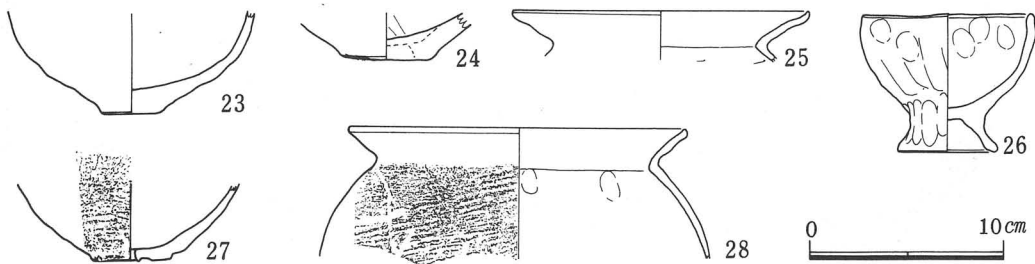
第8图 SK2 土器出土状况 (S=1/20)



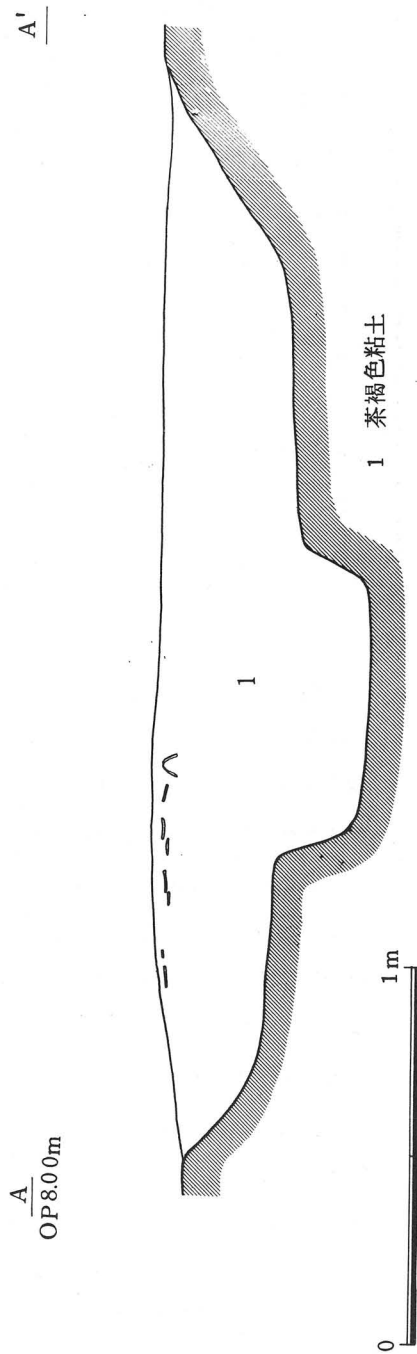
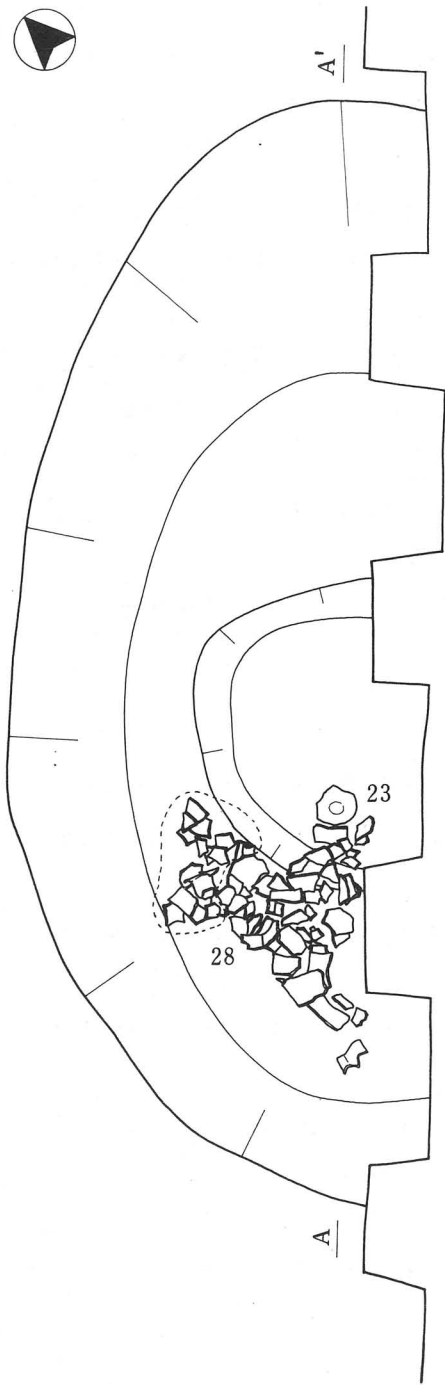
第9図 SK2 出土土器 (S=1/4)

SK3 A-2、A-3区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径2.1m、短径1.3m、深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈す。埋土は茶褐色粘土である。埋土からV様式系・庄内式甕の口縁部破片などが少量出土した。

SK4 (第11図、図版4) B-3区で検出された。南西側は調査区外に及び、全体は不明である。平面形は円形を呈すると思われ、2.9m以上×1.1m以上を測る。検出面より深さ0.3~0.4mで中央部に径0.8mの円形のくぼみがみられた。深さは0.5~0.6mを測る。底は湧水層である粗砂層まで掘り抜かれており、土坑内下部は滞水状態であったものと考えられる。井戸的機能をもつ遺構であろう。埋土は茶褐色粘土の単一層であり、遺物は茶褐色粘土上部で出土した。壺の底部(23・24)、甕の口縁部(25・28)、鉢(26)、甕の底部(27)などがみられた。いずれも小破片であり、完形品はみられなかった。埋土が単一層であること、小破片の集積が埋土上部にみられたことより、土坑を埋め戻したのち、くぼみに土器片を投棄したものと思われる。



第10図 SK4 出土土器 (S=1/4)



第11図 SK4 土器出土状況 (S = 1/20)

## 2. 小 穴

調査区内で8個の小穴（SP1～SP8）が検出された。いずれも調査区南部のA-3・B-3区で検出された。SP4～SP6・SP8は掘立柱建物を構成する柱穴である可能性もあるが、平面プランが若干歪であるため、可能性を指摘するにとどめたい。

第2表 小穴一覧表

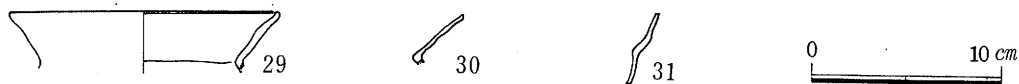
遺構番号	平面形	径 (m)	深さ (m)	出 土 遺 物	備 考
SP1	円?	0.4以上	0.3	なし	側溝によって切られ全体不明。
SP2	円?	0.6以上	0.2	なし	
SP3	楕円	0.6×0.3	0.2	V様式系甕胴部破片	南側は調査区外に及ぶ。
SP4	円	0.3	0.6	庄内式甕胴部破片	SD13と重複。
SP5	円	0.3×0.4	0.3	庄内式甕胴部破片	SD16と重複。
SP6	円	0.3	0.3	V様式系・庄内式甕胴部破片	
SP7	円	0.5	0.7	V様式系甕胴部破片	
SP8	円	0.4	0.4	器種不明の小破片	SD13と重複。

## 3. 溝

**SD1** A-1・A-2区で検出された。南東から北西方向に伸びるもので、全長2.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は茶褐色粘土である。埋土からV様式系甕・庄内式甕の胴部破片などが少量出土した。

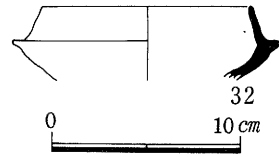
**SD2** A-2区、SD1の東方で検出された。東側は調査区外に及ぶため、全体は不明である。南東から北西方向に伸びるもので、検出長1.5m、幅0.9m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は茶褐色粘土である。埋土からV様式系甕の胴部破片、庄内甕の口縁部片などが少量出土した。

**SD3** A-2区で検出された。東側は調査区外に及ぶため、全体は不明である。北東から南西方向に伸びるもので、検出長2.6m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は茶褐色粘土である。埋土から甕の口縁部（29・30）、鉢の口縁部（31）が出土した。29は生駒西麓の胎土をもつ庄内式甕で、口縁端部は内傾している。31は小型3種の1つである有段口縁の鉢で、29の庄内式甕と共伴している。



第12図 SD3 出土土器 ( = 1/4 )

SD4 A-2・B-2区で検出された。東西に伸び、東側は調査区外に及ぶ。西側では、SX1と重複する。埋土は茶褐色粘土で、SX1の埋土と識別は困難であり、SX1より遺構が浅いことより、西側は不明である。検出長4.6m、幅0.5~0.7m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土より須恵器蓋坏(32)が出土した。6世紀前半のものであろう。



第13図 SD4 出土土器  
(S=1/4)

SD5 A-2区で検出された。南北に伸び、SK2、SD6と重複する。埋土は茶褐色粘土で、埋土の識別による切り合い関係は不明である。検出長4.6m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面は浅いU字状を呈する。V様式系・庄内甕の胴部破片が出土した。

SD6 A-1・B-2区で検出された。北東から南西に伸びるもので、SD5・SK2と重複する。埋土は茶褐色粘土で、埋土の識別による切り合い関係は不明である。検出長2.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。

SD7 B-2区で検出された。北東から南西に伸びるもので、東側は調査区外に及ぶため、全体は不明である。検出長1.4m、幅0.4~0.7m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は茶褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

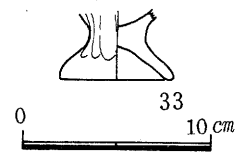
SD8 A-2・B-2区で検出された。南東から北西に伸びるもので、西側はSK2と重複するため不明である。埋土は茶褐色粘土で埋土の識別による切り合い関係は不明である。検出長3.0m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈する。V様式系甕の胴部破片などが少量出土した。

SD9 A-2・A-3で検出された。南北に伸び、西側は側溝によって切られているため不明である。全長2.3m、検出幅0.2m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色粘土で、V様式系甕の胴部破片などが少量出土した。

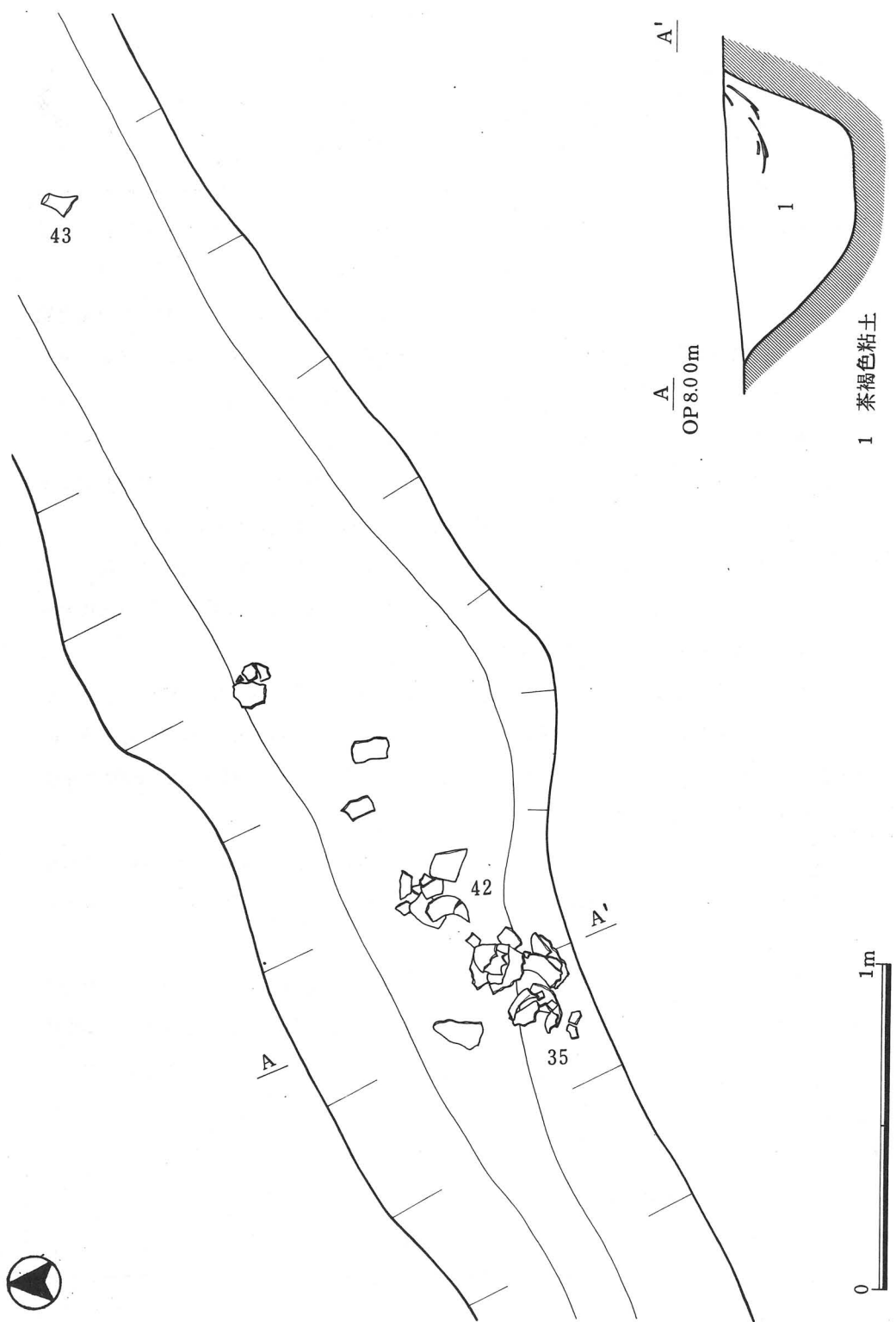
SD10 A-2・A-3・B-3区で検出された。北西から南東に伸びるもので、SD13と同様茶褐色粘土である。検出長3.0m、幅0.9mを測る。断面は浅い皿状を呈するが、中央部のみが深くなり、U字状を呈する。深さは北側で、0.1m、中央部分で0.3mを測る。埋土からV様式系甕の胴部破片などが少量出土した。埋土・遺物のいずれもSD13との時期差は認めがたいことよりSD13と同時期に機能していたと考えられる。

SD11 A-3区で検出された。北から南に伸びるもので、南側でSD13と重複する。検出長2.5m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土はSD13同様茶褐色粘土で、器種不明の小破片が出土した。

SD12 A-3区で検出された。南北に伸び南側でSD13と重複する。埋土はSD13同様茶褐色粘土である。検出長3.5m、幅0.6~1.0m、深さ



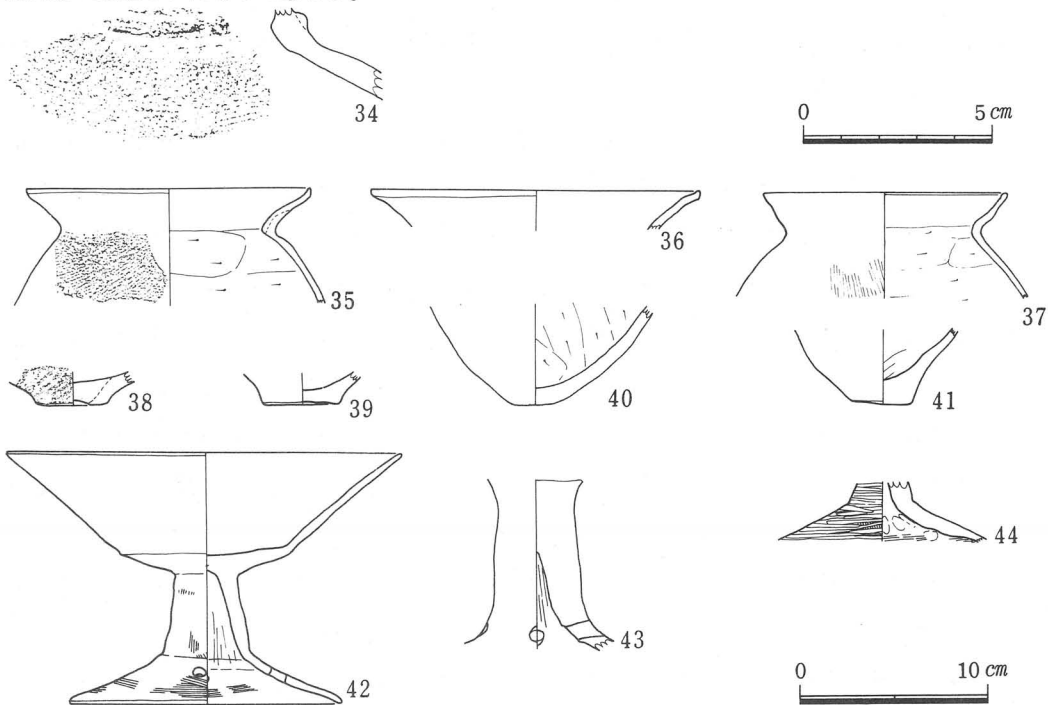
第14図 SD12出土土器  
(S=1/4)



第15図 SD 13 土器出土状況 (S = 1/20)

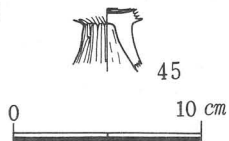
0.2mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土よりV様式系甕の胴部破片が出土した。したがって、S D13と同時期に機能していたものと考えられる。

S D13 (第15図) A-3・B-3区で検出された。調査区内を北東から南西に伸びる。両端はいずれも調査区外に及ぶため全体は不明である。南西部では2本に分流する。検出長10.5m、幅0.8~1.5m、深さ0.2~0.4mを測る。断面はU字状を呈する。埋土は茶褐色粘土で、茶褐色粘土上部より壺の頸部破片(34)、甕の口縁部(35~37)、底部破片(38~41)、高坏(42~44)が出土した。いずれも破片であり、埋土上部より出土したことより、溝の埋没最終期に投棄されたものであろう。



第16図 S D13 出土土器 (S=1/2、1/4)

S D14 A-3・B-3区で検出された。南北に伸び、北側でS D13と重複する。埋土はS D13同様茶褐色粘土である。検出長1.2m、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土より器種・時期不明の小片が出土した。



第17図 S D14出土土器 (S=1/4)

S D15 A-3区で検出されたもので、南北に伸び、南側はSK 4と重複する。埋土はSK 4と同様である。検出長0.8m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。土器は出土しなかった。SK 4に付属する施設であるかもしれない。

S D16 A-3区で検出された。南北に延びるものでSP 5と重複する。埋土はSP 5と同



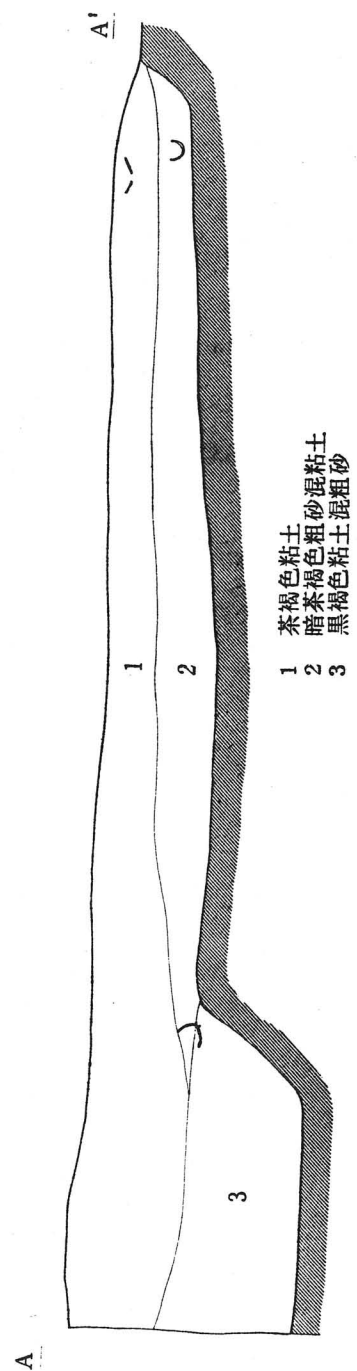
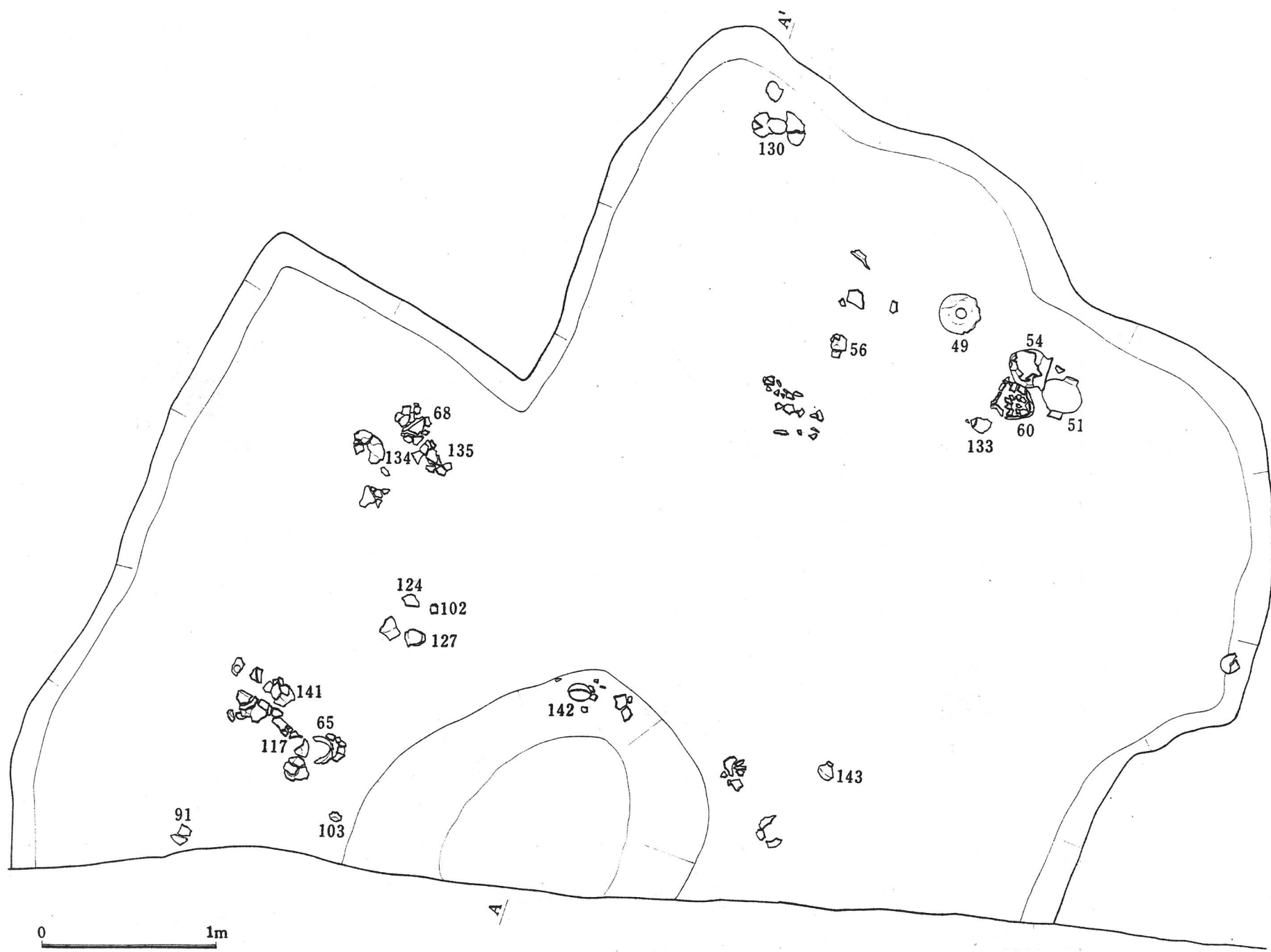
様茶褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

#### 4. 不明遺構

**SX1** (第18図、図版1・2) A-1、A-2区で検出された。西側は調査区外に及ぶため全体は不明である。平面形は不整形を呈する。北東から南西は4.5~6.0 mを測る。西側中央は検出面より深さ0.4mで径2.0mの円形の二段掘りになり、底までの深さは0.9mを測る。遺構の底は灰色粗砂層に達し、湧水がみられる。埋土は3層に分層され、上から1.茶褐色粘土、2.暗褐色粗砂混粘土、3.黒褐色粘土混粗砂となる。茶褐色粘土は西側中央のくぼみ部にのみ堆積しており、若干の炭化物を含む。遺物は1・2層から出土した。ほぼ完形を呈するものや、破片の大部分は2層から出土した。これらの土器は遺構機能時、または西側中央部のくぼみ埋没後すぐに投棄されたものと考えられよう。

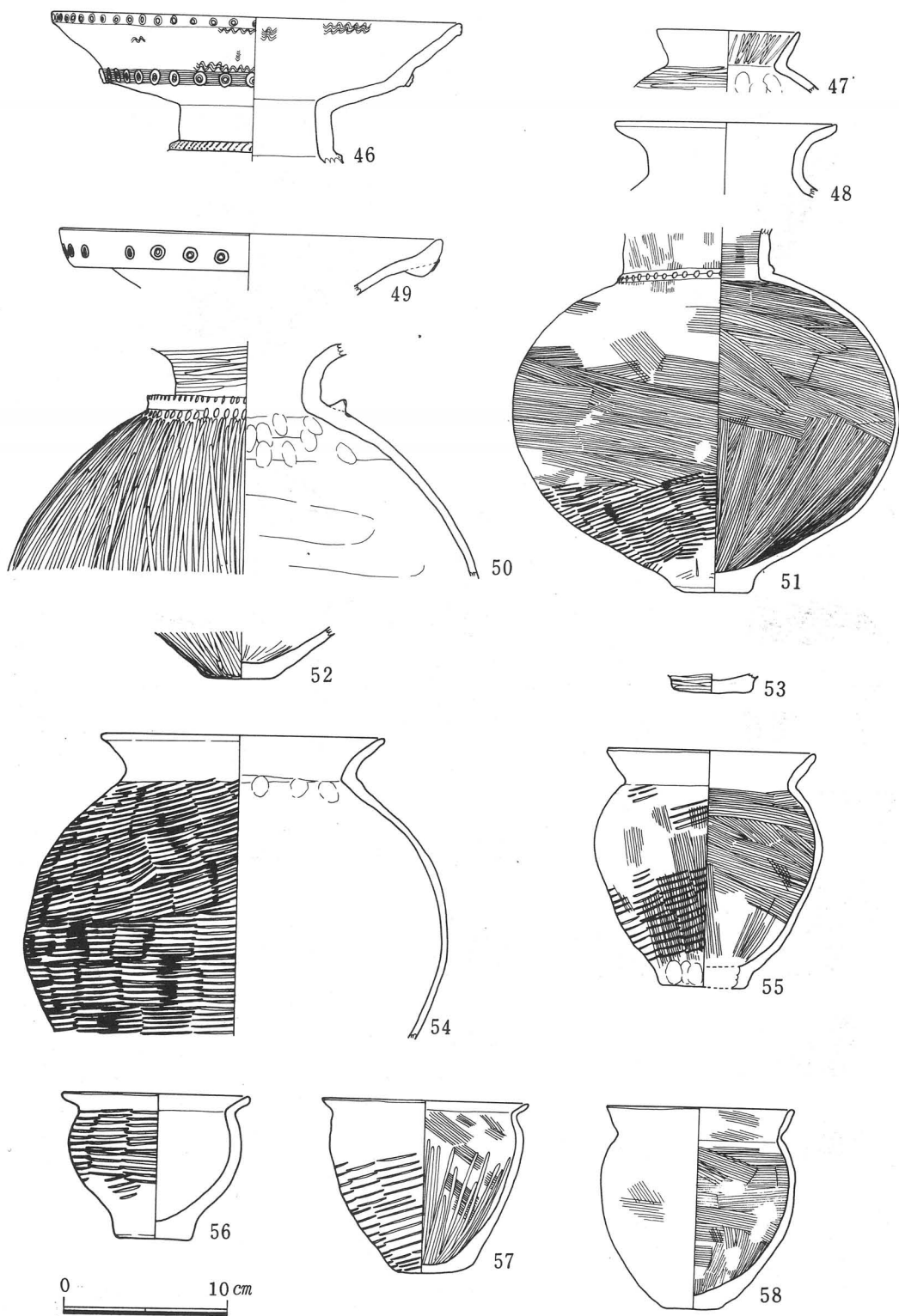
遺物には壺(46~53)、甕(54~123)、甑の底部(124~125)、鉢(126~137)、高坏(139~151・153)、器台(152・154~156)、ミニチュア高坏(157)・鉢(158)・水鳥(159)がある。46・49は複合口縁の壺である。50・51は46同様頸部下端にキザミをもつ突帯をめぐらす。これらはいずれも装飾性をもつ壺である。54・60は生駒西麓以外の胎土をもつ甕である。54は底部が不明であるが、口縁部の形態、タタキの幅には第V様式の特徴がみられる。60は内面にヘラケズリが施され、尖り底の底部をもち、一部に庄内式の要素がみられる。59は生駒西麓の胎土をもつ甕で、口縁部が若干つまみ上げられており、尖り底の底部をもつが、内面ヘラケズリは施されない。61は生駒西麓の胎土をもち、つまみ上げられた口縁部、細筋のタタキ、内面ヘラケズリをもつ庄内式甕である。61以外で庄内式の特徴をもつ甕は68のみで、他はいずれも第V様式の特徴をもつ。また、大部分の甕には煤が付着しており、煮沸具として日常使用されたものであることがわかる。鉢は平底のもの(126・127・130・131)と尖り底のもの(132~135)の両方がみられる。高坏は坏部が外反するもの(139~141)と碗形を呈するもの(142・143)がみられる。152は加飾された器台の脚部である。157~159はミニチュア土器である。157は高坏のミニチュアである。輪積み成形によるもので、丁寧に調整されている。158は手堀ね成形によるもので、鉢形を呈している。159は水鳥のミニチュアである。頭部の他は欠損しており、全体は不明である。

以上より、SX1は湧水層まで掘り込まれていることから、水溜まり機能をもつと思われる。日常容器の他に祭祀的性格をもつミニチュア土器が出土していることから、その機能に対する祭祀が行なわれたものと思われる。

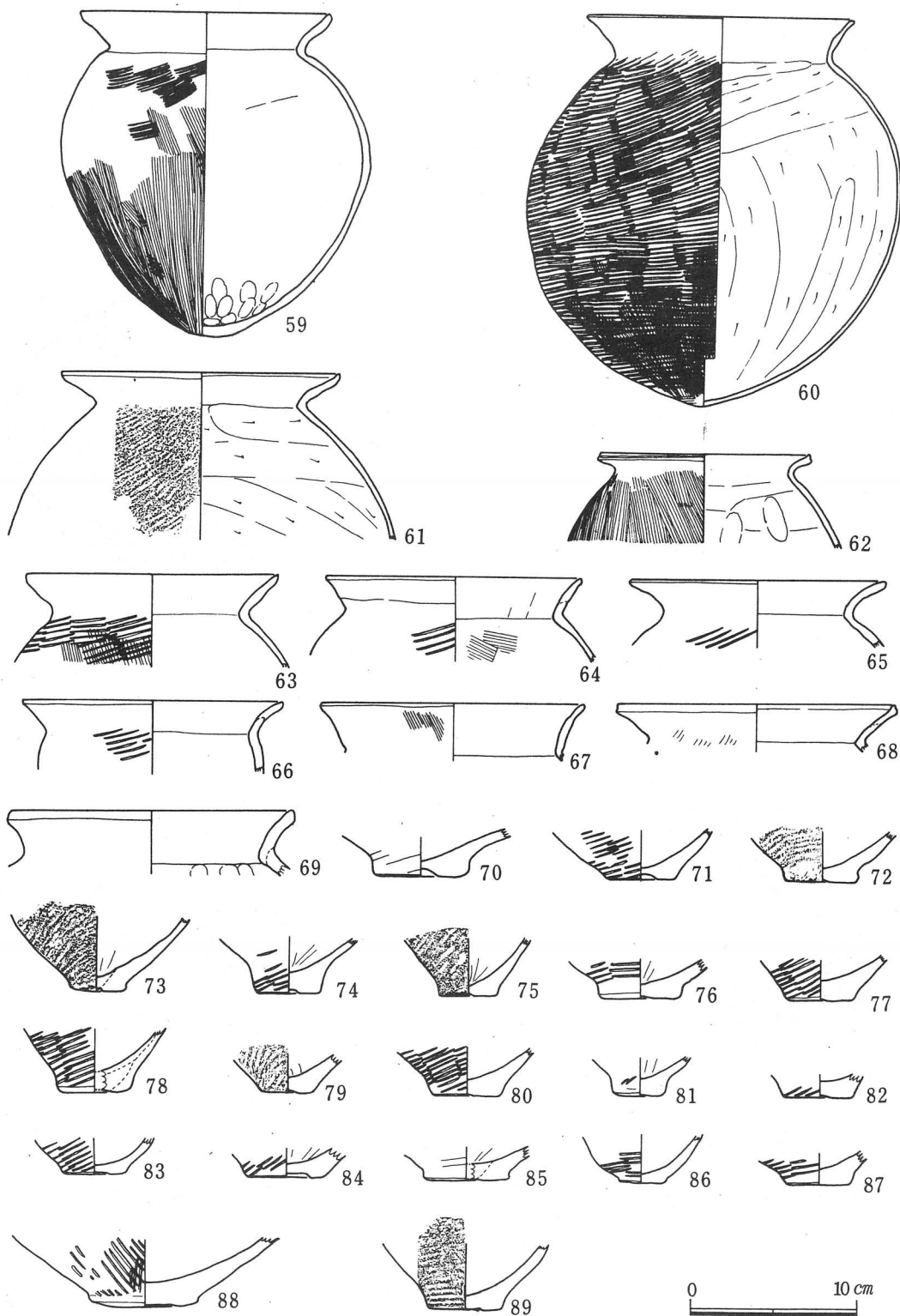


1 茶褐色粘土  
 2 暗茶褐色粗砂混粘土  
 3 黑褐色粗砂混粗砂

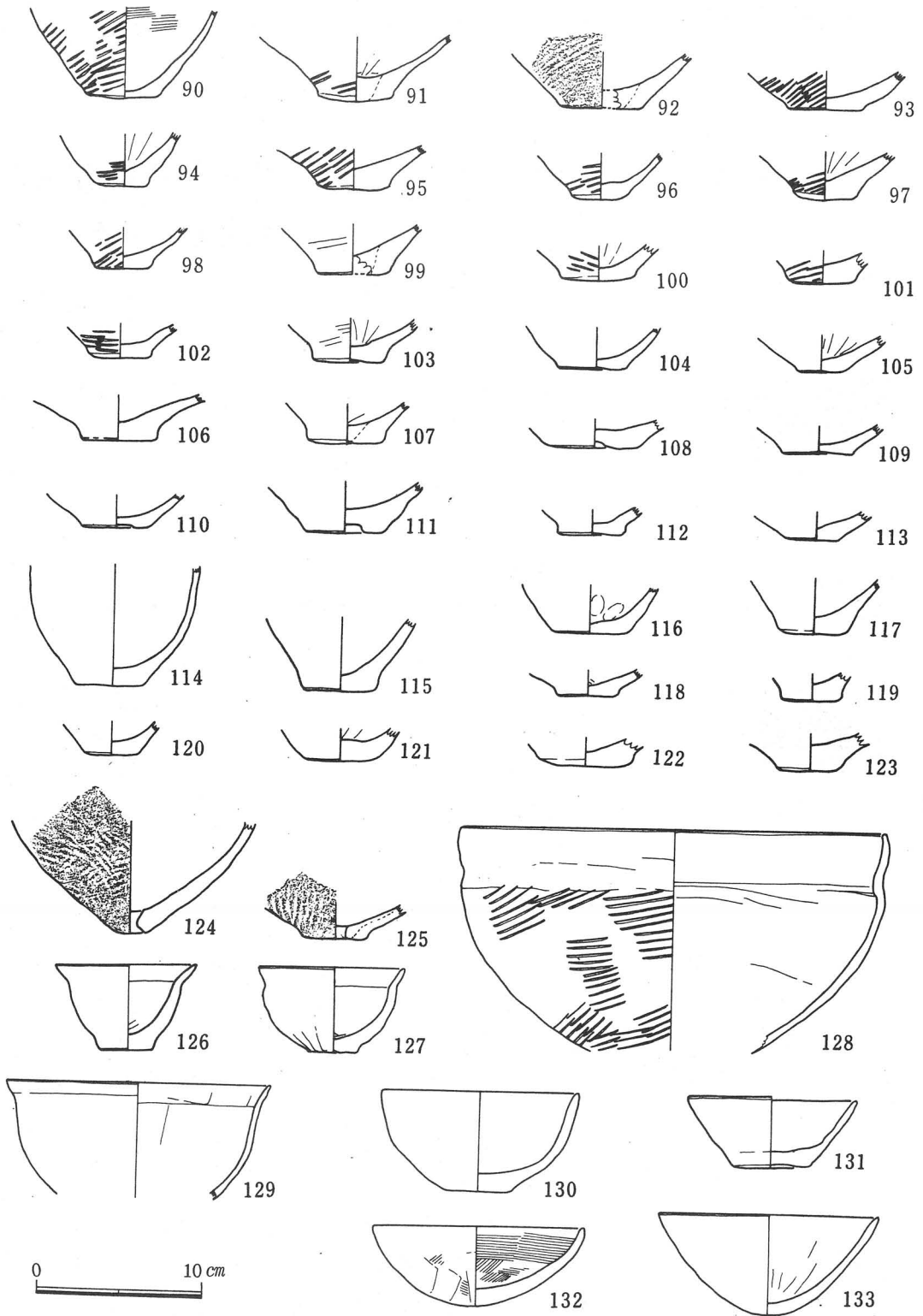
第18图 S x 1 土器出土状况 (S = 1/30)



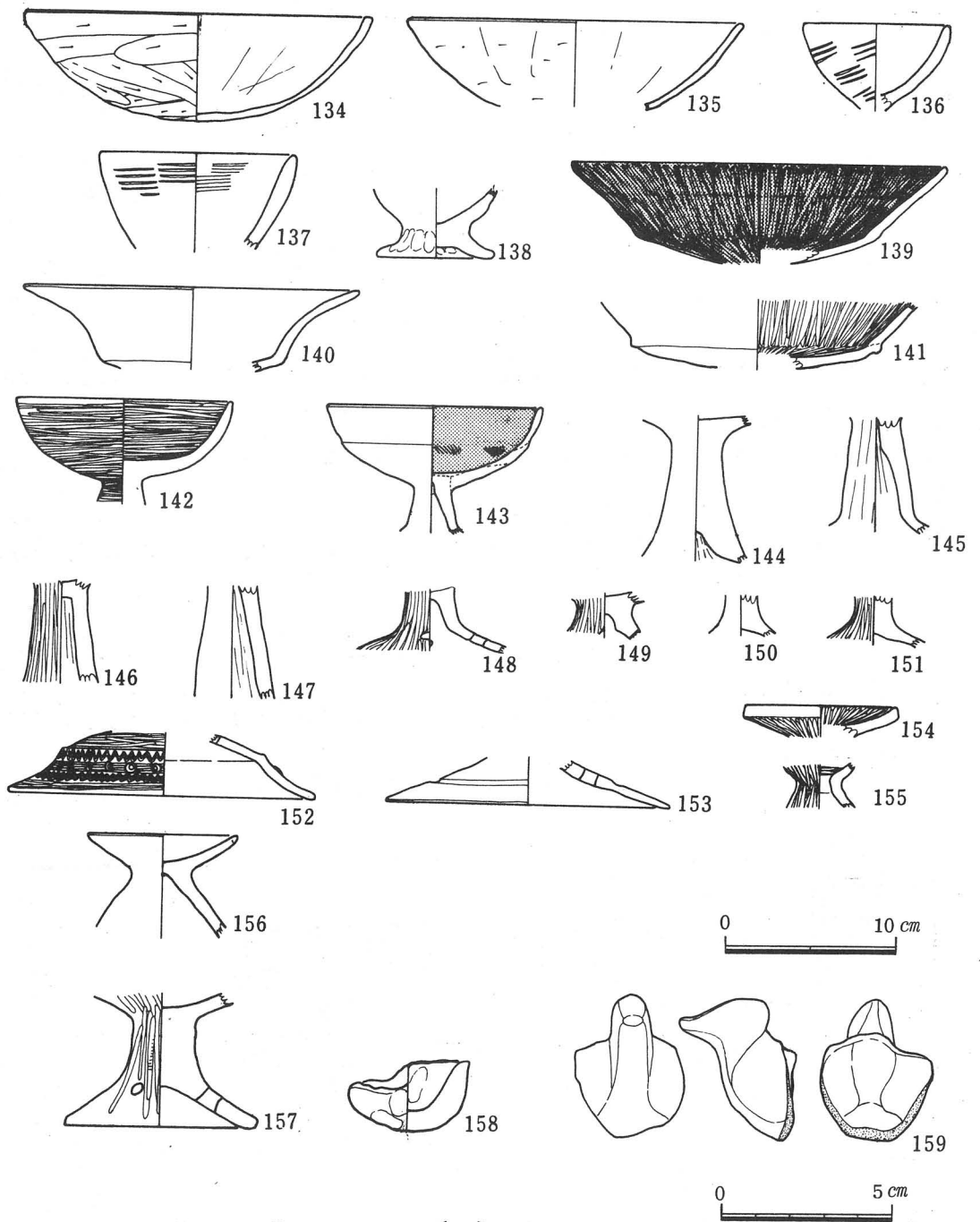
第19图 S × 1出土土器〔1〕 (S = 1/4)



第20图 S X1 出土土器〔2〕(S=1/4)



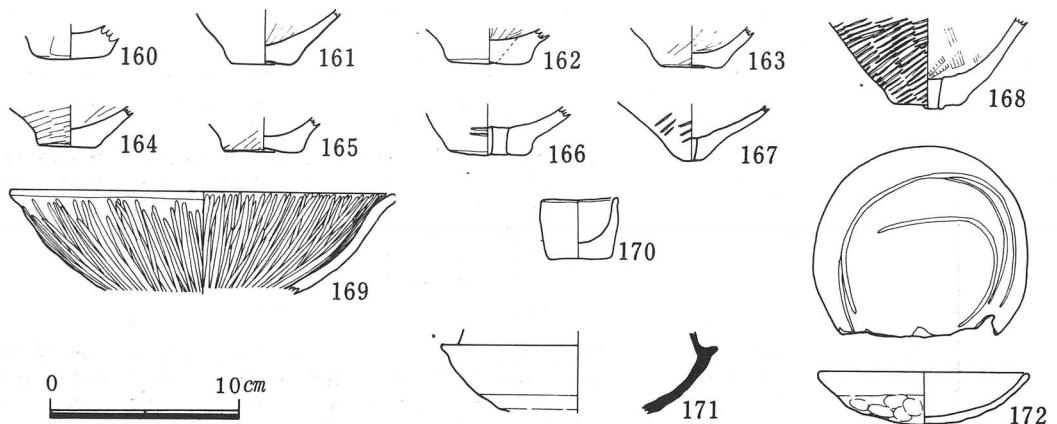
第 21 图 SX 1 出土土器〔3〕(S=1/4)



第22図 SX1出土土器〔4〕(S=1/4、1/2)

5. 遺構外出土土器(第23図)

第6・7層より古墳時代初頭、古墳時代後期、室町時代の土器が出土した。160～165は平底を呈する底部で、第V様式の特徴がみられる。166～168は甌である。169は高杯の杯部で碗形を呈する。170はミニチュア土器で、鉢形を呈する。輪積み成形によるもので、丁寧に調



第 23 図 遺構外出土土器 (S = 1/4)

整されている。171は古墳時代後期の須恵器蓋坏(坏身)である。172は室町時代の皿である。その他、第6・7層からは古墳時代初頭の土器が少量出土した。

#### 5. まとめ

今回の調査で東郷遺跡の居住域の一部を検出することができた。東郷遺跡は弥生時代中期から始まる遺跡で、弥生時代末～古墳時代初頭にかけて面的に広がる遺跡である。土坑SK1～SK4、小穴SP4～SP6、溝SD1・SD2、不明遺構SX1では第V様式の特徴をもつ土器が大部分を占めるが、庄内式土器も出土していることより、庄内式の古相のものであろう。また、小穴SP3・SP7では庄内式土器はみられず、第V様式の特徴をもつ土器片が出土しているが、少量のため前述の遺構とほぼ同時期の所産であると考えられよう。また、溝SD3・SD13は庄内式期の新相、溝SD4は古墳時代後期のものであろう。したがって、当調査区の遺構は庄内式期古相・新相、古墳時代後期の3時期に大別される。庄内式期の遺構の中で、溝SD3・SD5～SD7・SD10～SD14の遺構軸はほぼS-20°-E、N-20°-Wを指し、周辺の東郷遺跡の庄内式期の遺構軸とほぼ一致する。また、古墳時代後期の溝SD4はN-80°-Wを指し、庄内式期の遺構群と方向を異にしている。(嶋村)

註1) 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書」(1985)

2) 八尾市教育委員会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」(1983)

第3表 出土遺物観察表

SK1

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
1	甕	口径 17.2(完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(4本/1cm)ののち、ナデ。 内面 口縁部はハケののち、ヨコナデ。胴部はヘラケズリ(下→上ののち、右下→左上)。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)を多量含み、雲母を少量含み、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。胴部下半外面に煤が付着。
2	甕	推定口径 15.4 底径 3.8(完存)	底部輪台技法。 外面 口縁部はナデ。胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。底部～胴部はヘラケズリ(下→左上ののち、右→左)。	外・断一にぶい橙。内一灰黄褐。長石(小)をやや多量含み、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。外面は二次焼成のため一部赤色化。
3	甕	口径 15.6(完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(3本/1cm)ののち、ハケ。 内面 口縁部はハケののち、ヨコナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・中・大)、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。口縁部～胴部外面の一部、口縁部内面の一部に煤が付着。
4	甕	推定口径 16.4(1/3)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(3本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
5	甕	推定口径 14.8(1/3)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(3本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含み角閃石(小・中)、雲母(中)を微量含む。	焼成良好。
6	甕	推定底径 5.4(1/2)	外面 胴部はハケ。底部はハケののち、ナデ。 内面 ナデ。	外一にぶい黄橙。内・断一にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。外面の一部に煤が付着。
7	鉢	口径 13.0(2/3) 器高 6.6	外面 ハケののち、ナデ。 内面 ハケののち、ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含む。	焼成良好。
8	高坏	脚底径 15.8(4/5)	外面 ハケののち、ヨコナデ。 内面 脚柱部はナデ。脚裾部はハケ。	外一浅黄橙。内一褐灰。断一にぶい橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含む。	焼成良好。



遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
9	壺	底径 3.0(完存)	外面 頸部下端にキザミメをもつ凸帯を貼り付け。頸部はヘラミガキ。胴部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。 胴部中位の一部に煤が付着
10	甕	推定口径 13.2( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はハケ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)。角閃石(小・中)をやや多量含み、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。 口縁部～胴部の一部に煤が付着。
11	甕	推定口径 8.2( $\frac{1}{3}$ )	外面 ヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
12	甕	推定底径 5.0( $\frac{1}{4}$ )	底部輪台技法。 外面 胴部はタタキ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外・断一にぶい黄橙。内一褐灰。白色砂粒(径0.1~3.0mm)を少量含み、雲母(径0.1~0.5mm)を微量含む。	焼成良好。
13	甕	底径 4.8(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外・断一橙。内一黒。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、チャート(小)を少量含む。	焼成良好。
14	甕	底径 3.8(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 胴部～底部はナデ。	外一にぶい黄橙。内・断一灰白。白色砂粒(小・中)・石英(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。
15	鉢	口径 8.8( $\frac{1}{2}$ ) 器高 3.9	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(5本/1cm)。 内面 ナデ。	にぶい橙。精良。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。
16	鉢	底径 3.0(完存) 器高 5.2~5.5	外面 口縁部～胴部はナデ。胴部下半は指押さえ。底部はナデ。 内面 ヘラナデののち、ナデ。	赤黒。白色砂粒(小・中)を多量含み、雲母(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。
17	?	推定口径 12.2( $\frac{1}{4}$ )	外面 ナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小)、雲母(小)を少量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
18	?	推定口径 10.6 ( $\frac{1}{3}$ )	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	灰黄。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、角閃石(小・中・大)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。底部内面の一部に煤が付着。
19	高坏	推定脚底径 15.0 ( $\frac{1}{3}$ )	外面 脚部はナデ。 内面 脚部はナデ。	灰白。白色砂粒(小・中・大)、チャート(小・中)を少量含む。	焼成良好。
20	高坏	脚柱部(完存)	外面 ヘラミガキ 内面 脚柱部はナデののち、ヘラケズリ。脚裾部はナデ。	浅黄橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含む。	焼成良好。
21	高坏	推定脚底径 14.2 ( $\frac{1}{4}$ )	脚部推定4孔の円孔。 外面 脚部はヘラミガキ 内面 部はナデ。脚部はナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)を多量含み、雲母(中)を微量含む。	焼成良好。
22	高坏	推定脚底径 14.0 ( $\frac{1}{3}$ )	脚部に2段、推定3孔・5孔の円孔。 外面 脚部はヘラミガキ。 内面 脚柱部にしぼりめ残存。脚裾部はナデ。	灰褐。白色砂粒(小・中・大)、チャート(小・中)を少量含む。	焼成良好。

S K 4

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
23	壺	底径 3.2 (完存)	外面 剝離のため不明。 内面 ナデ。	にぶい黄褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)をやや多量含み、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部下半に黒斑
24	?	口径 4.6 ( $\frac{1}{2}$ )	底部輪台技法。 外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 底部はナデ。	にぶい橙。生駒西麓の粘土。角閃石(小・中・大)、白色砂粒(小・中・大)、雲母(小)を少量含む。	焼成良好。底部内面に煤が付着。
25	甕	推定口径 15.6 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ(右→左)。	黒褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、角閃石、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
26	台付鉢	口径 9.0 ( $\frac{1}{2}$ ) 器高 7.4 台底径 5.2	外面 鉢部は指押さえののち、 ヘラナデ。台部は指押さ え、ナデ。 内面 鉢部は指押さえ、ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中・大)を多量含む。	焼成良好。鉢 部内面、脚部 内面は煤が付 着。
27	甌	推定口径 4.2(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1 cm)。 内面 胴部はナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中・大)をやや多量含み、 チャート(小・中)、雲母 (小・中)を微量含む。	焼成良好。胴 部外面の一部 に煤が付着し、 二次焼成のため 赤色化。
28	甕	推定口径 15.6 ( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(3本/1cm) ののち、ナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 上端は指押さえののち、 ナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・ 中)をやや多量含み、雲 母(小)を微量含む。	焼成良好。胴 部外面の一部 胴部内面に煤 が付着。

## SD 3

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
29	甕	推定口径 14.4 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 はヘラケズリ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土、 白色砂粒(小・中)を多量 含み、角閃石(小・中)、 雲母(小)を少量含む。	焼成良好。
30	甕	(破片)	外面 口縁部はヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 はヘラケズリ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)をやや多量含む。	焼成良好。
31	鉢	(破片)	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	橙。精良。白色砂粒(小) を少量含む。	焼成良好。

## SD 4

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
32	須恵器 蓋坏(坏 身)	推定口径 11.0 ( $\frac{1}{5}$ ) たちあがり高 1.8	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。	外・内-明青灰。断-赤灰。 白色砂粒(小)を微量含む。	焼成良好。

## SD 12

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
33	台付鉢?	脚底径 6.0 ( $\frac{1}{2}$ )	外面 脚部上半は指押さえ。脚部下半はナデ。 内面 鉢部底面はナデ。脚部はナデ。	淡黄。白色砂粒(小・中・大)を少量含む。	焼成良好。

## SD 13

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
34	壺	(破片)	頸部下端に突帯を貼り付け。 外面 櫛描波状文(6条)、櫛描直線文(6条)を施文。	外-明赤褐。内-断-橙。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。
35	甕	推定口径 15.0 ( $\frac{1}{3}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(5本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ。	灰黄褐。生駒西麓。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。口縁部~胴部外面の一部に煤が付着。
36	甕	推定口径 8.7 ( $\frac{1}{4}$ )	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	暗灰黄。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。口縁部外面に煤が付着。
37	甕	推定口径 13.0 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はハケののち、ナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ(右→左)。	浅黄橙。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。口縁部~胴部外面に煤が付着
38	甕	推定底径 3.8 ( $\frac{1}{2}$ )	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外・断-明赤褐。内-赤灰。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含む、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。内面全面に煤が付着。
39	甕	底径 4.0(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-灰白。内・断-黒褐。白色砂粒(小・中・大)をやや多量に含む。	焼成良好。
40	甕	底径 2.0(完存)	外面 ナデ。 内面 ヘラケズリ(右下→左上)。	灰黄。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	白調・胎土	焼成・備考
4 1	?	底径 3.2(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外・断-にぶい褐。内-黄 灰。白色砂粒(小・中)を 少量含み、雲母(小)、角 閃石(小)を微量含む。	焼成良好。
4 2	高坏	推定口径 11.0(1/5) 坏部高 6.6 器高 13.4 脚底径 14.4 脚高 7.2	脚部に推定4孔の円孔 外面 坏部はヨコナデ。脚部は ハケののち、ナデ。 内面 坏部は剥離のため不明。 脚柱部にしぼりめ残存。 脚根部はハケののち、ナ デ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小 ・中)を微量含む。	焼成良好。
4 3	高坏	脚柱部(完存)	外面 剥離のため不明。 内面 脚柱部はしぼりめ。脚根 部はナデ。	外・内-灰白。断-にぶい 褐。白色砂粒(小・中)、 茶色砂粒(小・中)、黒色 砂粒(小・中)を多量含む。	焼成良好。
4 4	高坏	脚柱部(完存)	外面 ハケののち、ヘラミガキ。 内面 指押さえ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含み、角閃石(小) 雲母(小)を微量含む。	焼成良好。

## SD 14

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
4 5	高坏	脚柱部(完存)	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部底面はヘラミガキ。 脚柱部はナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含み、雲母(小)を 微量含む。	焼成良好。

## SX 1

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
4 6	壺	口径 24.8(1/2)	外面 口縁端部は竹管文。複合 口縁部は櫛描波状文(剥 離のため単位不明)十櫛 描直線文(8本)ののち、 竹管文を施文した円形浮 文を貼り付け。頸部はナ デ。頸部下端は櫛描列点	浅黄橙。白色砂粒(小・中) 角閃石(小・中)をやや多 量含み、雲母(小)を微量 含む。	焼成良好。口 縁部上半内面 の一部に煤が 付着。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
			文を施文した突帯を貼り付け。 内面 複合口縁部は櫛描波状文(剥離のため単位不明)。頸部は剥離のため不明。		
47	壺	推定口径 8.6 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデののちヘラミガキ。胴部は指押さえ、ナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。口縁部外面の一部、胴部外面の一部、口縁部～胴部内面の一部に煤が付着。
48	壺	推定口径 13.4 ( $\frac{1}{4}$ )	外面 口頸部はヨコナデ。胴部はナデ。 内面 口頸部はヨコナデ。胴部はナデ。	外-橙。内-断-灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。口頸部内面に煤が付着。
49	壺	推定口径 21.2 ( $\frac{1}{4}$ )	外面 複合口縁部外面はナデののち、竹管文を施文した円形浮文を貼り付け。頸部はナデ。 内面 ナデ。	外・内-にぶい橙。断-灰白。白色砂粒(小・中)をやや多量含む、雲母(小)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。複合口縁部外面～口頸部内面に煤が付着。
50	壺	頸部凸帯 (完存)	外面 凸帯貼り付けののち、頸部・胴部はヘラミガキ。凸帯、凸帯下にヘラ状工具によるキザミメ。 内面 頸部はナデ。胴部上半に粘土紐の接合痕が残存、指押さえ。胴部下半はヘラナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含む、角閃石(小・中・大)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部内面に煤が付着。
51	壺	底径 4.0 (完存)	外面 頸部にキザミメをもつ凸帯。凸帯を貼り付けたのち、頸部はハケ。胴部はタタキ(4本/1cm)ののち、ハケ。底部に木葉痕残存。 内面 ハケ。	橙。白色砂粒(小・中・大)を多量含む、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部中位外面に黒斑。
52	壺	底径 4.5 (完存)	外面 胴部はハケののち、底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。白色砂粒(小・中)、雲母(小)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部外面に黒斑。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
53	壺	底径 5.0 ( $\frac{4}{5}$ )	外面 胴部はヘラミガキ。底部 はナデ。 内面 ナデ。	外-黒褐。内-にぶい橙。 断-褐灰。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
54	甕	口径 17.2 (完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(4本/1cm)。 内面 口縁部はナデ。胴部上端 は指押さえ。胴部はナデ。	淡橙。白色砂粒(小・中) を少量含み、雲母(小・中) を微量含む。	焼成良好。胴 部下内外面 に煤が付着。
55	甕	推定口径 12.6 ( $\frac{1}{3}$ ) 器高 14.6 推定底径 7.4	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(3本/1cm) ののち、ハケ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 はハケ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘 土。白色砂粒(小・中)を やや多量含み、雲母(小)、 角閃石(小)を少量含む。	焼成良好。胴 部上半の一部 ~底部外面に 煤が付着。
56	甕	推定口径 11.6 ( $\frac{1}{3}$ ) 器高 9.0 底径 4.8	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(3本/1cm) ののち、胴部下半のみ、 ナデ。底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 ~底部はナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘 土。白色砂粒(小・中)、 角閃石(小・中)をやや多 量含み、雲母(小・中)を 少量含む。	焼成良好。胴 部~底部外面 の一部に黒斑 あり。
57	甕	推定口径 12.8 器高 10.8 底径 3.0 (完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(3本/1cm) ののち、胴部上半のみナ デ。底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 ~底部はハケののち、ヘ ラミガキ。	白色砂粒(小・中)を少量 含む。	焼成良好。
58	甕	推定口径 11.4 器高 12.4 底径 3.2 (完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はハケののち、ナデ。底 部はナデ。 内面 口縁部はハケののち、ヨ コナデ。胴部~底部はハ ケののち、一部ナデ。	淡黄。白色砂粒(小・中) を少量含み、雲母(小)を 微量含む。	焼成良好。口 縁部~胴部外 面の一部、胴 部上半内面 の一部に煤が 付着。胴部下 半~底部外面 が二次焼成の ため赤色化。
59	甕	口径 17.2 (完存) 器高 20.0	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はタタキ(5本/1cm) ののち、ハケ。 内面 口縁部はナデ。胴部はヘ	にぶい黄橙。生駒西麓の粘 土。白色砂粒(小・中)を やや多量含み、雲母(小・ 中)、角閃石(小・中)を	焼成良好。口 縁部~胴部上 半、胴部中位 に黒斑。胴部

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
			ラナデ。底部は指押さえ。	少量含む。	下半に煤が付着。
60	甕	口径 16.0(完存) 器高 24.0	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(5本/1cm)ののち、ハケ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ(下→上。左下→右上)。	灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部下半内外面に煤が付着。
61	甕	口径 17.0( $\frac{8}{9}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(4本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ(右下→左上)ののち、右→左)。	暗灰黄。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中・大)、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。口縁部～胴部外面の一部、口縁部～胴部内面の一部に煤が付着。
62	甕	推定口径 12.6( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はハケ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリののち、指押さえ、ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む、雲母(小)、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。口縁部外面の一部、胴部外面の一部に煤が付着。
63	甕	推定底径 15.4( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(3本/1cm)ののち、ハケ。 内面 剝離のため調整不明。	外・内-にぶい橙。断-黒。白色砂粒(小・中)をやや多量含む、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
64	甕	推定口径 15.4( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(3本/1cm)。 内面 口縁部はヘラナデののち、ヨコナデ。胴部はハケののち、ナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、雲母(小)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。口縁部外面、胴部外面の一部に煤が付着。
65	甕	推定口径 15.6( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(4本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。	外・断-灰白～橙。内-灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。口縁部～胴部内面の一部に煤が付着。
66	甕	推定口径 16.0( $\frac{1}{5}$ )	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はタタキ(4本/1cm)。 内面 口縁部はヨコナデ。	外-にぶい橙。内・断-灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
67	甕	推定口径 16.0( $\frac{1}{4}$ )	外面 口縁部はハケののち、ヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。	外-にぶい橙。内・断-黄灰。白色砂粒(小・中)をやや多量含む。	焼成良好。口縁部内面に黒斑。
68	甕	推定口径 16.8( $\frac{1}{3}$ )	外面 タタキ(5本/1cm)ののち、ヨコナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、	焼成良好。口縁部外面～内



遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・備考	焼成・備考
			内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラケズリ。	角閃石(小・中)、雲母(小)を少量含む。	面の一部に煤が付着。
69	甕	推定口径 17.6 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 ヨコナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。	灰黄褐。白色砂粒(小・中)を少量含む、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。内面に煤が付着
70	?	底径 5.8 (完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)ののち、ナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-浅黄橙~橙~黒。内・断-灰。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含む。	焼成良好。胴部~底部に煤が付着。
71	甕	底径 4.4 (完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含む、角閃石(小・中・大)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。胴部外面の一部に煤が付着。
72	甕	底径 4.3 (完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	灰黄褐。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
73	甕	底径 3.4 ( $\frac{2}{3}$ )	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	灰黄褐。白色砂粒(小・中)、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。二次焼成のため底部は赤色化。胴部は煤が付着。
74	甕	底径 4.0 (完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部内面の一部に煤が付着。
75	甕	底径 3.6 (完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含む、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。底部外・内面の一部に煤が付着。
76	甕	底径 5.0 (完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外-にぶい黄橙。内・断-褐灰。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。
77	甕	底径 4.2 ( $\frac{1}{2}$ )	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
78	甕	底径 4.4 (完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。	褐灰。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含む、角閃	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
			内面 ナデ。	石(小)、雲母(小)を少量含む。	
79	甕	底径 3.0 (1/2)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
80	甕	底径 4.2(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	灰黄褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部外面の一部に煤が付着。
81	甕	底径 3.2(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)ののち、ナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	灰白～にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部～底部外面の一部に煤が付着。
82	甕	底径 4.2(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	灰黄褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒を少量含み、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。
83	甕	底径 3.8 (4/5)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-浅黄。内-断-にぶい橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
84	甕	底径 4.4(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	褐灰。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部外面～底部外面の一部、胴部～底部内面の一部に煤が付着。
85	甕	推定底径 5.0 (1/2)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)ののち、一部ナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外-断-にぶい橙。内-黒。白色砂粒(小・中)を微量含み、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。
86	甕	底径 2.9(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)ののち、ナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)、雲母(小)を少量含む。	焼成良好。
87	甕	底径 4.0(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外-断-灰黄褐。内-にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部～底部外面に煤が付着。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
88	?	底径 6.6(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-淡黄~黒。内-断-淡黄。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、灰色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部に黒斑あり。
89	甕	底径 4.4(完存)	底部輪台技法。 外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-橙~浅黄橙~黒。内-黄灰。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部に煤が付着。
90	甕	底径 4.4(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ハケののち、ナデ。	にぶい黄褐~黒。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部、胴部内面の一部に煤が付着。
91	甕	底径 4.6(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)ののち、ナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外・断-橙。内-黄灰。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。底部内面の一部に煤が付着。
92	甕	推定底径 5.2(1/3)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	浅黄橙。白色砂粒(小・中)をやや多量含む。	焼成良好。
93	甕	推定底径 4.8(1/3)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	外・断-淡赤橙~暗灰黄。内-黄灰。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。
94	甕	底径 3.2(完存)	外面 胴部はタタキ(5本/1cm)ののち、ナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい橙~褐灰。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部に煤が付着。
95	甕	底径 8.4(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外・断-にぶい黄橙。内-灰黄褐。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部外面に煤が付着。内面全面に炭化物が付着。
96	甕	底径 3.6(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外・断-にぶい黄橙。内-橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。胴部外面に煤が付着。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
97	甕	底径 4.0(完存)	外面 タタキ(3本/1cm)の のち、一部ナデ。 内面 ヘラナデ。	灰黄褐。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。胴 部外面の一部 に煤が付着。
98	甕	底径 3.4(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1 cm)ののち、一部ナデ。 底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘 土。白色砂粒(小・中)を 少量含む、角閃石(小・中)、 雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
99	甕	推定底径 4.6(1/3)	外面 胴部はタタキ(3本/1 cm)ののち、ナデ。底部 はナデ。 内面 ナデ。	にぶい褐。白色砂粒(小・ 中・大)をやや多量含む、 雲母(小・中)、角閃石(小 ・中)を微量含む。	焼成良好。
100	甕	底径 4.6(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1 cm)、底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含む、雲母(小) を微量含む。	焼成良好。
101	甕	底径 4.0(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1 cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	灰黄褐。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)、雲母 (小・中)、角閃石(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
102	甕	底径 3.8(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1 cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中・大)を少量含む、角閃 石(小)を微量含む。	焼成良好。
103	甕	底径 4.5(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1 cm)。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・ 中・大)、雲母(小・中・ 大)、角閃石(小)を少量 含む。	焼成良好。胴 部外面に煤が 付着。
104	甕	底径 4.2(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中・大)をやや多量含む、 角閃石(小・中)、雲母(小 ・中)を少量含む。	焼成良好。
105	甕	底径 3.0(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を多量含む。	焼成良好。
106	甕	底径 4.6(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-灰黄褐。内・断-にぶ い橙。白色砂粒(小・中) をやや多量含む、角閃石(小 ・中)、雲母(小・中)を 微量含む。	焼成良好。
107	甕	底径 4.6(1/2)	底部輪台技法。 外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中・大)を 少量含む、雲母(小)、角 閃石(小)を微量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
108	甕	底径 5.4 (3/4)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小・中)雲母(小)少量含む。	焼成良好
109	壺	底径 4.7 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	浅赤橙。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。胴部外・内面の一部に煤が付着。
110	甕	底径 4.4 (完存)	外面 剥離のため調整不明。 内面 ナデ。	橙。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、角閃石(小・中)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
111	甕	推定底径 5.0 (1/3)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
112	甕	底径 4.0 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-灰白。内-断-灰黄。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小)、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。胴部~底部に煤が付着。
113	?	底径 3.6 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	黒。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、雲母(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。
114	甕	底径 4.2 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-浅黄橙。内-断-橙。白色砂粒(小・中・大)をやや多量含み、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。
115	甕	底径 4.6 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	橙。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部外面の一部に煤が付着。
116	?	底径 4.2 (完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 指押さえ、ナデ。	橙。白色砂粒(小・中)を微量含む。	焼成良好。
117	甕	底径 3.0 (完存)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 磨耗のため調整不明。	橙。白色砂粒(小・中)を多量含む。	焼成良好。
118	甕	底径 3.0 (完存)	外面 胴部はヘラナデ。底部はヘラナデ。 内面 ヘラナデ	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)を少量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
119	甕	底径 3.8(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。
120	甕	底径 3.4(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-灰白~黒。内-断-灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部に煤が付着。
121	甕	底径 4.6(完存)	外面 胴部はヘラナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小・中)、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。
122	壺	底径 5.4(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-断-にぶい橙。内-黒褐。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
123	甕	底径 4.2(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-灰白。内-断-黄灰。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、茶色砂粒(小・中)を微量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部に煤が付着。
124	甕	底径 1.8(完存)	焼成前に底部穿孔。 外面 タタキ(4本/1cm)ののち、一部ナデ。 内面 ナデ。	外・内-橙。断-灰白。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。
125	甕	推定底径 3.8(1/2)	焼成前に底部穿孔。 外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-断-浅黄橙~黒。内-黒。白色砂粒(小・中)をやや多量含む。	焼成良好。胴部~底部外面の一部、胴部~底部内面全面に煤が付着。
126	甕	推定口径 8.6 器高 5.4 底径 3.2(完存)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部~底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部~底部はヘラナデ。	灰黄褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。口縁部~胴部外面の一部、口縁部内面の一部に煤が付着。
127	鉢	推定口径 9.0 器高 5.2	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラナデ。底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部~底部はナデ。	灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
		底径 2.9(完存)			
128	鉢	推定口径 26.0(1/3)	外面 口縁部に粘土紐の接合痕が 残存。口縁部はヨコナデ。 胴部はタタキ(3本/1cm)の のち、一部ナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 はヘラナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中・大)をやや 多量含み、雲母(小・中)、角閃石 (小・中)を少量含む。	焼成良好。口縁部～胴部外面の 一部、口縁部内面の一部に黒斑 あり。
129	鉢	推定口径 16.2(1/4)	外面 ヨコナデ。 内面 ヘラナデののち、ヨコナ デ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を 少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部下半外面の一部 に黒斑あり。
130	鉢	推定口径 12.0(1/4) 器高 6.1 底径 4.0	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	にぶい黄橙。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)を多量含み、 灰色砂粒(小)を少量含み、角閃石 (小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部～底部内面の一部 に煤が付着。
131	鉢	口径 10.4 器高 4.2 底径 4.8(完存)	外面 胴部はヘラナデ。底部は ナデ。 内面 ナデ。	にぶい橙。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中) を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。胴部下半～底部の一部 に煤が付着。
132	鉢	推定口径 13.0(1/4) 器高 4.9	外面 ハケののち、ヘラナデ。 内面 ハケののち、ナデ。	外-にぶい橙～黒。内-断-にぶい 橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。底部外面に黒斑あり。
133	鉢	推定口径 13.6(1/4)	外面 ナデ。 内面 ヘラナデ。	外-にぶい黄橙。内-浅黄橙～褐 灰。断-褐灰。白色砂粒(小・中)を やや多量含む。	焼成良好。胴部～底部内面に煤が 付着。
134	鉢	推定口径 20.2(1/3) 器高 6.4	外面 ヘラケズリ。 内面 ヘラナデ。	にぶい橙。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)をやや多量含 み、角閃石(小・中)雲母(小)を 少量含む。	焼成良好。体部～底部外面の一部 に黒斑あり。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
135	鉢	推定口径 19.6 (1/4)	外面 ヘラケズリ。 内面 ナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)を少量 含み、角閃石(小・中)、 雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
136	鉢	推定口径 8.6 (1/4)	外面 タタキ(4本/1cm)の のち、ナデ。 内面 ナデ。	外・内-にぶい橙。断一黒。 白色砂粒(小・中・大)を 少量含み、茶色砂粒(小・ 中)を微量含む。	焼成良好。
137	鉢	推定口径 11.4 (1/4)	外面 タタキ(3本/1cm)の のち、ナデ。 内面 ハケののち、ナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。 白色砂粒(小・中)を少量 含み、角閃石(小)、雲母 (小・中)を微量含む。	焼成良好。
138	台付鉢	台底径 7.0(完存)	外面 ナデ。台部上半は指押さ え。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
139	高坏	推定口径 22.0 (1/3)	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	外・内-にぶい黄橙。断一 明褐灰。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。内 ・外面に赤彩 痕あり。
140	高坏	推定口径 19.6 (1/3)	外面 剥離のため不明。 内面 剥離のため不明。	赤橙。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。坏 部外面の一部 に煤が付着。
141	高坏	坏部稜(1/5)	外面 剥離のため不明。 内面 ヘラミガキ。	灰白。白色砂粒(小・中)、 雲母(小・中)、角閃石(小 ・中)を少量含む。	焼成良好。坏 部内面に黒斑 あり。
142	高坏	口径 12.4(完存) 坏部高 4.8	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含み、雲母(小) を微量含む。	焼成良好。坏 部下半~脚部 に煤が付着。
143	高坏	推定口径 12.8 (1/5) 坏部高 4.8	外面 坏口縁部はヨコナデ。坏 体部~脚部はナデ。 内面 坏口縁部はヨコナデ。坏 体部はハケののち、ナデ。	外・内-にぶい橙。白色砂 粒(小・中)を少量含み、 雲母(小)、角閃石(小) を微量含む。	焼成良好。坏 部内面に赤彩。
144	高坏	脚柱部(完存)	外面 ナデ。 内面 坏部底面はナデ。脚部は ヘラナデ。	橙。白色砂粒(小・中・大) をやや多量含む。	焼成良好。



遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
145	高坏	脚柱部(完存)	外面 ヘラナデ。 内面 しばりめ残存。ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
146	高坏	脚柱部(完存)	外面 ヘラミガキ。 内面 坏底部はヘラミガキ。脚柱部はしばりめ残存。ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中)を微量含む。	焼成良好。外面の一部に煤が付着。
147	高坏	脚柱部(完存)	外面 磨耗のため調整不明。 内面 しばりめ残存。ナデ。	浅黄橙。白色砂粒(小・中)を微量含む。	焼成良好。
148	高坏	脚柱部(完存)	脚部に推定4孔の円孔。 外面 ヘラミガキ。 内面 ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
149	高坏	脚柱部(完存)	脚部に推定4孔の円孔。 外面 ヘラミガキ。 内面 坏底面はヘラミガキ。脚部はナデ。	灰黄褐。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。脚部内外面の一部に黒斑あり。
150	高坏	脚柱部(完存)	外面 ナデ。 内面 ナデ。	にぶい褐。生駒西麓の粘土。白色砂粒(小・中)、角閃石(小・中)、雲母(小・中)を少量含む。	焼成良好。
151	高坏	脚柱部(完存)	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小)を少量含む。	焼成良好。
152	器台	稜(1/6)	外面 脚裾部はヘラミガキのうち、櫛描波状文(6本/4mm)十櫛描直線文(5本/5mm)十櫛描波状文(6本/5mm)。 内面 ナデ。	浅黄橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
153	高坏	推定脚底径 16.6(1/5)	外面 ヨコナデ。 内面 ヨコナデ。	にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。
154	器台	推定口径 9.0(1/4)	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	橙。白色砂粒(小・中)、灰色砂粒(小・中)をやや多量含み、雲母(小)を微量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
155	器台	受部下端 (完存)	外面 ハケののち、ヘラミガキ。 内面 受部はヘラミガキ。脚部 はナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含み、角閃石(小) 雲母(小)を微量含む。	焼成良好。脚 部外面に煤が 付着。
156	器台	受部径 16.6(完存)	外面 剥離のため不明。 内面 剥離のため不明。	外-灰白~淡黄。内-黄灰。 断-灰白。白色砂粒(小・ 中・大)をやや多量含み、 角閃石(小)、雲母(小) を微量含む。	焼成良好。
157	ミニチュ ア高坏	脚底径 5.6(完存)	脚部に3孔の円孔。 外面 ハケののち、ヘラミガキ。 内面 坏部はナデ。脚部はナデ。	にぶい赤褐。白色砂粒(小・ 中)を少量含み、雲母(小・ 中)、角閃石(小・中) を少量含む。	焼成良好。
158	ミニチュ ア鉢	口径 4.5(完存) 器高 2.0	手温。 外面 指押さえ。ナデ。 内面 指押さえ。ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
159	ミニチュ ア水鳥		外面 ナデ。 内面 ナデ。	灰黄。白色砂粒(小・中) を少量含み、雲母(小)を 微量含む。	焼成良好。

遺構外

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
160	?	底径 4.0(完存)	外面 胴部はヘラナデ。底部は ナデ。 内面 ナデ。	外-にぶい黄橙~橙。内・ 断-灰黄褐。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
161	?	底径 3.2(完存)	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ヘラナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・ 中)を少量含み、雲母(小・ 中)を微量含む。	焼成良好。
162	?	底径 4.4(3/4)	底部輪台技法。 外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 底部はヘラナデ。	外・断-にぶい橙。内-黄 灰。白色砂粒(小・中・大) を少量含む。	焼成良好。
163	?	底径 3.2(完存)	外面 タタキ(3本/1cm)の のち、一部ナデ。 内面 ヘラナデ。	外・断-浅黄。内-黒。白 色砂粒(小・中)を少量含 み、角閃石(小・中)を微 量含む。	焼成良好。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
164	甕	底径 3.2(完存)	外面 胴部はタタキ(3本/1cm)。底部はナデ。 内面 胴部はヘラナデ。	外・断-橙。内-にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、雲母(小・中)を微量含む。	焼成良好。
165	甕	底径 4.2(完存)	外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外-にぶい橙。内・断-灰黄褐。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。内面の一部に煤が付着。
166	甕	底径 4.4(完存)	焼成前に底部穿孔。 外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ナデ。	外・内-にぶい黄橙。断-黒。白色砂粒(小・中)をやや多量含み、角閃石(小)、雲母(小)を少量含む。	焼成良好。
167	甕	底径 1.0(完存)	焼成前に底部穿孔。 外面 タタキ(3本/1cm)ののち、ナデ。 内面 ナデ。	外-橙~黒。内・断-明赤褐。白色砂粒(小・中)をやや多量含む。	焼成良好。胴部下半外面の一部に黒斑あり。
168	甕	推定底径 3.8(完存)	底部は焼成前穿孔。 外面 胴部はタタキ(4本/1cm)。底部はナデ。 内面 ハケののち、ナデ。	外-灰白~明黄褐~黒。内・断-にぶい黄橙。白色砂粒(小・中)を少量含み、角閃石(小・中)を微量含む。	焼成良好。
169	高坏	推定口径 10.2(1/4)	外面 口縁部はヨコナデののち、ヘラミガキ。体部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	灰白。白色砂粒(小・中・大)を少量含み、角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。
170	ミニチュア甕	推定口径 4.0(1/4) 器高 3.0 底径 3.4	外面 胴部はナデ。底部はナデ。 内面 ナデ。	灰褐。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
171	須恵器蓋坏(身)	稜(1/5)	外面 回転ナデののち、体底部は回転ヘラケズリ。 内面 回転ナデ。	外・内-灰白。断-明褐灰。白色砂粒(小・中)を微量含む。	焼成良好。
172	瓦器皿	口径 11.4(2/3) 器高 3.0	外面 口縁部はヨコナデ。体部~底部は指押さえ。 内面 ナデののち、ラセン状暗文。	外-灰白~黒。内-黒。断-灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。

## 2. 大竹遺跡の調査

調査地 八尾市楽音寺2丁目40

調査面積 110 m<sup>2</sup>

調査期間 昭和60年6月3日



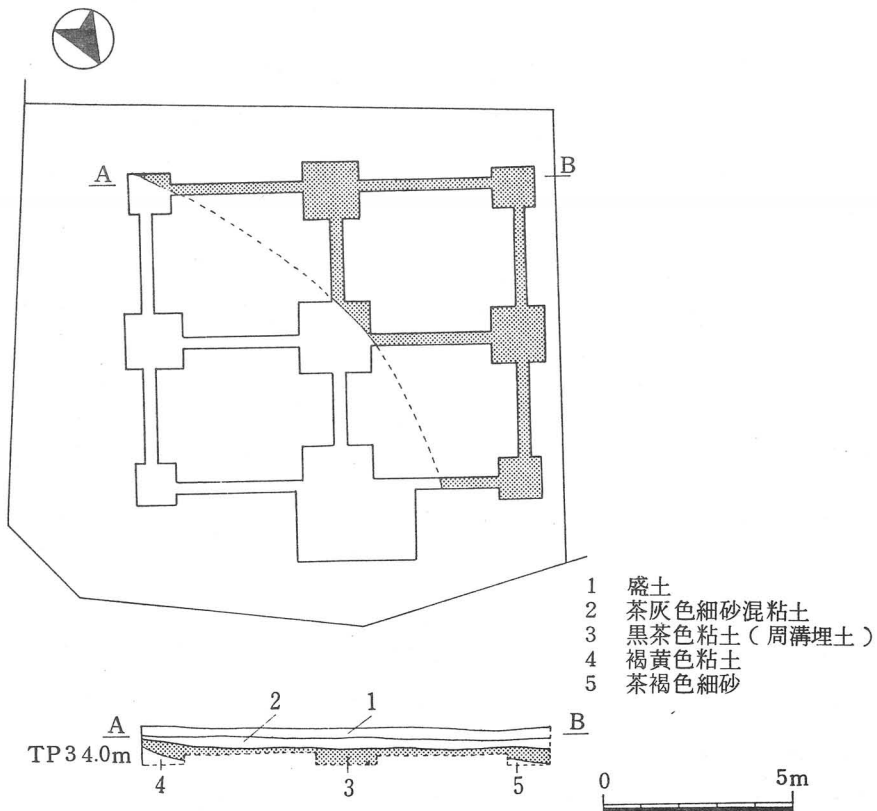
第24図 調査地周辺図 (S=1/5000)

## 1. 調査の経過

八尾市大竹遺跡内に所在する楽音寺 2 丁目 40 において昭和 60 年 4 月 30 日付で、  
氏より  
個人住宅を建築したい旨の届出があった。文化財室では基礎構造が浅いものであるため慎重に  
工事を施工するよう指導していたが、昭和 60 年 6 月 1 日に施工状況を確認に行ったところ、盛  
土がほとんどなく、すでに旧地表下約 80cm を掘削した状況であった。この時点で工事箇所西側  
において、須恵器、埴輪片を含む包含層が確認できたので、施工者である坂上工務店に工事の  
一時停止を要請し、昭和 60 年 6 月 3 日に遺物の採集及び記録は土層断面の実測及び包含層の広  
がりの確認を行なったが、その結果、当該地が消滅した古墳の一部である可能性があるため以  
下のとおり報告することにした。(米田)

## 2. 調査の概要

調査区内で溝状遺構を確認した。溝状遺構は円形にめぐり、埋土の掘りおこしから埴輪が表  
採されたことから古墳の周溝であると考えた。南壁土層断面は第 25 図に示したとおりである。



第 25 図 周溝平・断面図 (S = 1/200)

第1層盛土、第2層茶灰色細砂混粘土の下に周溝の埋土と考えられる第3層黒茶色粘土が確認された。第4層褐黄色粘土は東側にのみ堆積し、第5層茶褐色細砂は西側にのみ確認された。おそらく第4層は古墳の盛土であろう。古墳の墳丘裾は確認し得なかったが、古墳の墳丘は径13～14mを測り、周溝は幅5.7m以上を測ると考えられる。

埴輪はいずれも周溝埋土掘りおこしから表採されたものである。173～179は円筒埴輪で、180は形象埴輪である。いずれも土師質であるが黒斑はみられない。173～179は外面調整がタテハケによる一次調整だけであり、178には底部調整が施されている。径の復元ができるものは175・178のみである。完形品はなく、全体を復元できるものはみられなかった。175は推定口径24.6cm、178は推定基底部径12.2cmを測り、いずれも小型である。突帯は断面不整形台形を呈するもの(174・178・179)、三角形を呈するもの(175)の2種類がみられる。いずれも突帯貼り付けの際、上辺・下辺をヨコナデしたのち、突帯整形のため2本の指で上辺と平坦部のみをヨコナデしたものであろう。これらの埴輪は川西編年のV期に相当するもので、6世紀代のものと考えられる。

180は形象埴輪である。小破片で全体は不明である。外面に2本の弧状の線刻がめぐり、内面は突起状のものがみられる。

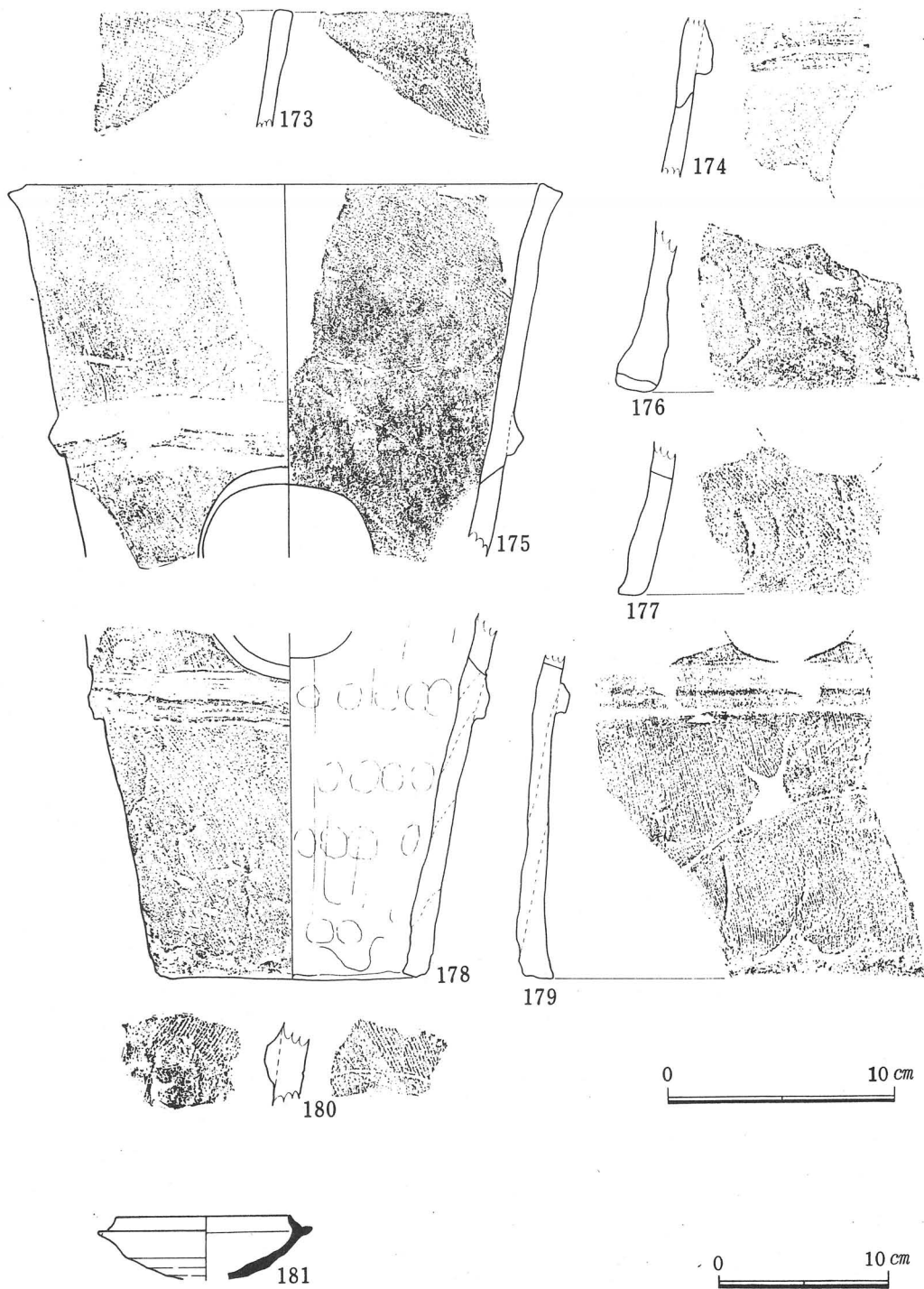
181は調査区内で表採した須恵器蓋坏(身)である。調査区内で確認した古墳に伴うものかどうかは不明である。6世紀末頃のものであろう。

### 3. ま と め

調査区内で古墳の周溝と考えられる溝状遺構を確認した。調査地の周辺には楽音寺・大竹古墳群と呼ばれる前期から後期にいたる古墳群がある。調査区の南150mには墳丘の長さ約130mの前方後円墳である心合寺山古墳がみられ、西400mには鏡塚古墳がみられる。心合寺山古墳は墳丘上で外面にB種ヨコハケの施された埴輪が表採されていることなどから、5世紀前半に築造されたものと考えられる。また、鏡塚古墳の北側を東西に走る市道の水道管布敷工事に伴う発掘調査<sup>2)</sup>で、整地層から鏡塚古墳のものと思われる埴輪が多数出土している。円筒埴輪は基底部径12.0～15.0cmを測るものと2.2cm前後を測るものがあり、本墳出土の円筒埴輪と比べ、大型のものがみられる。また、外面調整がタテハケのみのものと、タテハケのちB種ヨコハケを施すものの2種類がみられ、本墳の埴輪がタテハケのみのものであるのに対し、古い要素がみられる。したがって、埴輪の特徴から、本墳は鏡塚古墳よりも新しい時期に築造されたと考えられる。また、楽音寺・大竹古墳群中では鏡塚古墳と、横穴式石室墳を内部主体とし、埴輪を伴わない愛宕塚古墳の中間の時期に築造されたものと考えられよう。(嶋村)

註1) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64 - 2 (1978)

2) 八尾市教育委員会「大竹遺跡」(1980)



第 26 図 表採遺物 (  $S = \frac{1}{3}, \frac{1}{4}$  )

第4表 表採遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
173	円筒埴輪	(破片)	外面 タテハケ(9本/1 cm、右下→左上)の のち、口縁部はヨコ ナデ。 内面 ヨコハケ(9本/1 cm、右→左)ののち、 口縁部はヨコナデ。	淡橙。白色砂粒(小・中) 灰白砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。
174	円筒埴輪	(破片)	外面 タテハケ(12本/1 cm、右下→左上)の のち、突帯貼り付け。 内面 指ナデ(下→上)。	外・内-淡橙。断-褐 灰。白色砂粒(小・中)、 灰色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。
175	円筒埴輪	推定口径 24.6 ( $\frac{1}{5}$ )	外面 タテハケ(10本/1 cm、右下→左上)の のち、口縁部はヨコ ナデ。突帯貼り付け。 内面 口縁部はヨコナデの のち、ハケ(右下→ 左上)。突帯の裏側 は指押さえののち、 板ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)、黒白砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
176	円筒埴輪	(破片)	外面 タテハケ(12本/1 cm、右下→左上)。 内面 指ナデ(下→上)。	外・内-にぶい橙。断- 褐灰。白色砂粒(小・中)、 灰色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。 底部に棒 状痕。
177	円筒埴輪	(破片)	外面 タテハケ(7本/1 cm、右下→左上)。 内面 指ナデ(下→上)。	浅黄橙。白色砂粒(小・中)、 灰色砂粒(小・中・大)を やや多量に含む。	焼成良好。



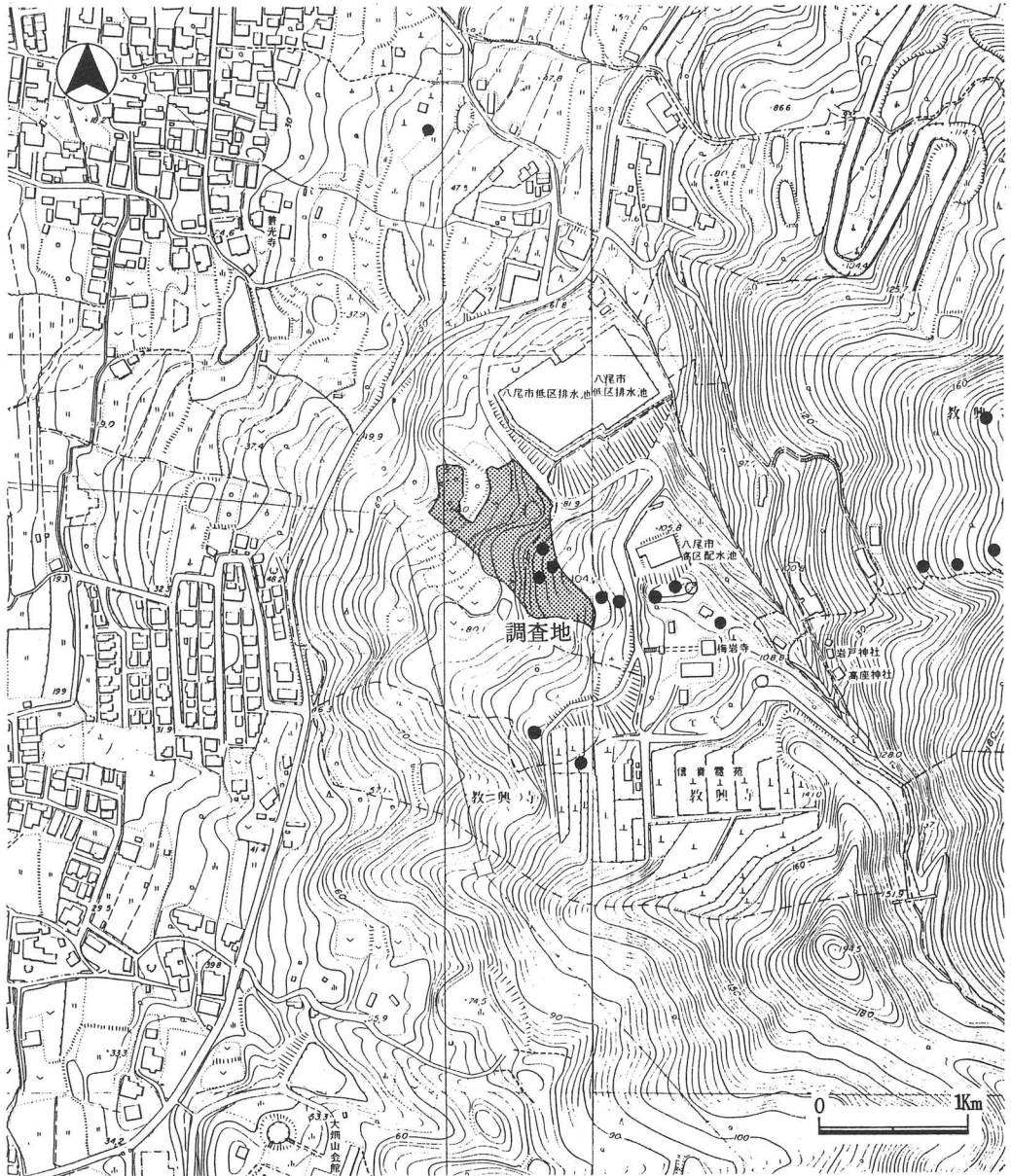
遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
178	円筒埴輪	推定底径 12.2(1/4)	外面 タテハケ(12本/1 cm・8本/1cm、右 下→左上)ののち、 突帯貼り付け。底部 調整。 内面 粘土紐接合時に指押 さえののち、板ナデ (下→上)。	にぶい橙。白色砂粒(小 ・中)、黒色砂粒(小) を少量含む。	焼成良好。
179	円筒埴輪	(破片)	外面 タテハケ(9本/1 cm、下→上)ののち、 突帯貼り付け。 内面 指ナデ(下→上) ののち、板ナデ(下 →上)。	にぶい橙。白色砂粒(小 ・中)、黒色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
180	形象埴輪	(破片)	外面 ハケ(7本/1cm・ 17本/1cm)ののち 線刻。 内面 ハケ。	淡橙。白色砂粒(小・ 中)、灰色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。
181	須恵器 蓋坏 (身)	推定口径 10.6(1/6)	外面 回転ナデののち、回 転ヘラケズリ(右回 り)。 内面 回転ナデ。	青灰。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。

### 3. 高安古墳群の調査

調査地 八尾市垣内412-1他、教興寺561・562

調査面積 300 m<sup>2</sup>

調査期間 昭和60年6月6日～7月15日



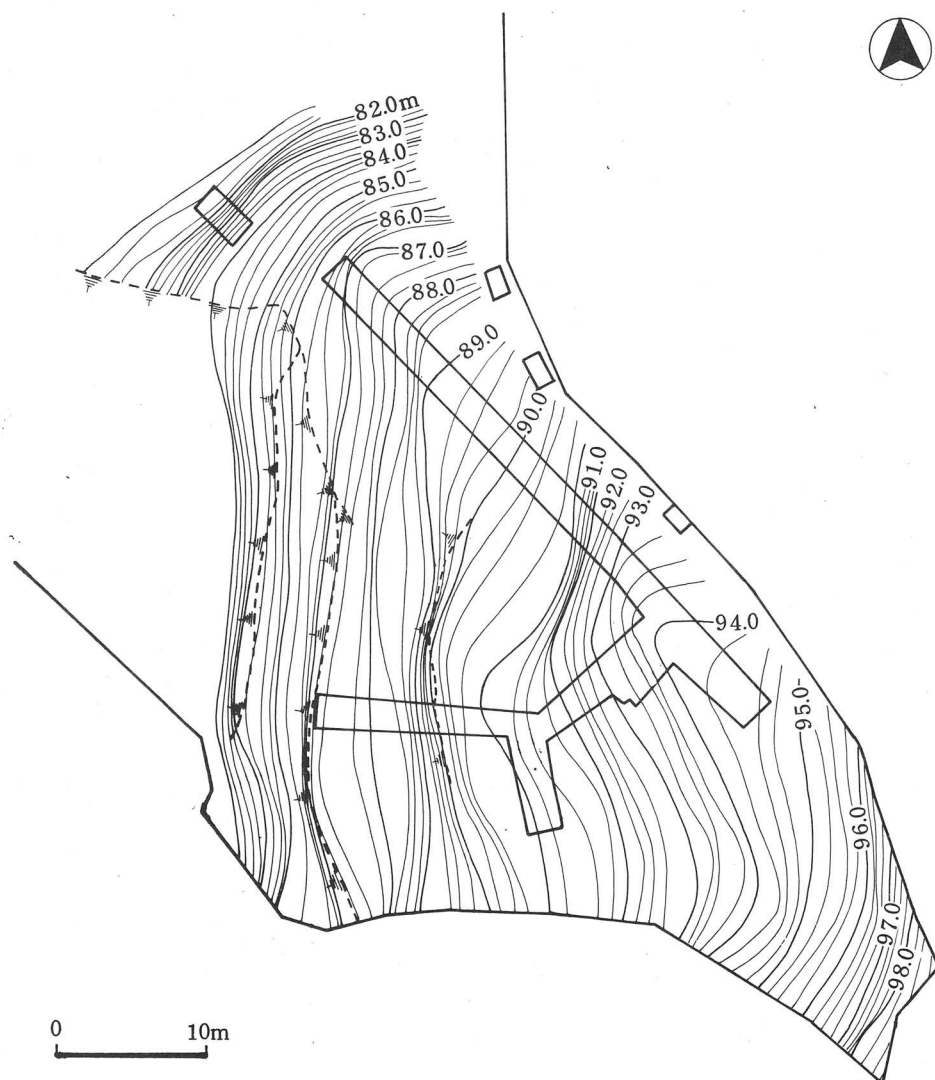
第 27 図 調査地周辺図 ( S = 1/5000 )

## 1. 調査の経過

八尾市大字教興寺・垣内周辺に所在する古墳群は高安古墳群と総称される高安山西斜面の古墳群のうちで約20基余の後期古墳によって構成されるまとまりのある群集墳であり、大字大窪、服部川、郡川に密集しているいわゆる高安千塚と称されている群集墳とは南へ1 km隔たっている。この付近は最近宅地造成や墓地造成等の土地開発がすすみ、昭和51年にも墓地造成によって家形石棺を内部に有する横穴式石室をもつ古墳が発見されており、それ以前にもかなりの数の古墳が破壊を受けている様子である。今回調査した垣内 412 - 1 他、教興寺 561・562 に所在する古墳は、従来山林となっており、その所在を確認することができなかった。昭和59年度に宗教法人釈迦寺より、当該土地を開発したい旨申し出があり、当文化財室は、府・市の開発許可を待って調査手続をすることとし、それまでの事前協議において、埋蔵文化財の保存について協議する方針であった。そこで、大阪府教育委員会へこの開発については当文化財室と事前に協議を要する旨連絡し、府教育委員会にも慎重に指導をしていたが、その後一年が経過した後、いかなる手違いか、当文化財室との事前協議すらなされないまま開発許可があり、工事着手寸前の段階で埋蔵文化財の処置について申請者より問い合わせがあった。当文化財室では、至急に試掘調査が必要であることを説くとともに、府教育委員会へ事態を連絡し、三者で協議することとなった。現地に行くとするで一部で工事が着手されており、この状態で一週間の調査期間を確保し、その間作業員の提供を得られるよう申請者と再三協議した結果、尾根部分の工事を一時中止し、調査に協力することで、申請者の了解を得ることができた。試掘調査は昭和60年6月6日に開始されたが、その結果工事区域内に3基の古墳が所在することが明らかとなった。申請者からは、これ以上の調査の継続は無理であるとの主張であったが、古墳を未調査のまま破壊するわけにもいかず、とりあえず工事が進行しない梅雨の間の6月中に発掘調査を完了するという期限を提示し、申請者の理解を得て、雨中調査を敢行することにした。発掘調査は、石室調査と墳丘調査を併行することにしたが、墳丘部は、予想外に後世の盛土が多く、限られた期限と作業員数では全掘は不可能と判断し、部分発掘に止めざるを得なかった。また石室調査についても細心注意を心がけたつもりであるが、調査体制すら組めないまま発掘調査に突入した為、学生の参加も期待できず、後悔の残る調査であったことは否めない。しかし、このような困難な状況の下で、これをみた高安城を探る会の方々より献身的な御援助を得ることができ、たいへん勇気づけられた。調査は二週間も期限を過ぎた7月15日に終了することができた。

## 2. 調査の方法

調査は当初、古墳の有無を確認することを目的として尾根の稜線上に幅2mのトレンチを2本設定し、手掘りにより発掘をし、併行して地形測量を実施した。その結果3基の古墳を確認したため、それぞれの古墳の墳丘範囲を追いながらトレンチの拡張を行なった。しかし、経費と時間の都合で、墳丘全域の調査は途中で放棄せざるを得なくなり、墳丘の断ち割りを行ない土層を観察することで、その範囲を確認することにした。また、石室の掘り下げは、できる限り、調査員及び調査補助員で実施した。実測図は石室の主軸に合わせ、任意に規準を設定する

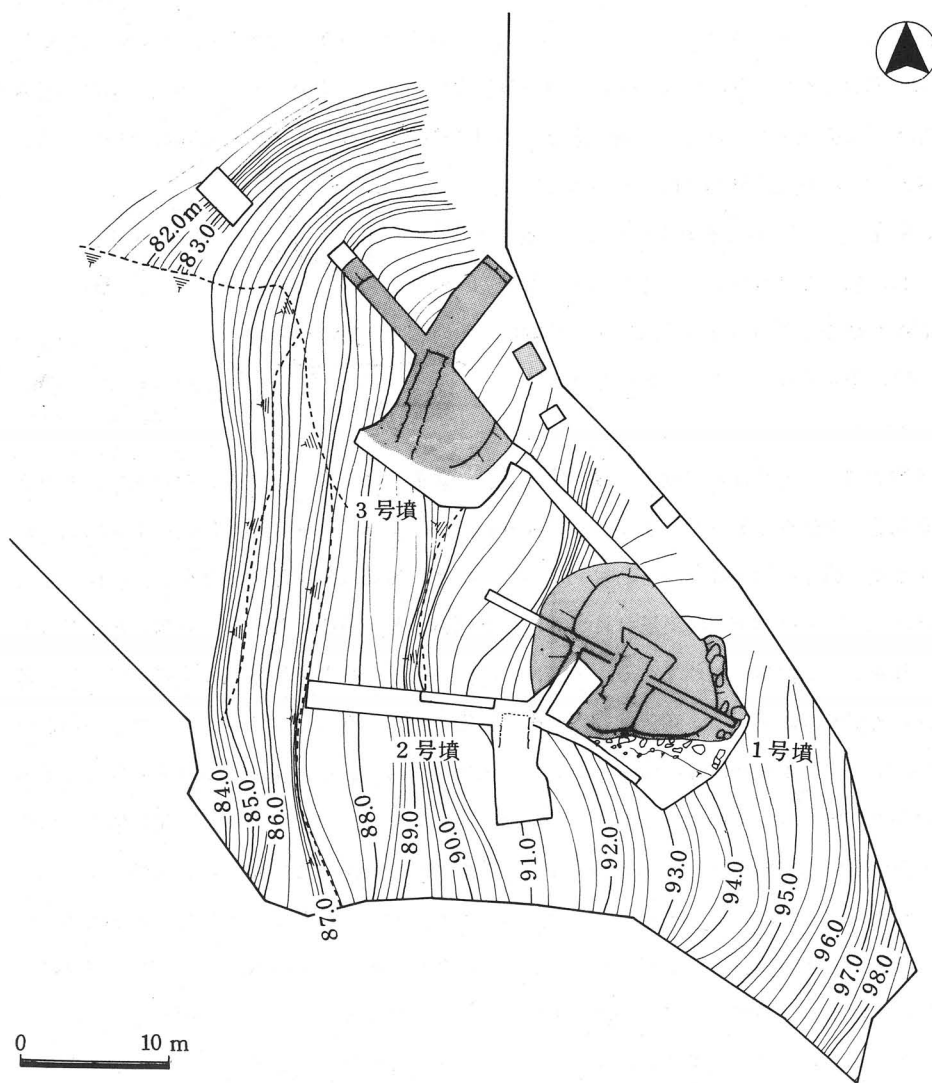


第28図 調査地設定図 (S = 1/500)

こととした。

なお、古墳の名称については、八尾市では生駒山地西斜面の古墳を総称して高安古墳群と呼称しているが、群を構成する各古墳に対し命名していない。

今回の調査で新たに発見された古墳3基は調査中、高所から1・2・3号墳と仮称されていたことより、今回の報告ではとりあえず、所在する字名である垣内を用いて高所から垣内1号墳、垣内2号墳、垣内3号墳と呼称した。したがって、調査中1号墳と仮称された古墳は今回の報告では高安古墳群垣内1号墳と命名されている。以下本書では1号墳と略して記述する。なお、今後高安古墳群の詳細な分布調査を実施し、改めて各古墳に命名する必要がある。(米田)



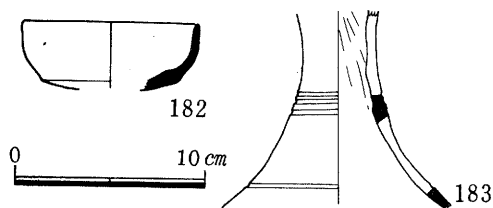
第29図 1～3号墳位置図 (S=1/500)

### 3. 検出遺構・出土遺物

#### 1. 垣内1号墳

立地 当古墳は、尾根上標高91.5 m～94.0 mに位置し、今回調査した3基のうち最高所に占地する。この古墳の南側はゆるやかな谷状の地形を呈していたが、調査の結果、南及び南東側がほとんど中世以後の盛土となっており、もとはさらに落ち込んでいる状況であることから、かなり明確な谷であったことがわかる。

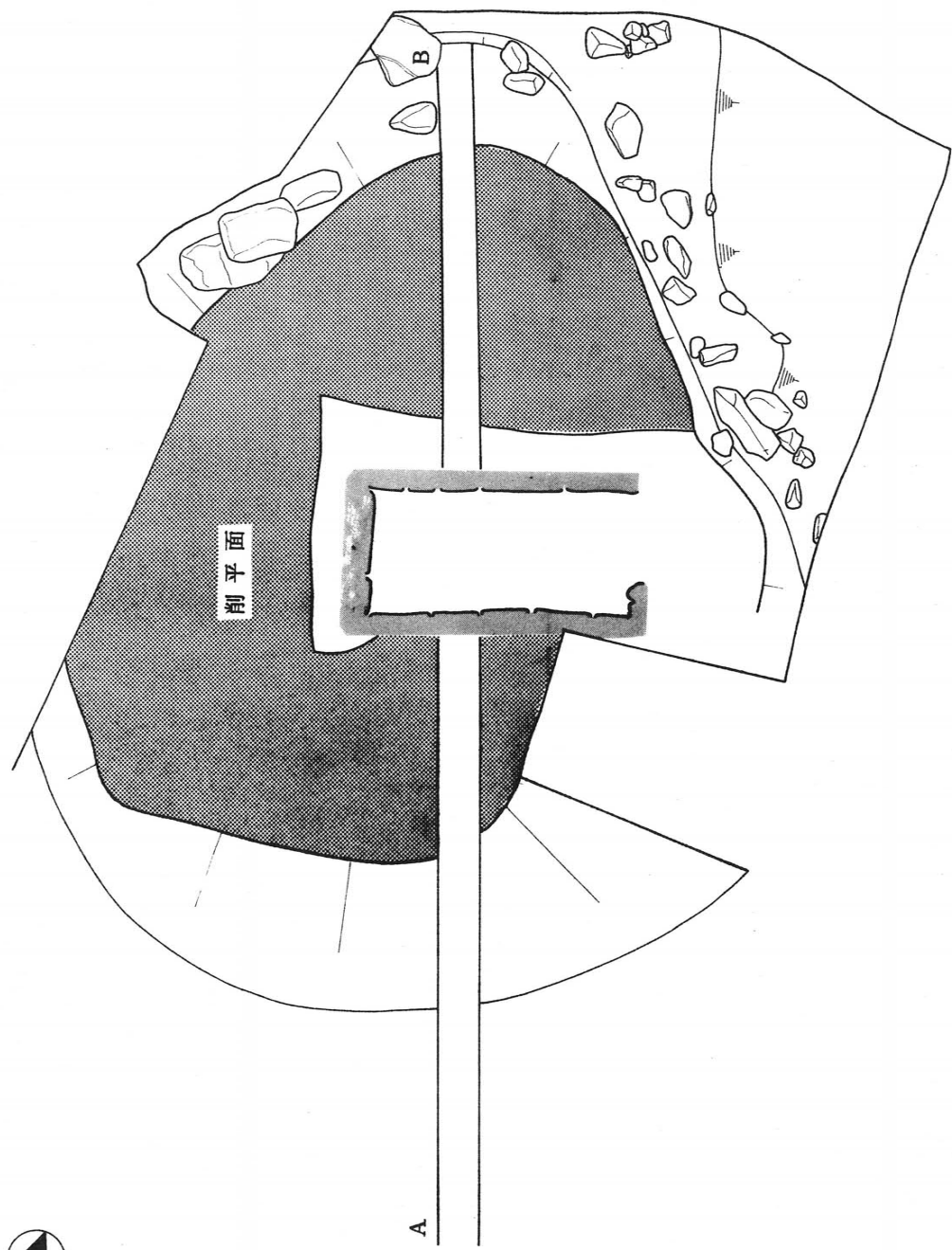
墳丘（第31図） 墳丘は、かなり削平を受けており、下半部が残存するのみであった。東西方向に設定した断ち割りトレンチの断面観察により、墳丘の築造は、岩盤上に堆積した黒茶色粘土層を基底として築成されていることがわかった。盛土はほぼ等質な暗茶褐色～淡茶褐色細砂によって構成されており、平均して約1.0 m残存していたことを確認した。墳丘の東側は岩盤を削り出して築成されており、西側と東側の傾斜変換線より径約13.0～14.0 mの円墳であると推定される。なお墳丘外側には、石室の破壊により、転落したとみられる石材が散乱した状態で検出され、墳丘を被う後世の盛土からは、磨滅した石棺の破片や須恵器蓋坏(182)・高坏脚部片(183)、土師器片とともに中世の瓦片が出土した。



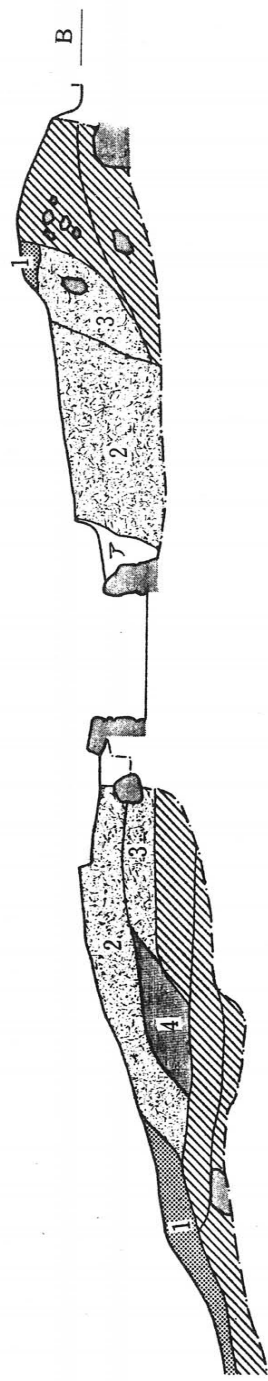
第30図 1号墳墳丘出土土器 (S=1/4)

石室（第32図） 石室は基底部のみ残存する。特に羨道部は完全に破壊された状態で、玄室部のみ基底石材が残存していた。玄室は長さ3.6 m、幅1.7 mで西側に袖を持つ片袖式の石室が想定される。石室は南西に開口し、N-21°-Wを指す。奥壁は最下段のみ残存し、一枚石で約70 cmを測る。側壁は両方とも奥壁付近が2段、玄門側が最下段のみ残存し、右側は基底が5石、左側も基底が5石で構成されている。床面は、石室構築面より上方約5 cmに位置しており、黄灰色砂質土が貼られている。羨道付近は小礫が検出され、当初、礫が敷かれていたものかと思われた。但し、石室排水溝等は検出することは出来なかった。石棺は、石室の奥壁付近で蓋石(S1)のみを床面近くで検出したが、いうまでもなく原位置を失っており、床面の精査の結果、石棺底石の痕跡で奥壁から約50 cm離れた玄室中央西寄りに置かれていたことを確認した。

遺物の出土状況（第33図） 土器は、奥壁西隅付近と玄室袖部付近で出土した。奥壁西隅では、須恵器直口壺(195)、土師器直口壺(185)が倒れた状態で、須恵器高坏(190)が口縁部を上にして出土し、須恵器蓋坏(187・188・189)が口縁部を下にして3枚重なって出土した。また、袖部付近では、須恵器長頸壺(194)、須恵器台付長頸壺(192)、須恵器高坏(191)が倒れた状態で、須恵器台付碗(193)が口縁部を上にして出土した。また、須恵器



第31图 1号墳墳丘平・断面图 (S = 1/100)



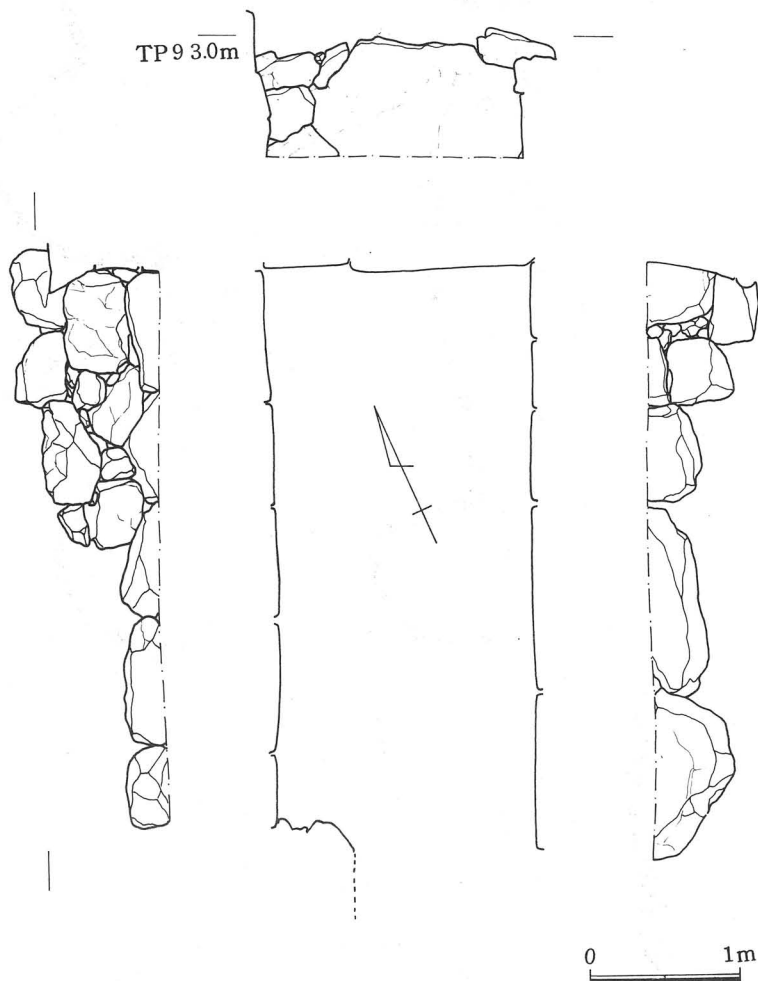
- 1 暗灰色細砂 (耕作土)
- 2 暗茶褐色細砂
- 3 淡茶褐色細砂
- 4 黑茶褐色粘土
- 了 淡茶褐色細砂

A  
TP93.0m

蓋坏(186)が口縁部を下にして出土した。これらは、ほぼ床面近くで出土しており、遊離はしているもののほぼ原位置に近い位置で出土していると思われる。鉄製品は、主として玄門付近から羨道部にかけて出土しており、剣先形の鉄製品(K4)、鉄鏃(K2・K3)が袖部付近の土器群付近で出土した。玄門から羨道にかけて鉄釘が出土しており、この付近に木棺が存在したことを示す状況であった。金環(K1)は、玄室のほぼ中央東南寄り出土した。これはもともと石棺内に置かれていたものであろう。(米田)

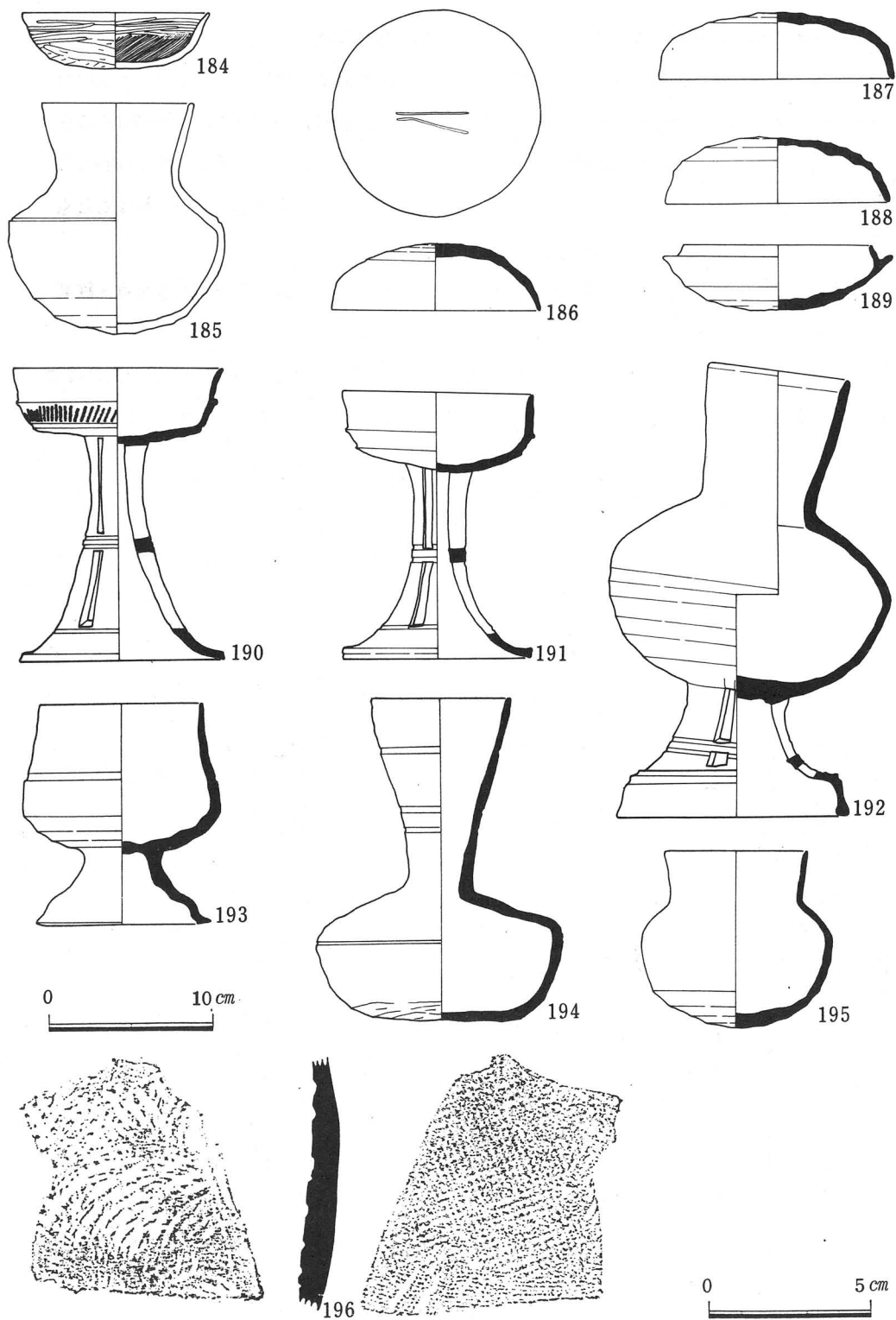
出土遺物 石室内墳丘上から古墳時代の土師器2点・須恵器11点・金環1点・鉄鏃2点・鉄剣1点・金具27点が出土した。

〔土器〕(第30・33図) 古墳時代の須恵器・土師器が石室床面、石室埋土、墳丘上の後世の堆積中より出土した。石室床面の土器はほぼ完形を呈しており、古墳に副葬されていたもの

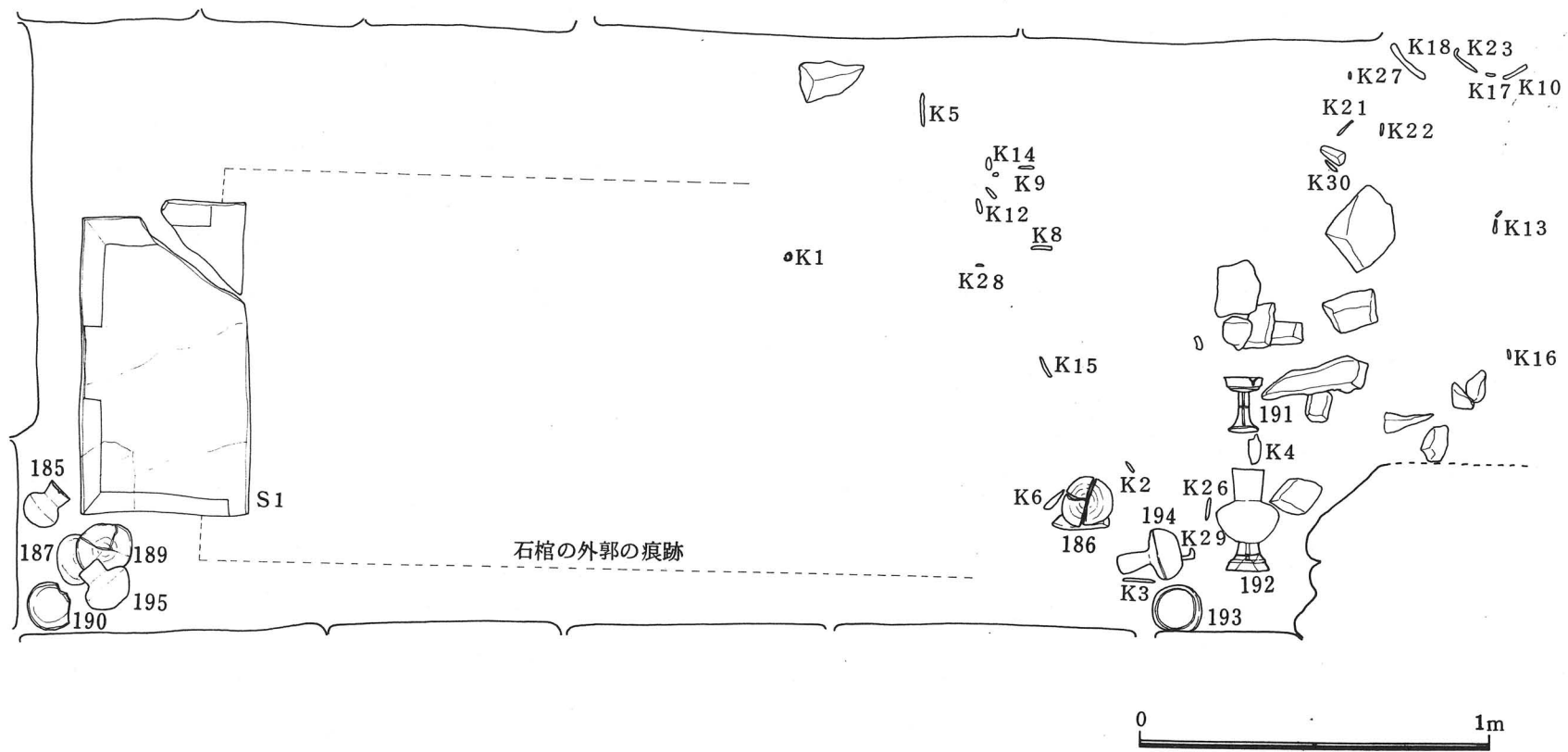


第32図 1号墳石室 (S=1/50)





第33图 1号墳石室内出土土器 (S = 1/4、1/2)



第34図 1号墳遺物出土状況 (S=1/20)

であると考えられよう。土師器壺(185)、須恵器蓋坏(187~189)・無蓋高坏(190)・直口壺(195)の6個体が奥壁西側付近の床面から出土し、須恵器蓋坏(186)・無蓋高坏(191)・台付長頸壺(192)・台付碗(193)・長頸壺(194)の5個体が袖部付近の床面から出土した。土師器坏(184)、須恵器甕(196)はいずれも小破片で、石室埋土より出土した。また、須恵器蓋坏の破片(182)・高坏の破片(183)が墳丘上の後世の堆積土中より出土した。185の焼成は土師質であるが、調整等は須恵器と酷似している。須恵器として製作されたものが、酸化炭焼成され、土師質となったものであろう。奥壁付近と袖部付近出土の須恵器を比較すると蓋坏・無蓋高坏の器径の減少など袖部付近出土の須恵器のほうに新しい様相がみられる。奥壁付近の須恵器蓋坏は陶邑編年のⅡ-4型式、<sup>1)</sup>袖部付近の須恵器蓋坏は飛鳥Ⅰ期にあたり、<sup>2)</sup>それぞれ、6世紀末、7世紀初頭のものと思われる。

第5表 出土遺物観察表

墳丘出土

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
182	須恵器 蓋坏 (身)	推定口径 9.2(1/4)	外面 口縁部~体部は回転ナデ。 底部は回転ヘラ切り未調整。 内面 回転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
183	須恵器 高坏	脚柱部(1/2)	外面 回転ナデののち、方形スカン(推定2段、2組)。 内面 しばりめ残存。回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。

石室内出土

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
184	土師器 鉢	口径 11.4(1/2) 器高 3.4	外面 体部~底部はヘラケズリののち、口縁部~体部上半にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキののち、底部~体部下半に暗文。	橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。
185	土師器 壺	口径 9.6(完存) 器高 14.2	外面 口縁部~胴部上半は回転ナデ。胴部下半~底部は回転ヘラケズリ(右回り)。 内面 回転ナデ。	にぶい橙。白色砂粒(小・中)を少量含む。	土師質であるが、堅緻。
186	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 12.8(完存) 器高 4.0	外面 回転ナデののち、器高の1/3は回転ヘラケズリ(左回り)。 内面 回転ナデ。	青灰。白色砂粒(小・中)を少量含む。	焼成良好。天井部にヘラ記号。

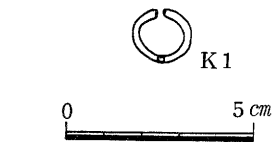
遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
187	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 14.4(完存) 器高 4.0	外面 回転ナデののち、器高の 1/4は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中・大) を少量含む。	焼成良好。
188	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 13.4(完存) 器高 4.0	外面 回転ナデののち、器高の 2/5は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中・大) をやや多量に含む。	焼成良好。坏 部外面に自然 釉が付着。
189	須恵器 蓋坏 (身)	口径 11.6( $\frac{2}{3}$ ) たちあがり高 0.8 器高 4.0	外面 回転ナデののち、体底部 1/2は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデ。	暗オリーブ灰。白色砂粒(小 ・中)を少量含む。	焼成良好。た ちあがり部～ 体底部外面の 一部に自然釉 が付着。
190	須恵器 高坏	坏部口径 12.6(完存) 坏部高 4.6 器高 18.0 脚底径 12.4 脚部高 13.4	外面 坏部たちあがりは回転ナ デ。櫛描列点文を右下方 から施す。底部は回転ヘ ラケズリ(左回り)。脚 部は回転ナデののち、方 形スカシ(2段、3組) を施す。 内面 坏部たちあがりは回転ナ デ。坏部底部は不定方向 のナデ。脚部は回転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) をやや多量に含む。	焼成良好。坏 部～脚部外面 の一部、坏部 内面、脚部内 面の一部に自 然釉が付着。
191	須恵器 高坏	坏部口径 11.6 坏部高 5.2 器高 16.4 脚底径 5.7(完存) 脚部高 11.4	外面 坏部たちあがりは回転ナ デ。底部は回転ヘラケズ リ(左回り)。脚部は回 転ナデののち、方形スカ シ(2段、3組)。 内面 坏部は回転ナデ。脚部は 回転ナデ。	外・内一灰。断一暗紫灰。 白色砂粒(小・中)を少量 含む。	焼成良好。坏 部～脚部外面 の一部に灰を かぶる。
192	須恵器 台付長 頸壺	口径 8.8(完存) 器高 27.0～28.6 台底径 14.2 台部高 7.4	外面 口頸部～胴部は回転ナデ ののち、胴部下半は回転 ヘラケズリ(左回り)。 台部は回転ナデののち、 方形スカシ(2段、3組)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中・大) を少量含む。	焼成良好。胴 部上半外面、 台部下半外面 に自然釉が付 着。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
193	須恵器 台付椀	口径 10.0(完存) 椀部高 9.0 器高 13.6 台部径 10.6 台部高 4.4	外面 椀部は回転ナデののち、 回転ヘラケズリ(左回り)。 脚部は回転ナデ。 内面 回転ナデ。	青灰。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。
194	須恵器 壺	口径 8.4(完存) 器高 19.6	外面 回転ナデののち、底部は 不定方向のヘラケズリ。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中・大) をやや多量に含む。	焼成良好。口 頸部外面の一 部、胴部上半 外面、口頸部 内面に灰をか ぶる。
195	須恵器 壺	口径 8.6(完存) 器高 11.2	外面 口縁部～胴部は回転ナデ ののち、胴部下半～底部 は回転ヘラケズリ(左回 り)。 内面 回転ナデ。	灰白～灰。白色砂粒(小・ 中)を少量含む。	焼成良好。口 縁部～体部上 半外面、口縁 部内面に自然 釉が付着。
196	須恵器 甕	(破片)	外面 格子タタキののち、カキ 目。 内面 同心円タタキ。	明オリーブ灰。白色砂粒(小 ・中)を少量含む。	焼成良好。

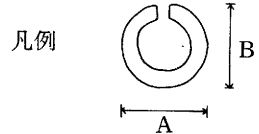
〔金環〕(第35図) 玄室中央付近の床面で金環(K1)が出土した。突合せ部を観察すると切断痕が明瞭にみられることより金張りでないことが明らかである。硬度であることより、かなり純度の低い合金で製作されたものと思われる。

第6表 1号墳出土金環計測表

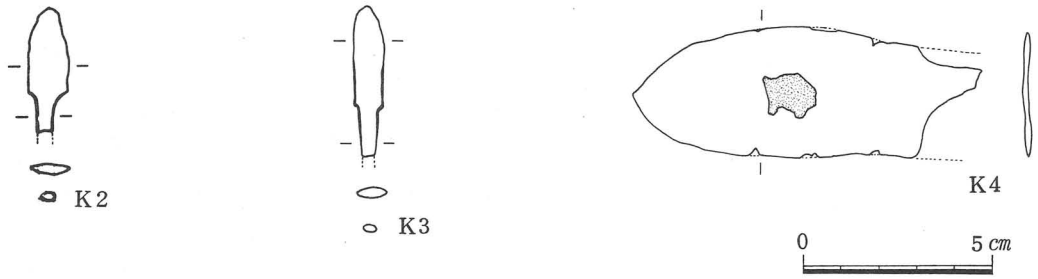
番号	外径径(cm) A × B	断面径(cm)	質量(g)	備考
K1	1.6 × 1.4	0.2	1	合金。



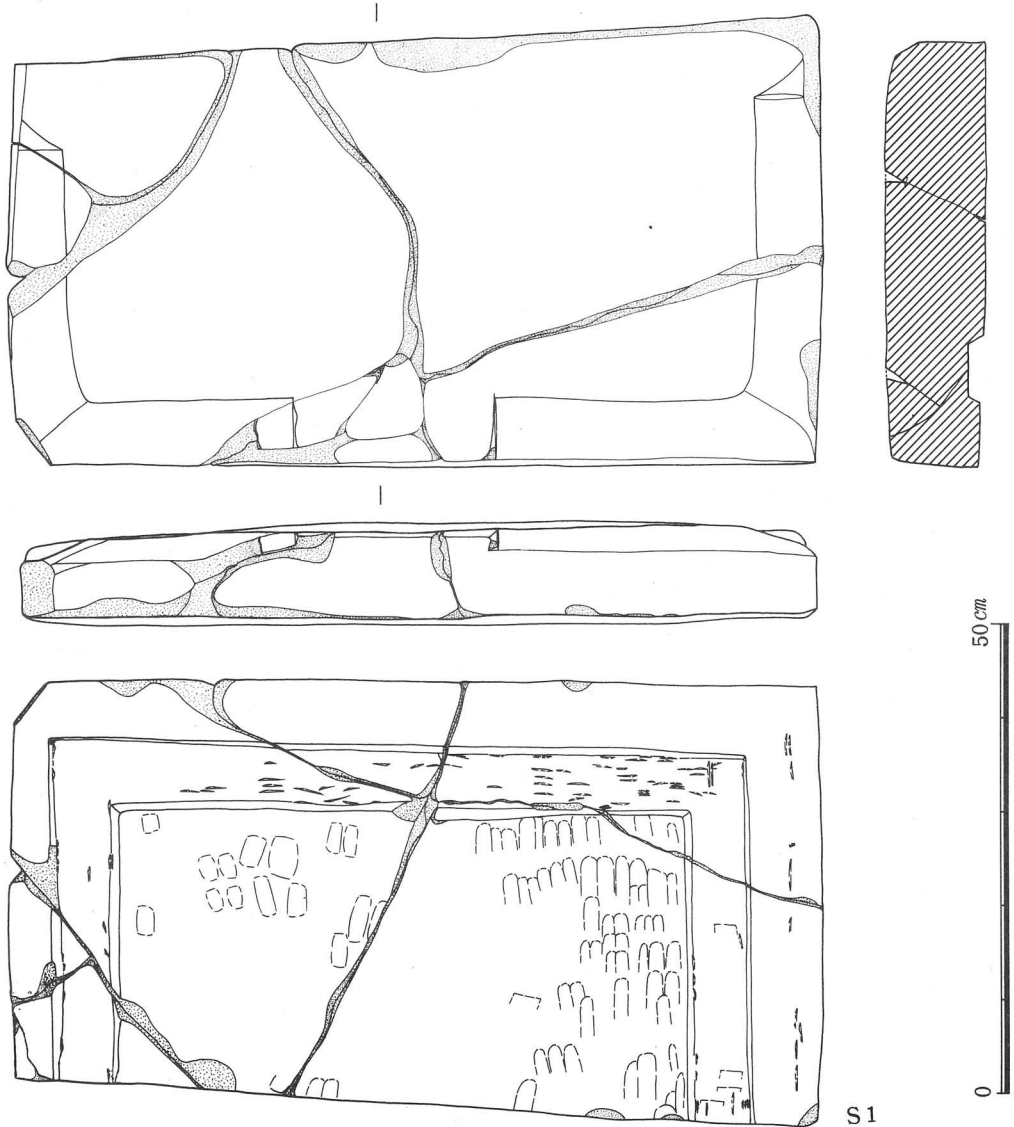
第35図 1号墳出土金環  
( $S=1/2$ )



〔武器〕(第36図) 石室袖部付近の床面より鉄鏃(K2・K3)、鉄剣(K4)が出土した。K2・K3はいずれも茎端が欠損している。K2は現存長3.3cm、刃部の最大幅1.0cmを測り、K3は現存長4.0cm、刃部の最大幅0.8mを測る。K4は剣先のみ現存しており、現存長9.1cm、刃部の最大幅3.5cmを測る。



第36图 1号墳出土武器 (S = 1/2)



第37图 1号墳出土石棺 (S = 1/8)

〔石棺〕(第37図) 組合式の家形石棺の蓋(S1)が石室奥壁付近の床面より出土し、磨滅した石棺の小破片が墳丘東斜面より少量出土した。いずれも凝灰岩製である。石棺は床面に落下した凝灰岩片の存在より、長辺を石室の主軸に平行にして置かれたものと考えられる。また、長辺が約2mを測ると考えられることよりS1は4枚で構成される棺蓋の1枚であろうと思われる。S1は縄掛突起が三方にみられることより、組み合わせの棺蓋の中で端を構成するものであろう。S1の平面形は台形を呈し、石棺の長側石にあたるS1の短辺は42.4cm、47.0cmを測り、石棺の短側石にあたるS1の長辺は83.0cmを測る。天井部の平坦面は短側石側で68.0cmを測り、縄掛突起は面取りによって削り出されている。厚さは9.6~10.4cmを測る。内面に刳込みはみられず、幅6.8~8.0cm、深さ1.8cmの溝が三方をめぐっている。この溝は、側石と組み合わせるためのものであると考えられ、棺の内法は幅59.0cmを測ると思われる。また、外面には加工痕はみられないが、内面にはノミ状工具による加工痕が残存する。

〔金具〕(第38図) 27本の金具が玄室南半部から玄門付近にかけて出土した。完形品はなく、いずれも破損している。K5~K28は鉄釘である。K29・K30は全体は不明であるが、屈曲しており、屈曲部を境に断面幅が異なっていることより、鏃である可能性も考えられる。K31は穿孔がみられるが、用途不明である。頭部形態のわかるものはK5・K6・K8・K15だけである。いずれも無頭であり、打ち込みの際の打撃で、頭部は若干歪んでいる。断面形態は正方形を呈するものと長方形を呈するもの2種類がみられる。各釘の断面最大値は正方形を呈するもので0.4×0.4cm~1.0×1.0cmを測り、長方形を呈するものでは0.5×0.3cm~1.2×0.7cmを測る。(嶋村)

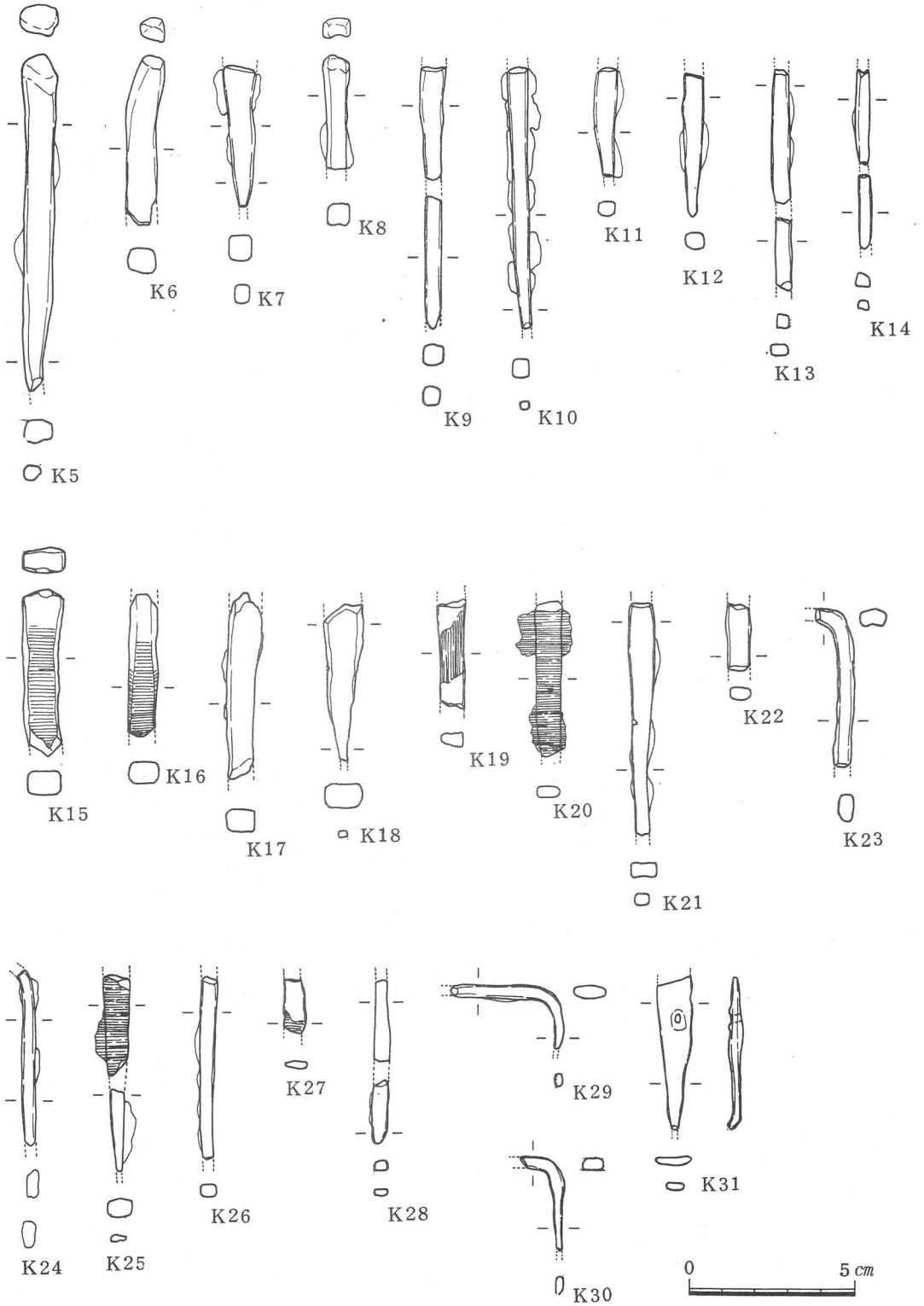
第7表 1号墳出土金具計測表

単位: cm

番号	全長(現存長)	頭部形態	断面形態	断面最大値	断面最小値	備考
K 5	(10.5)	無頭	正方形	1.0×1.0	0.5×0.5	
K 6	(5.3)	無頭	正方形	0.9×0.9	0.8×0.8	
K 7	(4.4)	—	正方形	1.0×1.0	0.2×0.2	
K 8	(3.6)	無頭	正方形	0.7×0.7	0.6×0.6	
K 9	(3.5+4.2)	—	正方形	0.8×0.8	0.4×0.4	
K10	(7.2)	—	正方形	0.6×0.6	0.3×0.3	
K11	(3.5)	—	正方形	0.7×0.7	0.4×0.4	
K12	(4.5)	—	正方形	0.6×0.6	0.3×0.3	
K13	(4.2+2.3)	—	正方形	0.5×0.5	0.3×0.3	

番号	全長（現存長）	頭部形態	断面形態	断面最大値	断面最小値	備 考
K 14	（ 3.0+2.3 ）	—	正 方 形	0.4 × 0.4	0.3 × 0.3	
K 15	（ 5.2 ）	無 頭	長 方 形	1.2 × 0.7	1.0 × 0.7	横方向の木目残存。
K 16	（ 4.4 ）	—	長 方 形	1.0 × 0.7	0.9 × 0.7	横方向の木目残存
K 17	（ 5.9 ）	—	長 方 形	1.1 × 0.8	0.7 × 0.6	
K 18	（ 4.9 ）	—	長 方 形	1.3 × 0.7	0.3 × 0.3	
K 19	（ 3.4 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.5	0.7 × 0.5	縦方向の木目残存。
K 20	（ 4.8 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.4	0.7 × 0.4	横方向の木目残存。
K 21	（ 7.2 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.5	0.5 × 0.4	
K 22	（ 2.1 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.5	0.6 × 0.4	
K 23	（ 5.5 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.6	0.8 × 0.5	
K 24	（ 5.6 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.4	0.8 × 0.3	
K 25	（ 3.2+2.6 ）	—	長 方 形	0.8 × 0.6	0.2 × 0.1	横方向の木目残存。
K 26	（ 5.2 ）	—	長 方 形	0.5 × 0.4	0.3 × 0.3	
K 27	（ 1.7 ）	—	長 方 形	0.7 × 0.2	0.5 × 0.2	横方向の木目残存。
K 28	（ 2.6+2.0 ）	—	長 方 形	0.5 × 0.3	0.4 × 0.2	
K 29	（ 4.6 ）	—	長 方 形	1.0 × 0.4	0.4 × 0.2	
K 30	（ 4.9 ）	—	長 方 形	0.7 × 0.4	0.6 × 0.2	
K 31	（ 3.9 ）	—	長 方 形	1.1 × 0.2	0.6 × 0.2	





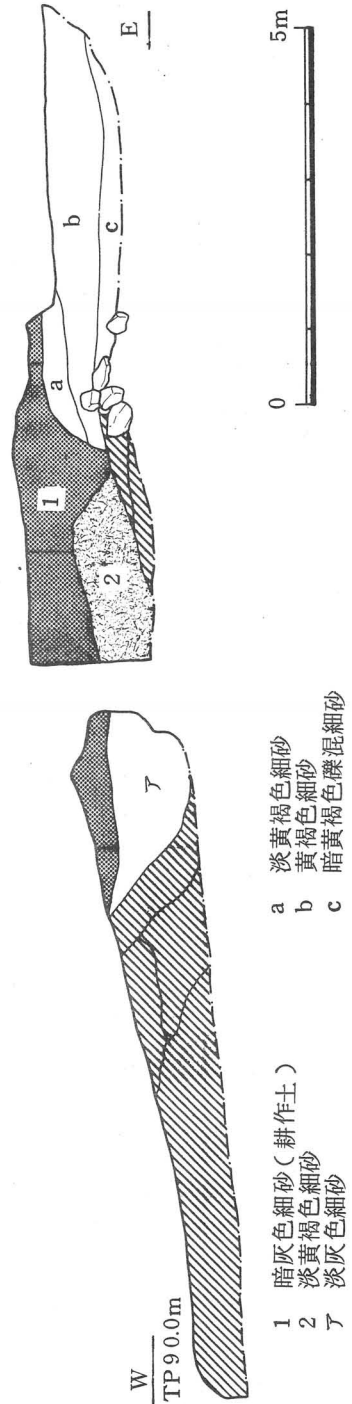
第38图 1号墳出土金具 (S=1/2)

## 2. 垣内2号墳

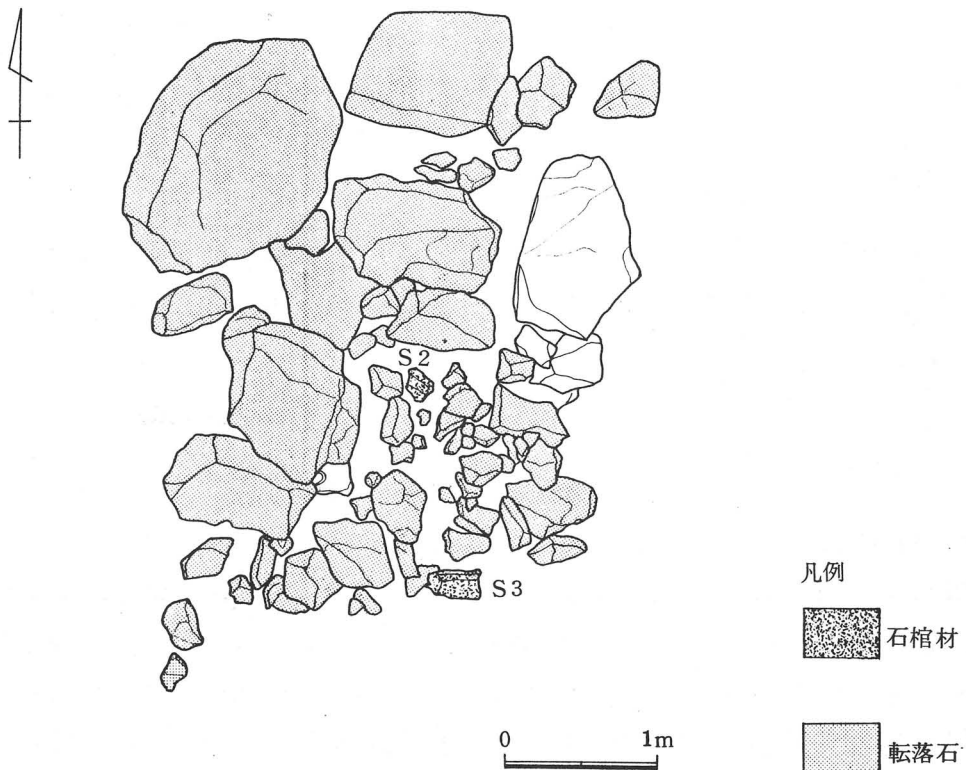
立地 1号墳の南西側に位置し、南向きの斜面に築造された古墳である。石室床面の標高は88.6mで、1号墳の石室床面とは3.6mの比高差がある。

墳丘（第39図） 地形測量では南側の谷に対して隆起状を呈していたが、墳丘を画する溝などの施設は確認することが出来なかった。東西に設定したトレンチより、墳丘の西半は岩盤となっており支尾根の先端を利用している。東半は谷状の上に淡灰色細砂を盛土して築成している。このように、墳丘の東半と西半との構造が異なっており、その境付近に石室が築成されている。墳丘の東西幅はトレンチ土層断面より約15mと考えられるが墳形は確認することができなかった。石室奥壁部の北側はすぐ1号墳の墳丘裾になっており、斜面に築成されているため、もとより明確な墳形を呈していなかったと推定される。

石室（第40図） ほぼ南北方向に主軸を持つ横穴式石室と思われるが、後世の破壊により、ほとんど旧状は不明である。検出時の状況は、天井石が西壁側及び石室内に落ち込み、それに伴って西側壁及び奥壁が著しく崩壊している。東側壁は、奥壁から約2mは良好に残存している。また破壊により崩れ落ちた石材とともに組合せ式の凝灰岩製石棺材（S2～S4）が散乱した状況で出土した。このような状況で石室の形状は復元し難いが、東壁と西壁の残存部分の間隔より、幅1.7mを測る石室で、南に開口し、石室の主軸はN-1°-Wを指すと思われる。奥壁は全て破壊されていたが、東壁の北端がほぼ奥

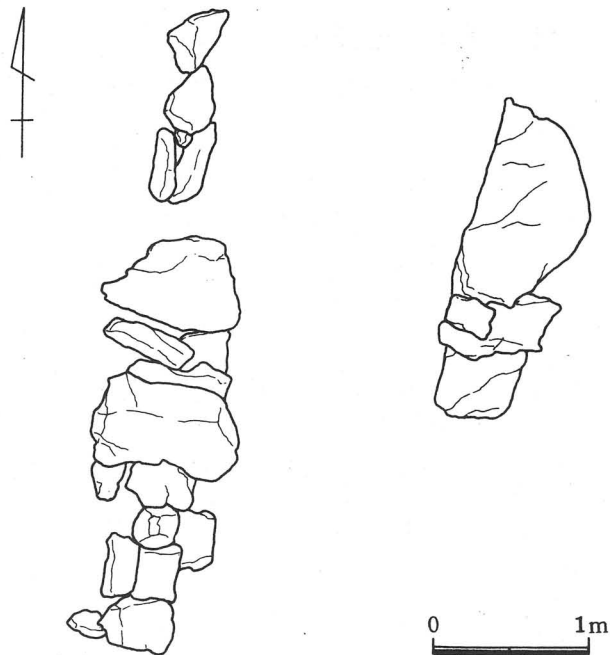


第39図 2号墳墳丘断面図(S=1/100)

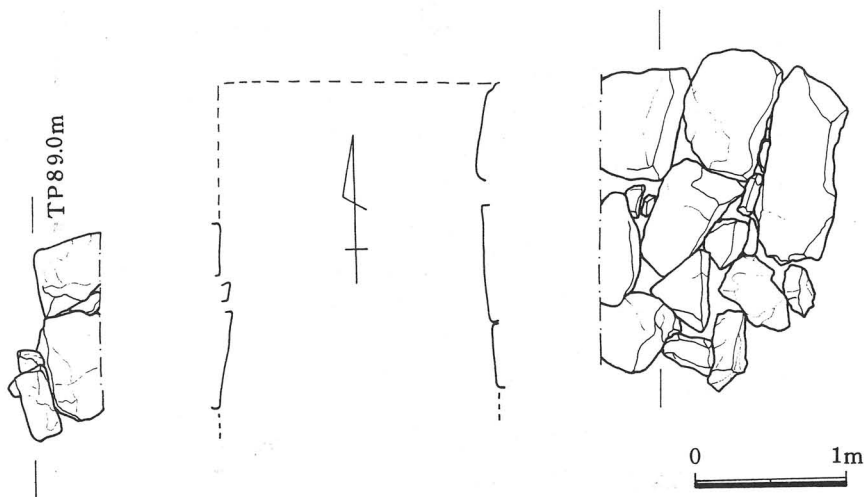


第40図 2号墳石室検出状況 (S = 1/50)

壁の位置にあたと推定され、この位置から、東壁残存部分の先端までが約2m、西壁の残存部分の先端までが約4.3mあり、その先の石材及び抜き取り痕は確認できなかった。石室の床面は標高が88.6mで、径30cm大位の礫が石室中央付近に散存した。石室高は不明であるが部分では1.6mを測る。西壁では推定奥壁位置から3mで石材の組み方が変わっており、ほぼ東壁残存部分の先端に対応する。いずれにせよ、この位置から奥が墓室として意図されていたものと考えられる。以上から考えられることは、当古墳の石室が、無袖式ま



第41図 2号墳石室平面図 (S = 1/50)



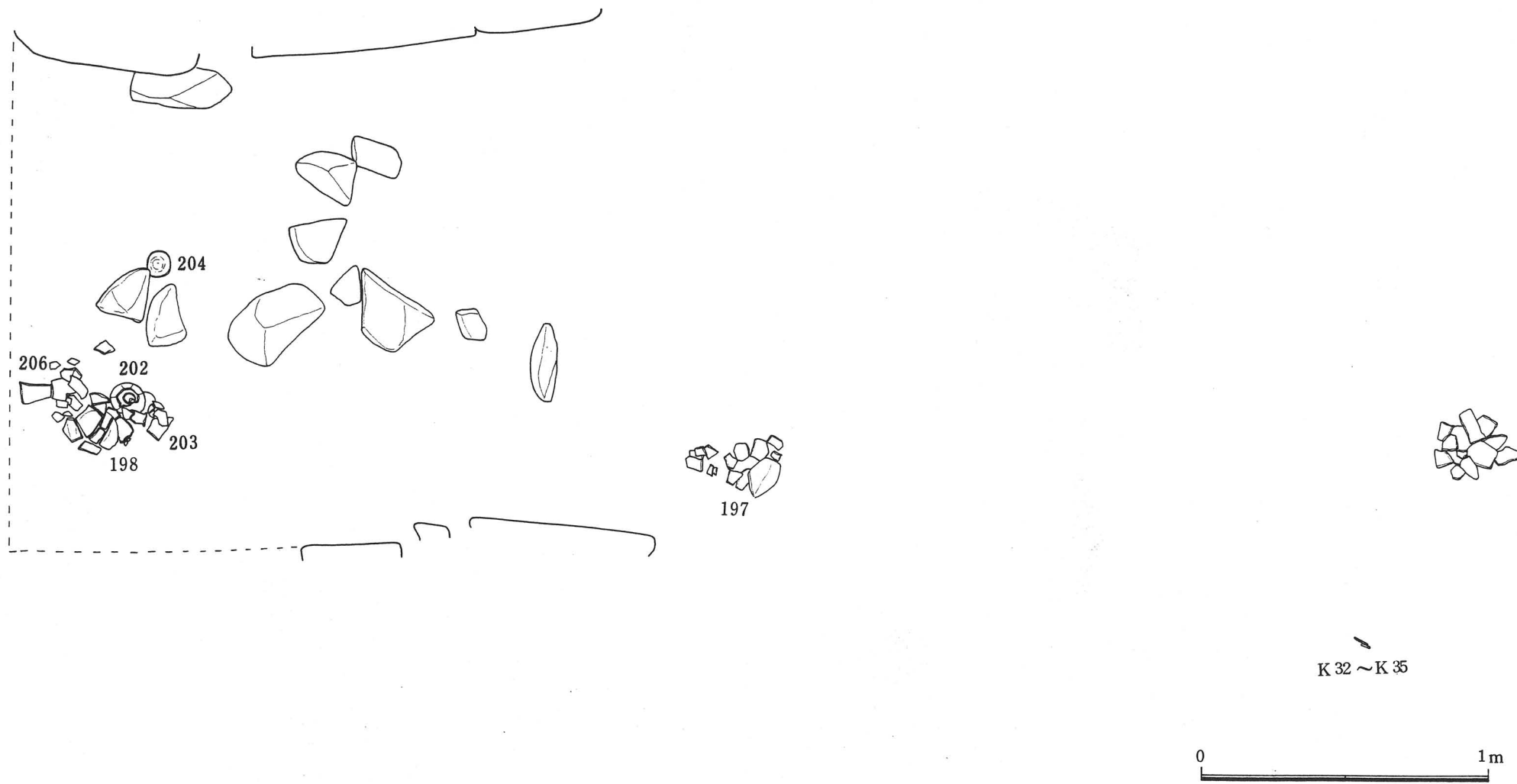
第42図 2号墳石室 (S=1/50)

たは石槨形式の横穴式石室であった可能性を想定できる。

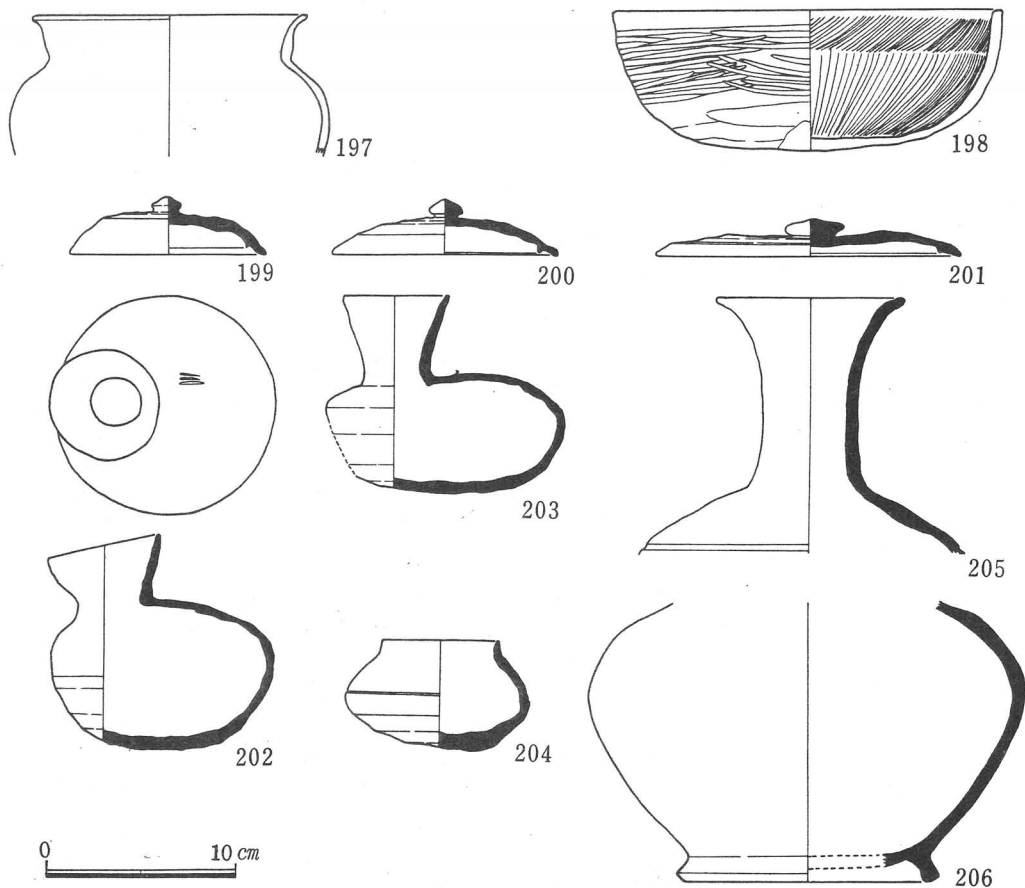
遺物の出土状況(第43図) 出土遺物は、主として土器であり、石室奥壁付近の西側床面にまとまって出土しており、須恵器平瓶(202・203)・蓋坏(199・200)・壺(206)、土師器鉢(198)等が折り重なっていた。また奥壁中央付近床面からは須恵器壺(204)が口縁部を下にして出土している。また西側壁先端付近の内側に土師器甕(197)が出土し、石室主軸上の西側壁先端から前方2mの床面とほぼ同じレベルから土師器甕の底部が、その西側すぐより鉄釘(K32~K35)と土師器片がまとまって出土している。この他、奥壁部分の崩壊石材の上から須恵器蓋坏(201)が出土した。(米田)

出土遺物 石室内及び石室前方で7世紀代の土師器2点、須恵器7点、組合式石棺の破片数点、金具4点が出土した。

〔土器〕(第44図) 7世紀代の土師器、須恵器が石室床面、石室の前方、奥壁の崩壊石上から出土した。土師器坏(198)、須恵器蓋坏(199・200)・平瓶(202・203)・壺(204・206)が奥壁推定付近の床面から出土し、土師器甕(197)が石室の前方、床面と同レベルで出土した。また、須恵器蓋坏(201)は奥壁崩壊石上から出土した。198は内面に2段の放射状暗文を施し、口縁部外面を緻密にヘラミガキしている。器高指数(器高/口径×100)は38で、飛鳥Ⅲ期の「杯A1」にあたる。<sup>3)</sup> 199・200はいずれもやや扁平な宝珠つまみをもつ。若干200のほうが口径で法量に差異がみられるが、概ねTK217号窯出土例と近似した形態・法量をもつことから、これらは飛鳥Ⅲ期に比定され、7世紀後半のものであると思われる。<sup>4)</sup> また、201は口径16.4cmを測り、ごくわずかにかえりを有することから飛鳥Ⅳ期に比定され、7世紀末のものであると思われる。



第 43 图 2号墳遺物出土状況 (S = 1/20)



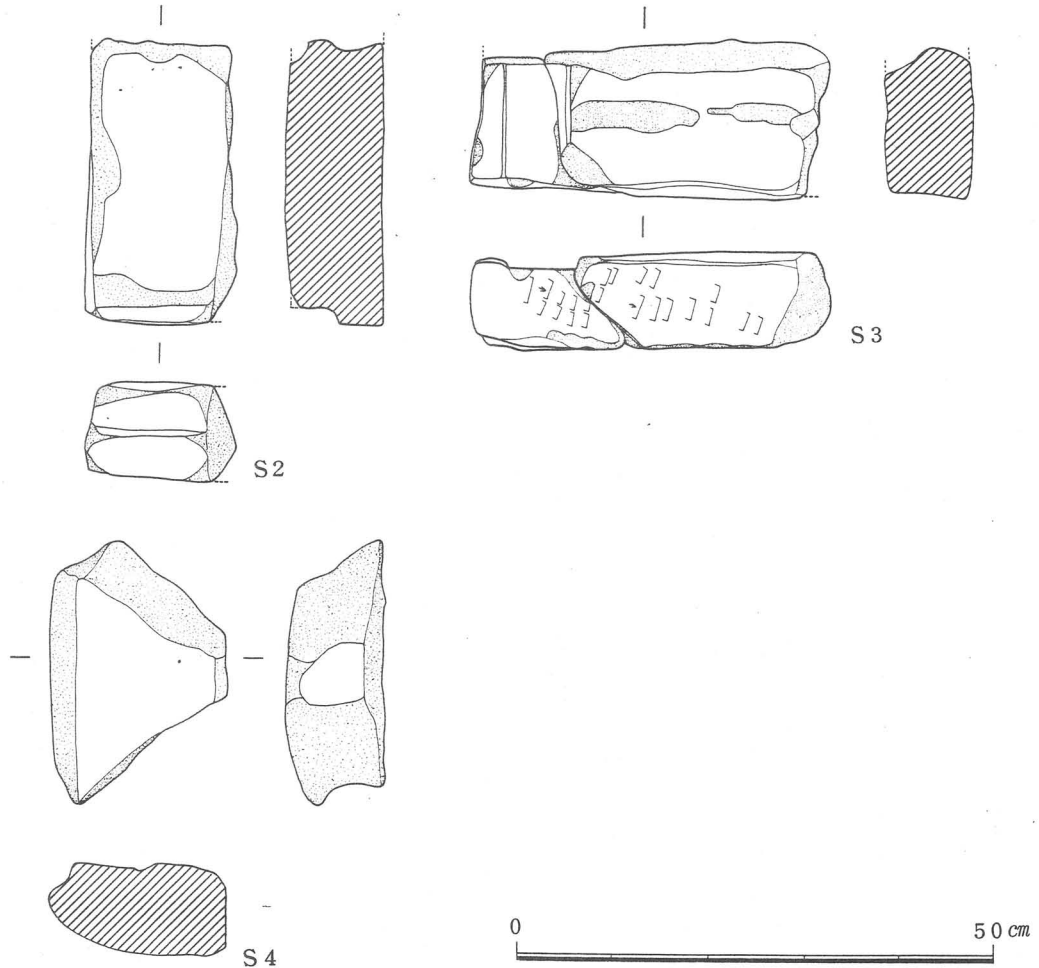
第44図 2号墳石室内出土土器 (S = 1/4)

第8表 出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
197	土師器 甕	推定口径 7.2 (1/4)	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 はナデ。	橙。白色砂粒(小・中)を 少量含み、茶色砂粒を微量 含む。	焼成良好。
198	土師器 杯	口径 20.6 (完存) 器高 7.6	外面 ヨコナデののち、体部上 半はヘラミガキ。体部下 半~底部はヘラナデ。 内面 口縁部~体部はヨコナデ、 底部はナデののち、体部 上半・下半に暗文。	橙。白色砂粒(小)を微量 含む。	焼成良好。口 縁部~底部外 面に黒斑あり。
199	須恵器 蓋 坏 (蓋)	口径 10.4 (完存) 器高 3.0 つまみ径 1.6 つまみ高 0.8	外面 回転ナデののち、器高の 1/4は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデののち、天井部 は不定方向のナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。天 井部の周縁に 煤が附着。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 <i>cm</i> /	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
200	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 6.0 (1/2) 器高 3.0 つまみ径 1.8 つまみ高 1.0	外面 回転ナデののち、器高の 1/2は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデののち、天井部 は不定方向のナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量を含む。	焼成良好。
201	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 16.2(完存) 器高 2.0 つまみ径 3.1 つまみ高 1.0	外面 回転ナデののち、器高の 1/2は回転ヘラケズリ。 内面 回転ナデののち、天井部 は、不定方向のナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。天 井部外面に自 然軸が付着。 口縁部に多少 のゆがみをも つ。
202	須恵器 平瓶	口径 6.2(完存) 器高 5.1~5.8	外面 回転ナデののち、胴部下 半~底部は回転ヘラケズ リ(左回り)。胴部上半 にヘラ状工具による線刻。 内面 回転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。
203	須恵器 平瓶	口径 5.6(完存) 器高 5.3	外面 回転ナデののち、体部下 半~底部は回転ヘラケズ リ(左回り)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。口 頸部内外面、 胴部上半外面、 底部内面の一 部に灰をかぶ る。
204	須恵器 短頸壺	口径 6.2(完存) 器高 5.6~6.0	外面 口縁部~胴部上半は回転 ナデ。胴部下半~底部は 回転ヘラケズリ(左回り)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。胴 部下半~底部 に灰をかぶる。
205	須恵器 長頸壺	推定口径 10.0 (1/2)	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。口 頸部外面の一 部に自然軸が 付着。
206	須恵器 壺	推定高台径 14.0 (1/4) 高台高 1.4	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。

〔石棺〕（第45図） 2号墳の石室崩壊石の間から凝灰岩製の組合式石棺の破片が散乱した状態で出土した。図化できるものは3点のみである。S2は組合式石棺の長側石である。厚さ10.0cmを測る。段状の加工があり、この段を短側石の彫り込みに挿入し、短側石と結合させたものと考えられる。段の突出部は長さ1.8cm、幅4.8cmを測る。S3は組合式石棺の小口にあたる短側石である。厚さ9.2cmを測る。片面に上端で幅8.0cm、下端で幅7.2cmの溝をもつ。この溝は長側石を挿入するための彫り込みであると思われ、この面は石棺の内面に当たる面であると考えられる。また、底石または蓋石のいずれかと接する面にはノミ状工具痕が残存し、整形のあとがうかがえる。S4は組合式石棺の破片である。小片のため部位不明である。



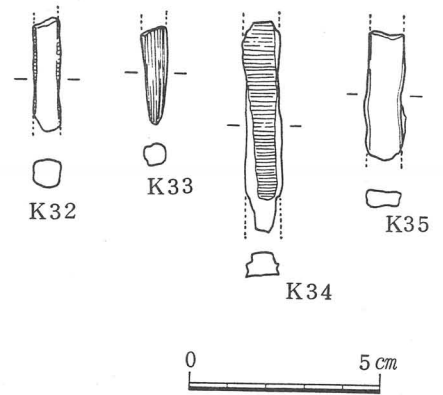
第45図 2号墳出土石棺（S=1/8）

〔金具〕（第46図） 4本の鉄釘（K32~K35）が石室前方より出土した。いずれも破損しており、完形品はなく、頭部形態も不明である。断面形態は正方形を呈するもの（K32）と長方形を呈するもの（K35）の少なくとも2種類がみられる。断面最大値は0.7×0.7cm~1.0



×0.8 cmを測り、1号墳出土の鉄釘とほぼ同様の断面値を示す。K32～K34は木目が残存することから、使用されたものであることがわかる。K32～K35は石室前方のほぼ同一地点で出土しており、また4本の鉄釘で本棺を構成することは不可能であることから、2号墳に埋葬された本棺を構成した鉄釘であるとは考え難い。

(嶋村)



第46図 2号墳出土金具 (S=1/2)

第9表 2号墳出土金具計測表

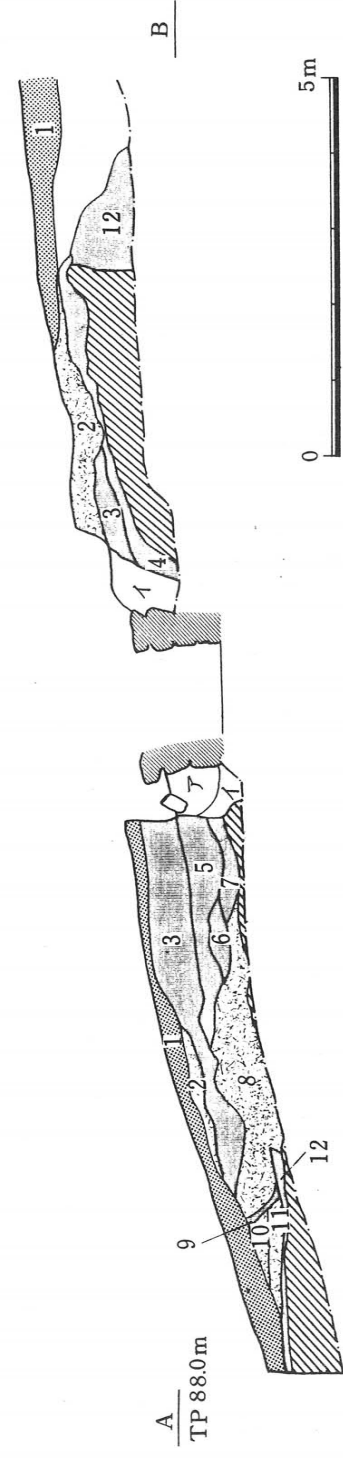
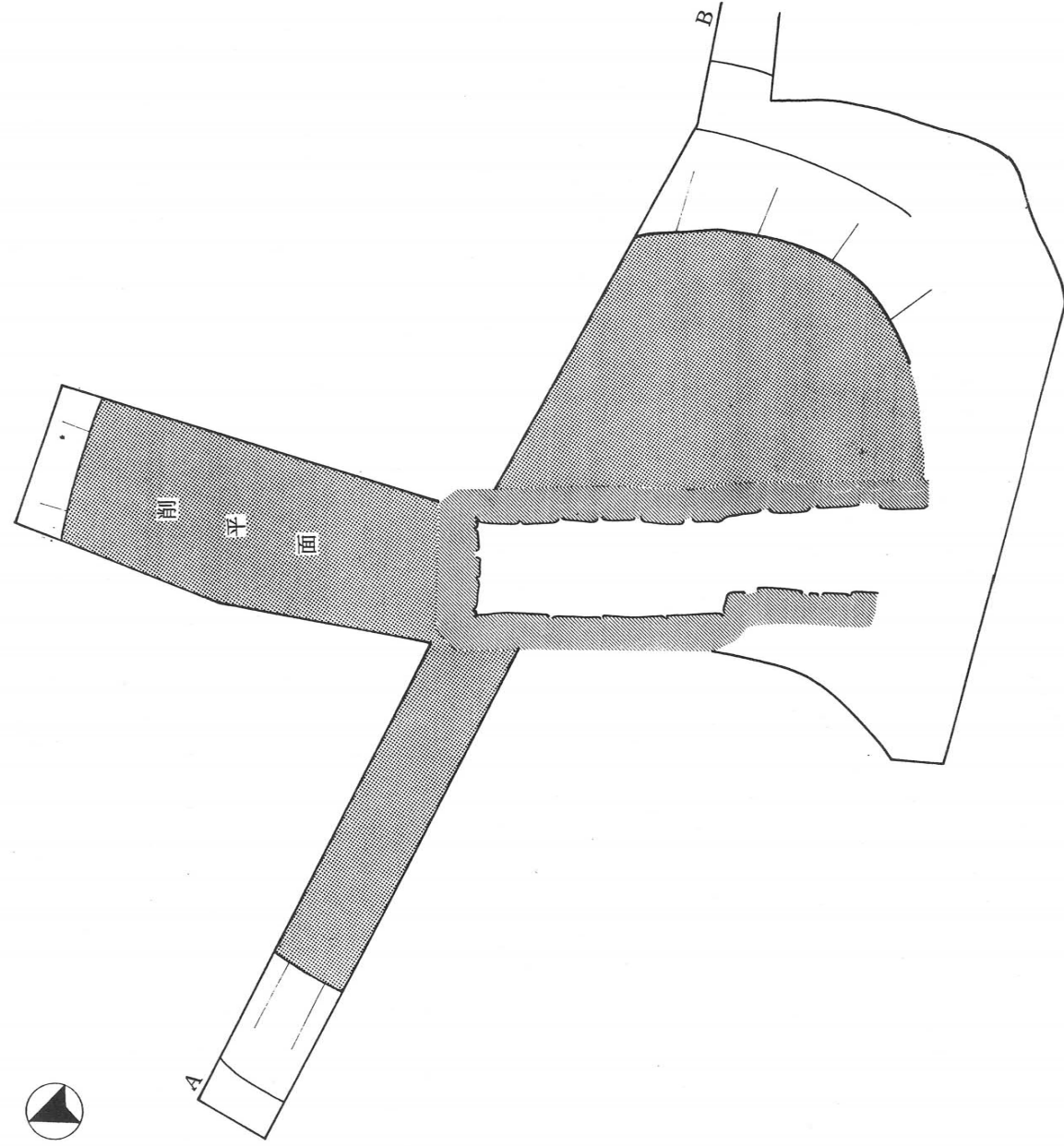
単位：cm

番号	全長(現存長)	頭部形態	断面形態	断面最大値	断面最小値	備考
K 32	( 3.1 )	—	正方形	0.7 × 0.7	0.6 × 0.7	横方向の木目残存。
K 33	( 2.6 )	—	不整形	0.8 × 0.8	0.2 × 0.2	縦方向の木目残存。
K 34	( 4.8 )	—	長方形?	1.0 × 0.8	0.8 × 0.6	横方向の木目残存。
K 35	( 3.5 )	—	長方形	1.0 × 0.5	0.9 × 0.5	

### 3. 垣内3号墳

立地 3号墳は1号墳と同一の南東から北西にのびる尾根の南斜面に位置しており、標高87.0～90.0 mを測る。

墳丘(第47図) 後世の耕作によって削平を受けており、封土のかなりの部分が失われている。古墳の存在確認のため設定したトレンチで南東・北西の墳丘裾の確認を行なった後、石室の南東側にトレンチを拡張し、墳丘の残存部分を検出した。また、奥壁の後方にもトレンチを設定し、墳丘の広がりを確認した。これらの結果より3号墳は径約15mを測る円墳であることを確認した。また、当初設定したトレンチをそのまま踏襲し、奥壁の後方に北西・南東方向に幅1mの墳丘断ち割りトレンチを入れ、墳丘断面を観察し、墳丘築造方法を検討した。墳丘の旧地表は南東と北西で約3mの比高差をもつ。そのため、南東側では主として削り出しによって、北西側では盛土によって、墳丘裾を整えている。南東側は尾根上に幅2.5mの溝を掘削したのち、茶灰色粘土を溝の内側に貼っている。北西側は墳丘裾にあたる部分にまず茶灰色粘土を敷き、その上面に茶灰色粘土混細砂と茶褐色礫混細砂を盛り、小山を作ったのち、墳丘の内側に当たる部分のみ暗灰色粘土を盛って、墳丘裾を構成する細砂を固定する。その後0.5～0.7mの厚さで暗黄灰色粘土混細砂、暗茶色礫混粘土、暗灰色礫混粘土+暗茶色礫混粘土を盛り、

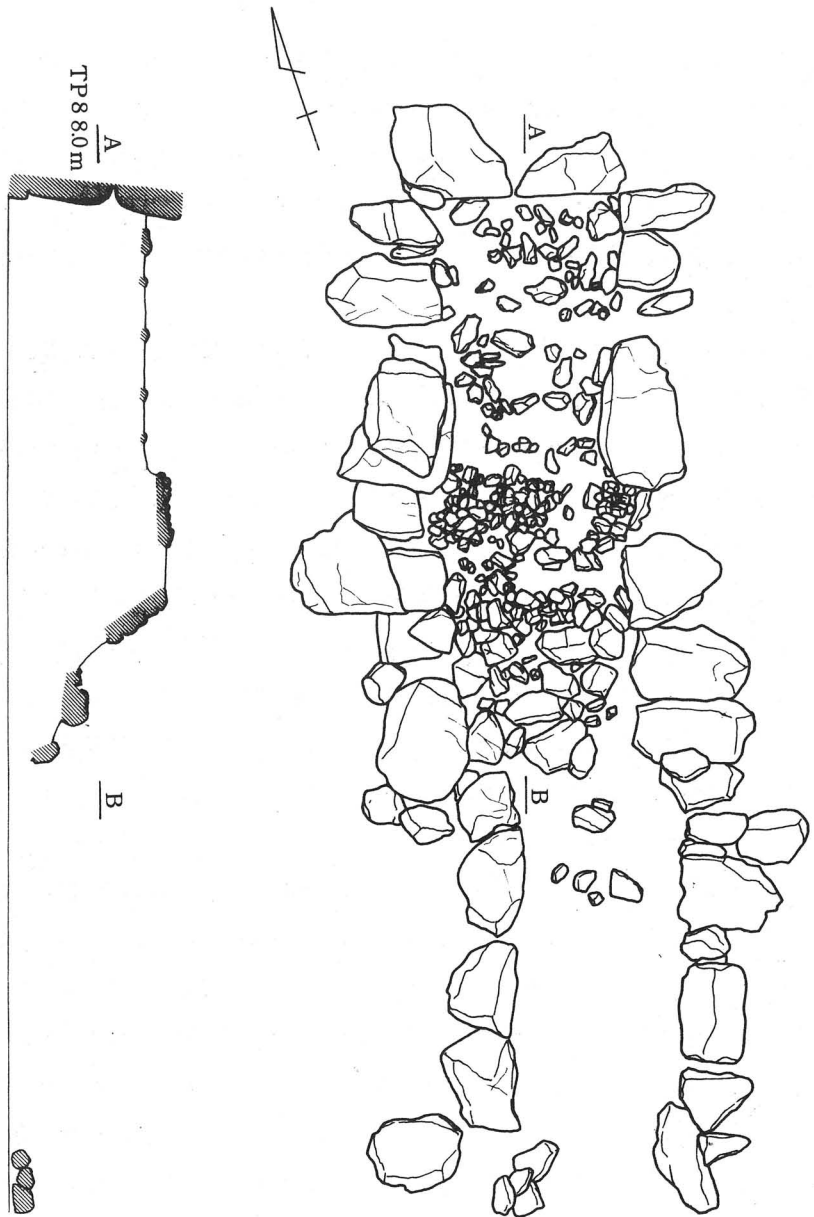


- |   |                           |    |                |
|---|---------------------------|----|----------------|
| 1 | 暗茶褐色砂質土 (耕作土)             | 8  | 暗黄灰色粘土混細砂      |
| 2 | 暗灰茶色細砂混粘土                 | 9  | 暗灰褐色粘土         |
| 3 | 暗灰茶色微砂混粘土                 | 10 | 暗灰褐色礫混細砂       |
| 4 | 黄褐色礫混粘土 (暗茶色粘土がブロック状に混じる) | 11 | 茶褐色粘土混細砂       |
| 5 | 暗灰褐色礫混粘土 + 暗茶色礫混粘土        | 12 | 茶灰色粘土 + 黄褐色細砂  |
| 6 | 暗茶色礫混粘土                   | ア  | 暗灰褐色粘土 + 黄褐色細砂 |
| 7 | 黄灰色粘土                     | イ  | 黄褐色細砂          |

第47図 3号墳墳丘平・断面図 (S = 1/100)

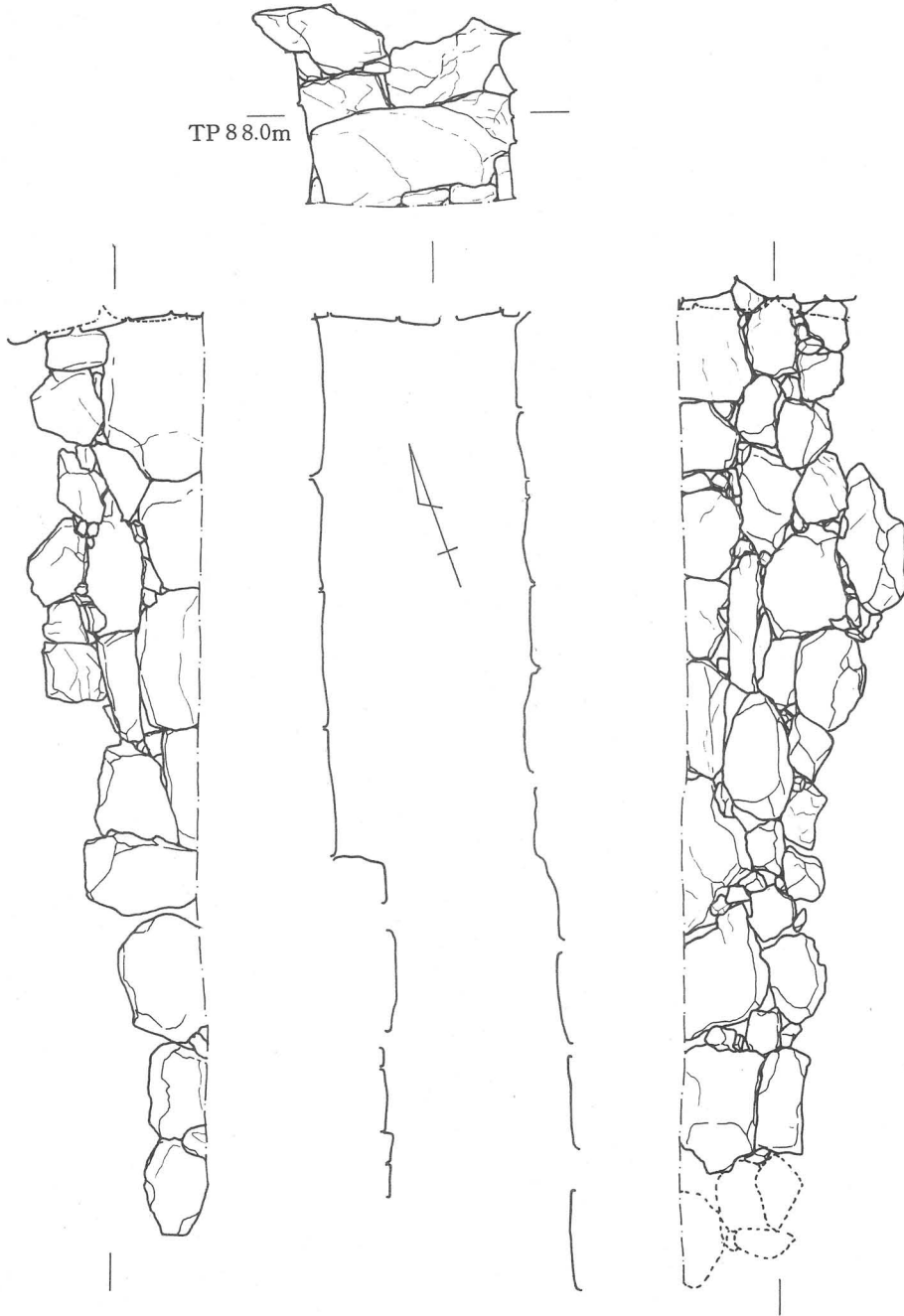
南東部の旧地表とはほぼ同一レベルになるよう整地したのち、石室の掘り方を掘削している。次に石室の基底石を据え付け、黄褐色細砂で基底石の裏込めを行なった後、石室の2段め以降を構築している。南東側では、黄褐色細砂混粘土を盛り、北西側、南東側のいずれにも暗灰色細砂混粘土を盛っている。その後、石室の掘り方に暗灰色粘土と黄褐色細砂を入れ、石室の裏込めをし、暗灰茶色砂質土を墳丘全体に盛土したと考えられる。また、列石などの外表施設は検出されなかった。

石室（第48・49図）石室は割石によって構成された片袖式横穴式石室である。天井石はすべて取り去られており、石室内は土砂が堆積していた。石室内に堆積していた約20cmの土砂を除去すると玄室内に小割石を敷きつめた祭壇状のものが検出された。玄室中央では奥壁付近に比べ約15cm高く小割石を積み上げており、羨道部に向かってスロープ状をなしていた。このスロープ状をなす小割石の間から土師器碗（118）が出土したことから、小石を積み上げた祭壇状のものは平安時代に築造され、祭祀の場として石室を再利用したものと考えられる。石室は南南西の方向に開口しており、玄室の主軸はN-19°-Wを指す。羨道部前端を構成する西側の基底石は原位置を保っておらず、東側の基底石は原位置を保ったまま内傾している。石室の全長は奥壁から東側側壁前端までが6.5m、玄室長3.6m、玄室幅は奥壁部で1.35m、羨道長2.9m、羨道幅は玄門部で1.0mを測る。石室の構築にあたっては、まず、盛土によって周囲を同レベルに整地したのち、墓坑を掘ったものと考えられる。墓坑の幅は約3.0mを測る。奥壁は幅1.4m、高さ0.7～0.8m石を置き、東側の隙間に細長い小型の割石を3個、西側に1個詰めて、奥壁の基底石を安定させている。東側壁は基本的には基底に幅50～100cmの横長の石を置き、基底石よりやや小型の割石を構に2～3段積み上げることによって構成されている。石材と石材の隙間には小型の割石を詰め、安定させている。奥壁から数えて第7石めの基底石は幅100mを測るが、壁面として利用した面が歪んでおり、入口側に隣接する基底石もその歪みを踏襲して面を合わせている。そのため、羨道部は玄室よりも約15cm外側に開いている。また、羨道部の基底石は玄室よりも縦長で、そのため2段め以上の積み方は玄室と羨道部では異なっている。西側壁は東側壁に比べ大型の石を基底石として用いており、4石で玄室が構成されている。旧地形では西側壁がかなり低くなっていることより、安定のため西側壁に大型の石を使用したものと思われる。奥壁に隣接する基底石は西側壁を構成する石材の中では最も大型であるが、これは、奥壁の安定を計るためであろう。2段め以上は東、西側壁ともほぼ同じ大きさの石材を使用しており、大型の割石の間に小型の割石を詰めて壁面を構成する技法は共通している。また、石室床面は地山上に黄灰色細砂が敷かれており、敷石や排水溝などの施設はみられなかった。



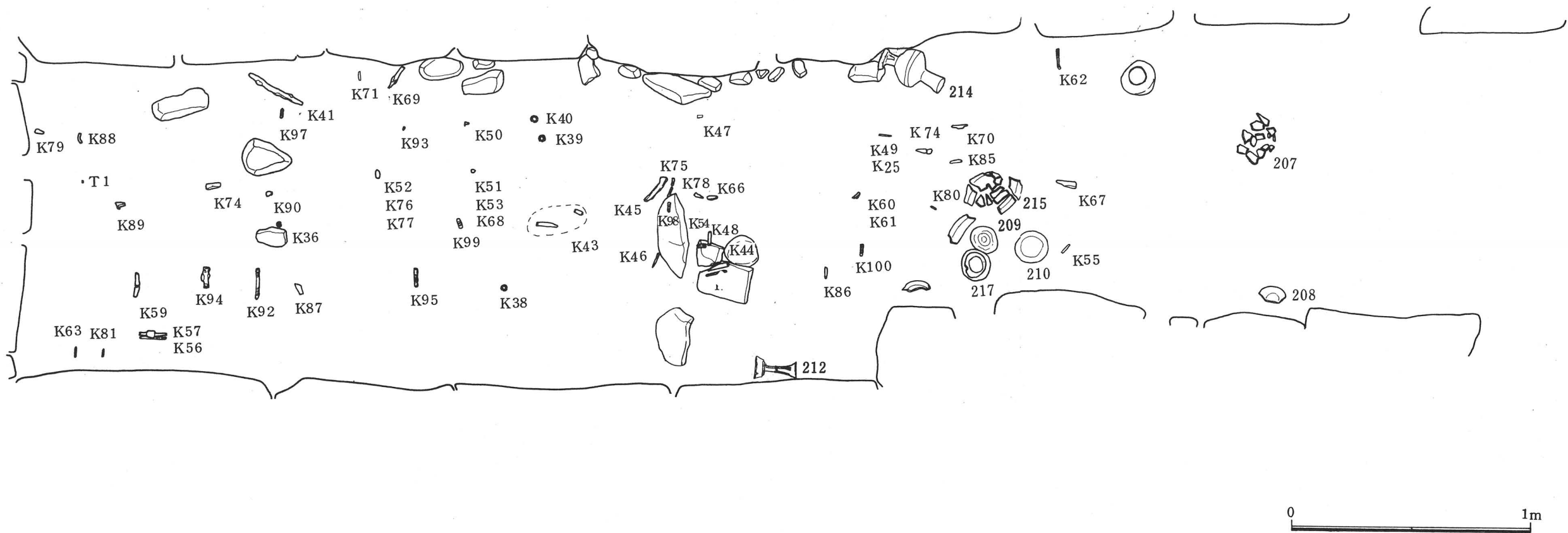
0 1m

第 48 图 3 号墳石室検出状況 (S = 1/50)



第49图 3号墳石室 (S=1/50)

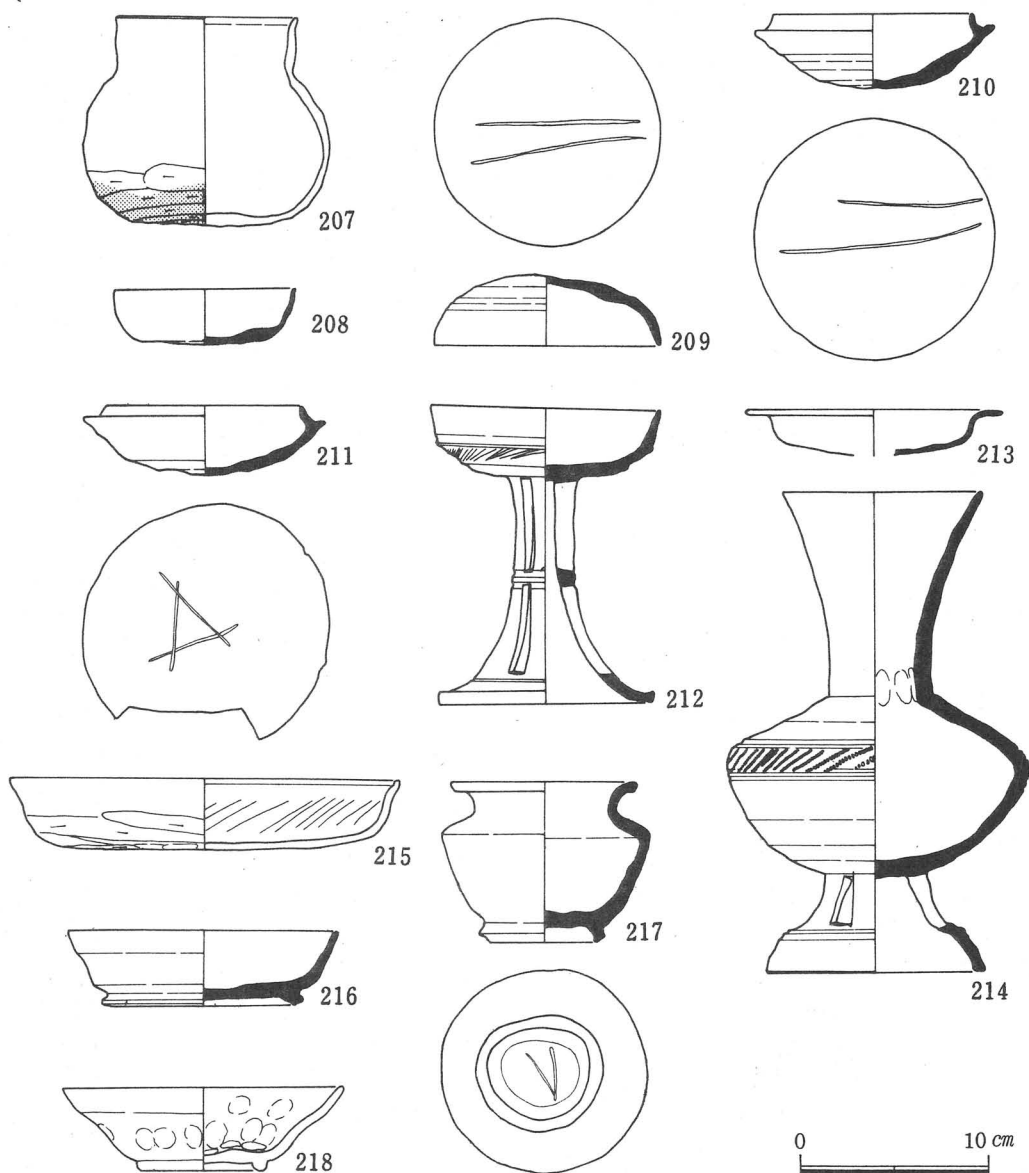
遺物出土状況(第50図) 玄室袖部付近の床面から古墳時代の土器が出土し、羨道部床面から古墳時代の土器と奈良時代の土器が出土した。袖部付近では須恵器高坏(212)が口縁部を奥壁側に向け、倒れた状態で出土した。羨道部玄門付近で古墳時代の須恵器蓋坏(209・210・213)・台付長頸壺(214)、奈良時代の土師器皿(215)・須恵器壺(217)が出土した。209・210はいずれも口縁部を下に向けた状態で約10cm離れて出土したが、同様のヘラ記号をもつことからセットであると思われる。213は破片であり、口縁部を斜上方に向けた状態で出土した。214は口縁部を羨道部左側前端に向け、倒れた状態で出土した。羨道部中央付近では古墳時代の土師器壺(207)、須恵器蓋坏(208)、奈良時代の壺が出土した。207は破碎された状態で出土した。208は破片であり、口縁部を斜下方に向けて出土した。奈良時代の壺は207の北側で出土したが、発掘調査中不明となり、図化し得なかった。また、羨道部先端から古墳時代の須恵器蓋坏(211)、奈良時代の蓋坏(216)が出土した。これらの石室内出土土器は副葬品として棺の埋葬に伴って置かれたものであろうが、後世の再利用などのため原位置を保っている土器はほとんどみられず、土器の整然とした配列はみられない。また、玄室から玄門付近の床面から鉄釘・鏝などの金具が多数出土した。完形品はほとんどなく、破損したものがほとんどであることより、これらのうちの大部分は原位置を動いていると思われる。玄室北部で出土したK94・K92・K95は鏝であり、鏝を結ぶ直線は石室の主軸と平行である。鏝は2枚の板を1枚の板として結合するために使用されたと考えられるので、K94・K92・K95を中心とする木棺の底板の存在が推定される。したがって、周囲で出土した鉄釘(K63・K81・K56・K57・K52・K76・K77・K90・K74・K89)は前述の木棺に使用されたものと推定され、鉄釘を結ぶ直線が木棺の外郭を示すものと思われる。また、K89の20cm北東で管玉(T1)が出土し、K92の東20cmで金環(K36)、東70cmに直刀(K41)が出土した。K36は前述の木棺内に位置しており、突合せ部を南に向けて出土した。明らかにこの木棺の埋葬に伴う遺物であると考えられる。玄室南半部から玄門付近にかけ28点の鉄釘、2点の鏝が出土し、玄室中央付近の床面から3点の金環(K38・K39・K40)が出土した。K39・K40はいずれも突合せ部を北西に向けて出土した。K39とK40は同形態を示し、対になるものと考えられる。近接して出土したことよりK39・K40を装着した被葬者の棺をこのあたりに推定できる。また、K39、K40の西70cmでK38が出土した。このあたりにもう1体の棺の存在が推定される。したがって、玄室南半部から玄門付近で出土した釘・鏝はこの2体の木棺に使用されていたものと考えられよう。K98・K54・K64・K44は割石の上から出土しており、この石は棺台として使用されたものであると考えられよう。また、平安時代の土師器椀(218)・直刀(K42)は石室を再利用した祭壇状の小石中から出土した。



第 50 图 3 号墳遺物出土状況 (S = 1/20)

出土遺物 古墳時代の土師器1点、須恵器7点、奈良時代の土師器1点、須恵器2点、平安時代の土師器1点、玉類4点、金環5点、直刀2点、刀子1点、金具57点が石室内より出土した。

〔土器〕(第51図) 古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器が石室床面で出土し、平安時代の土師器碗が石室を再利用した祭壇状の小石中から出土した。古墳時代の須恵器無蓋高坏(212)は玄室袖部付近の床面で、古墳時代の土師器壺(207)、須恵器蓋坏(208・209・210・211)・台付長頸壺(214)、奈良時代の土師器皿(215)、須恵器蓋坏(216)・壺(217)が羨道部の床面で出土した。209・210は同様のヘラ記号をもつ



第51図 3号墳出土土器 (S=1/4)



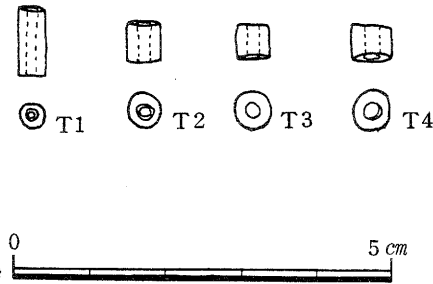
ことよりセットをなすものと考えられる。211は210と同様の形態・法量をもつことより、210と211は同時期のものであろう。208はかえりの消失した蓋坏(身)で、底部はヘラ切り未調整である。210・211と比べ口径が小さいことより、210・211より新しい様相をもつものと思われる。また、215～217はいずれも同時期のもので、奈良時代に行われた追葬に伴う遺物であると思われる。石室の再利用と思われる祭壇上の小石の中からは平安時代の土師器碗(218)が出土した。

第10表 出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
207	土師器 壺	推定口径 9.6 (1/4) 器高 11.8	外面 口縁部はヨコナデ。胴部 はナデののち、胴部下半 ～底部はヘラケズリ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部 ～底部はナデ。	橙。白色砂粒、雲母(小) を微量含む。	焼成良好。胴 部下半外面に 赤彩。
208	須恵器 蓋坏 (身)	口径 9.6 (3/4) 器高 3.0	外面 口縁部～体部は回転ナデ。 底部は回転ヘラ切り未調 整(左回り)。 内面 回転ナデののち、底部は 不定方向のナデ。	緑灰。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。
209	須恵器 蓋坏 (蓋)	口径 12.0(完存) 器高 3.8	外面 回転ナデののち、器高の 1/2は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデののち、天井部 は不定方向のナデ。	青灰。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。 天井部にヘラ 記号。
210	須恵器 蓋坏 (身)	口径 10.6 器高 4.0 たちあがり高 0.8	外面 回転ナデののち、体底部 2/5は回転ヘラケズリ(右 回り)。 内面 回転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。体 底部外面の一 部に自然釉が 付着。底部に ヘラ記号。
211	須恵器 蓋坏 (身)	口径 10.2 (3/4) 器高 3.6 たちあがり高 0.8	外面 回転ナデののち、体底部 の1/3は回転ヘラケズリ (左回り)。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。内 面、体底部外 面の一部、受 部外面に自然 釉が付着。底 部にヘラ記号。
212	須恵器 高坏	口径 12.2 (2/3) 坏部高 3.8 器高 15.6～16.0	外面 口縁部～体部は回転ナデ ののち、体部に襷描文。 底部は回転ヘラケズリ(左 回り)。脚部は回転ナデ ののち方形スカシ(2段 ・3組) 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。 口縁部内面の 一部～底体部 内面、脚部外 面に灰をかぶ る。

遺物番号	器種	法量(現存率) 単位 cm	成形・調整	色調・胎土	焼成・備考
213	須恵器 蓋坏 (身)	推定口径 13.8 (1/4)	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を 少量含む。	焼成良好。
214	須恵器 台付長 頸壺	口径 10.6 (1/2) 器高 25.4 脚底径 11.6 脚部高 5.0	外面 口頸部は回転ナデ。胴部 は回転ヘラケズリ(左回 り)ののち、胴部中位に 櫛描列点文を施す。脚部 は方形スカシ(3組)。 内面 頸部下端に指押さえの のち、回転ナデ。脚部は回 転ナデ。	灰白。白色砂粒(小・中) を少量含む。	焼成良好。
215	土師器 皿	口径 20.6 (2/3) 器高 3.8	外面 口縁部はヨコナデ。体部 下半～底部はヘラケズリ ののち、指押さえ。 内面 ヨコナデののち、体部に 暗文を施す。	淡赤橙。精良。白色砂粒(小 ・中)を微量含む。	焼成良好。
216	須恵器 蓋坏 (身)	口径 14.2 (完存) 器高 4.0 高台径 10.8 高台高 0.8	外面 口縁部～高台は回転ナデ。 底部は回転ヘラケズリ(左 回り)。 内面 回転ナデ。底部は不定方 向のナデ。	灰。白色砂粒(小・中・大) を少量含む。	焼成良好。
217	須恵器 壺	口径 9.8 (完存) 器高 8.5 高台径 6.6 高台高 0.8	外面 回転ナデ。 内面 回転ナデ。	灰。白色砂粒(小・中)を やや多量に含む。	焼成良好。口 縁部～肩部外 面、口縁部内 面、底部内面 に自然釉が付 着。底部外面 にヘラ記号。
218	土師器 碗	口径 14.6 (3/4) 器高 4.6 高台径 6.8 高台高 0.6	外面 高台は貼り付け。口縁部は ヨコナデ。胴部は指押さ え、ナデ。高台部はヨコ ナデ。 内面 指押さえ、ナデ。	明褐～淡黄。白色砂粒(小 ・中)、雲母(小・中)、 角閃石(小)を微量含む。	焼成良好。

〔玉類〕(第52図) 4点の玉類が石室及び石室埋土から出土した。T1を石室床面で検出したのち、石室埋土をふるいにかけて、T2～T4を検出した。T1は管玉で、石室床面奥壁付近で出土した。T2～T4は小玉である。

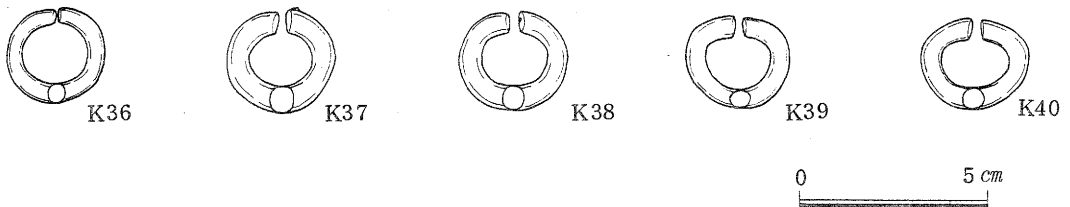


第11表 3号墳出土玉類計測表

番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	石材
T 1	4	9	1	グリーンタフ
T 2	4	6	1.5	滑石
T 3	4	6	2	滑石
T 4	6	6	2	滑石

第52図 3号墳出土玉類(S=1/1)

〔金環〕(第53図) 5個の金環(K36～K40)が石室内で出土した。K36・K38～K40は石室床面、K37は石室埋土廃土中より出土した。K36は表面の一部が破損しており、突合せ部は接している。出土状況・形態のいずれからみても対になる金環は見当たらない。K37は表面の一部が破損しており、突合せ部は2mm離れている。K38は表面の一部が破損しており、突合せ部は2mm離れている。K37と同形態であることより、K37とK38は対になるものと考えられる。K39は表面の残り具合が極めて良好である。突合せ部は3mm離れている。K40も突合せ部は3mm離れており、K39とほぼ同形態である。K36～K40はいずれも突合せ部は金張を絞った様子がよく観察でき、破損面から銅芯が露出していることから、銅芯金張製であろう。

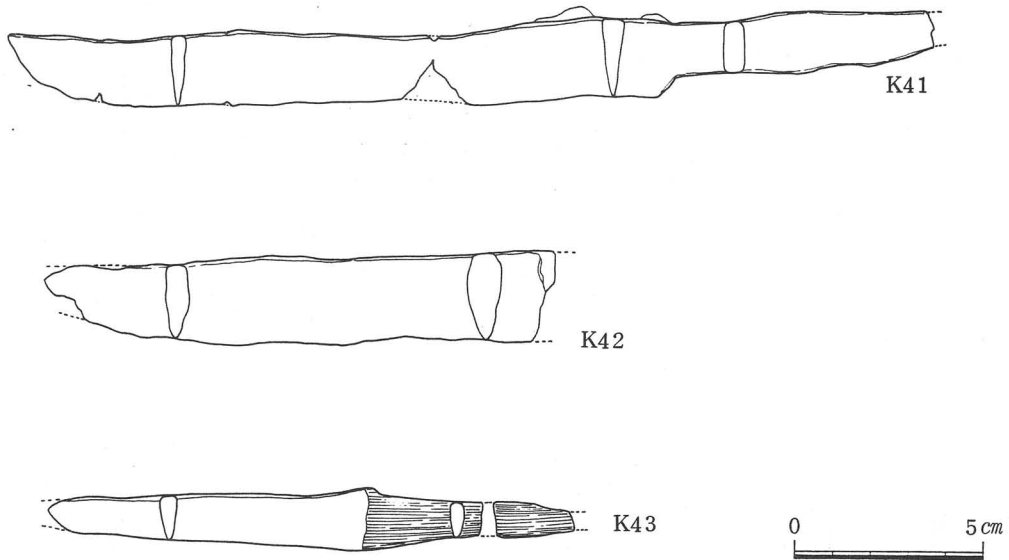


第53図 3号墳出土金環 (S=1/2)

第12表 3号墳出土金環計測表

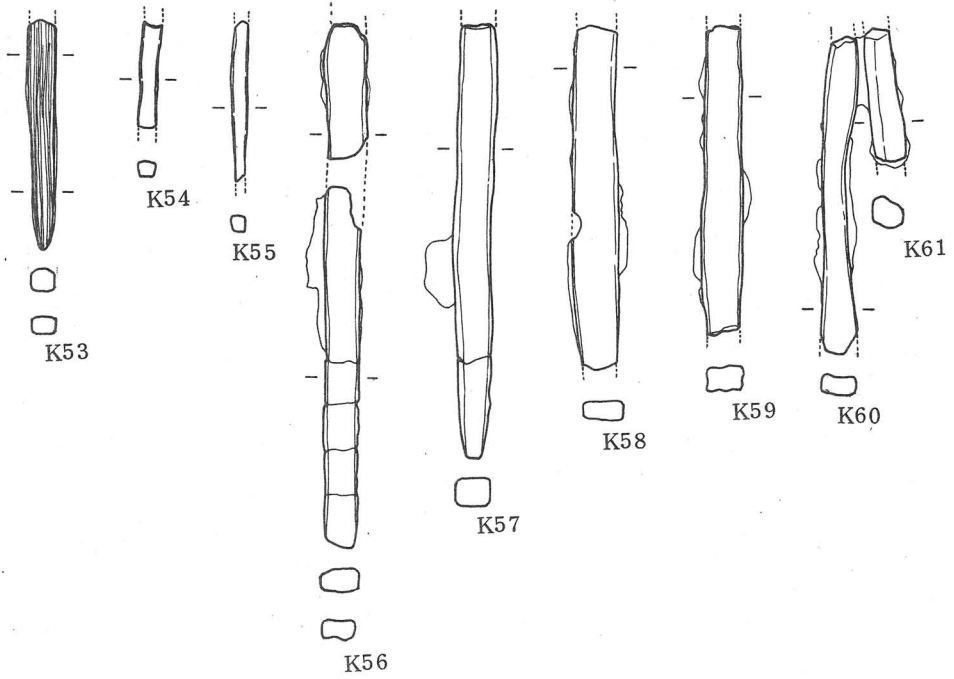
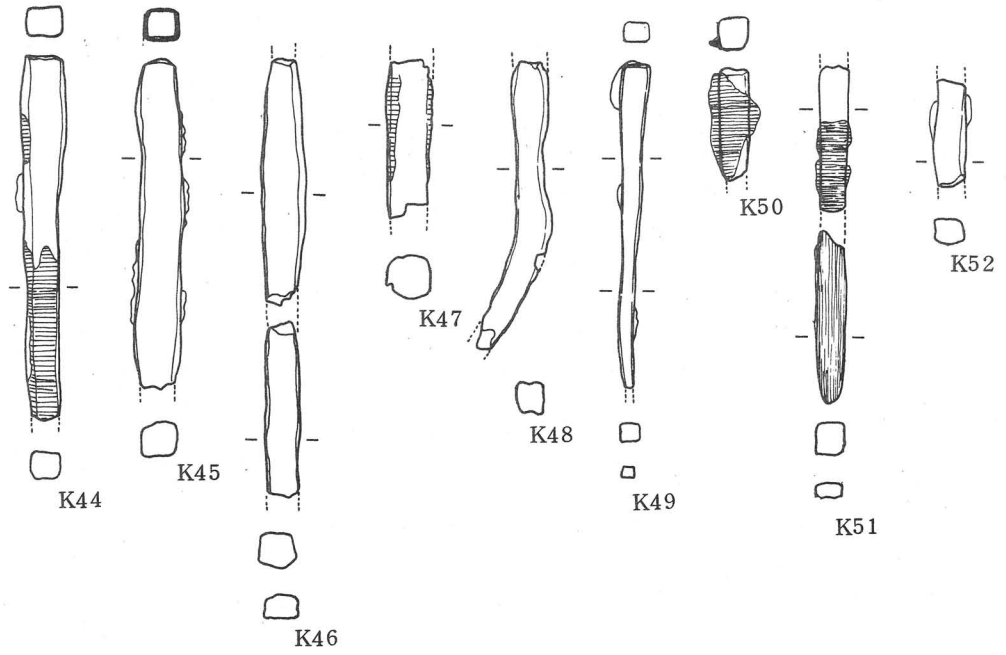
番号	外法径(cm) A × B	断面径(cm)	質量(g)	備考
K 36	2.6 × 2.5	0.5	11	銅芯金張。
K 37	2.9 × 2.7	0.7	17	銅芯金張。
K 38	2.9 × 2.7	0.7	18	銅芯金張。
K 39	2.8 × 2.5	0.5	15	銅芯金張。
K 40	2.9 × 2.5	0.5	15	銅芯金張。

〔武器〕(第54図) 直刀(K41・K42)・刀子(K43)が石室内で出土した。K41・K43は石室床面で、K42は石室を再利用した祭壇状の小石中より出土した。K41は残存長23.9cm、茎幅0.5cm、刃幅2.0cm、背幅0.4~0.5cmを測る。刃部の一部であるが、残存長13.5cm、刃幅2.3cm、背幅0.6cmを測る。K43は残存長13.9cm、茎幅1.2cm、刃幅1.2cm、背部0.5cmを測る。基部には木質が残存している。

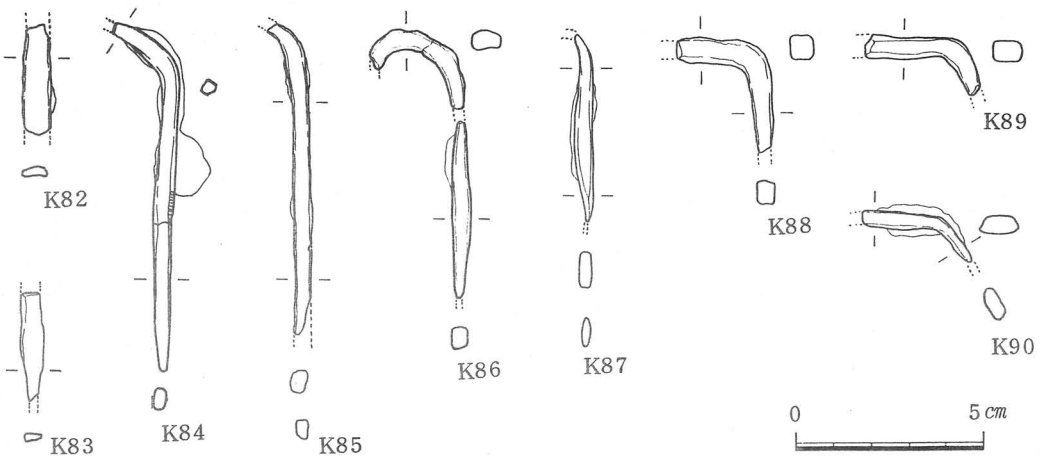
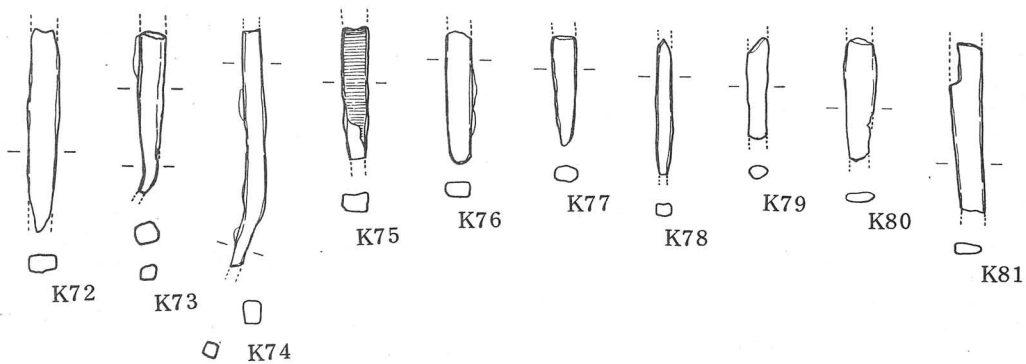
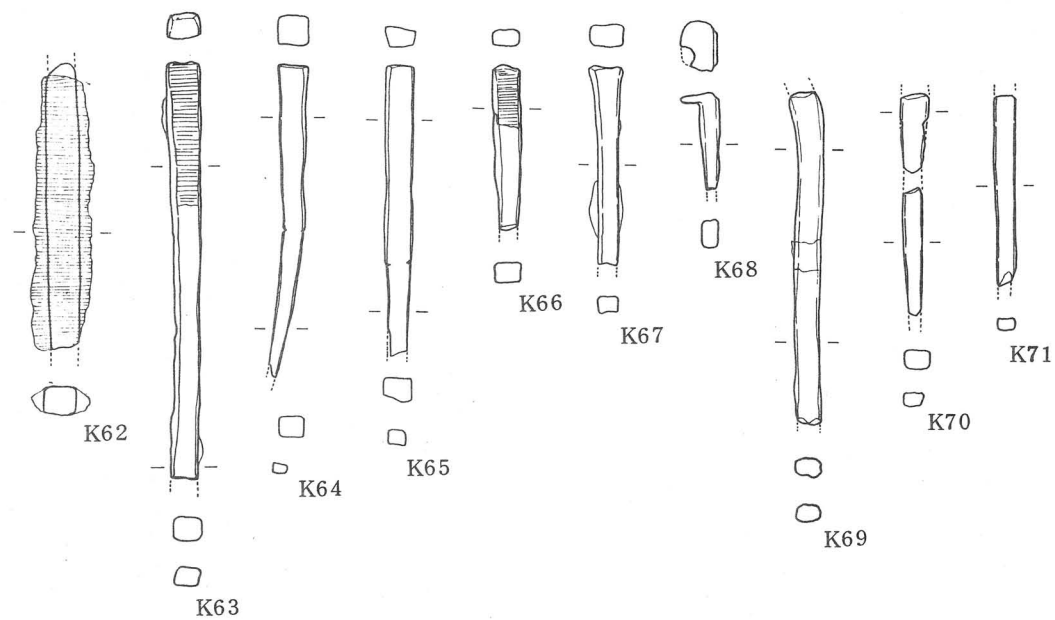


第54図 3号墳出土武器 (S = 1/2)

〔金具〕(第55・56・57図) 47本の鉄釘、9本の鏃、1本の不明金具が玄室から玄門付近にかけて出土した。K44~K90は鉄釘で、K92~K100は鏃である。K91は扁平な金具であるが、用途不明である。完形品はK94のみで、他はすべて破損しており、全体は不明である。鉄釘の頭部形態は無頭のもの(K44・K45・K49・K50・K63・K64・K65・K66・K67)と折頭のもの(K68)の2タイプがみられる。K50の木目付着状況より無頭の鉄釘は頭部をすべて棺材に打ち込んで使用したものと思われる。断面形態は正方形のもの(K44~K55)、長方形のもの(K56~K90)の2タイプがみられる。断面最大値は正方形のもので1.2×1.2cm~0.4×0.4cm、長方形のもので1.2×0.7~0.5×0.2cmを測る。鉄釘は頭部から先端へと徐々に細くなっていくのがふつうである。したがって、頭部の残存するものについては釘釘の断面値のある程度の傾向を知ることができると思われる。断面正方形タイプのものではK49・K50の最大断面値は明らかにK44・K45より小さく、少なくともK44・K45・K46・K47・K48などの比較的断面値大のグループ、K49・K50の比較的断面値小のグループの少なくとも2グループの存在が指摘できる。断面長方形タイプのもも同様で、K56・K57・K58・K59・K60・K61・K62などの比較的断面値大のグループ、K63・K64・K65・K66・K67・K68などの比較的小的グループの少なくとも2

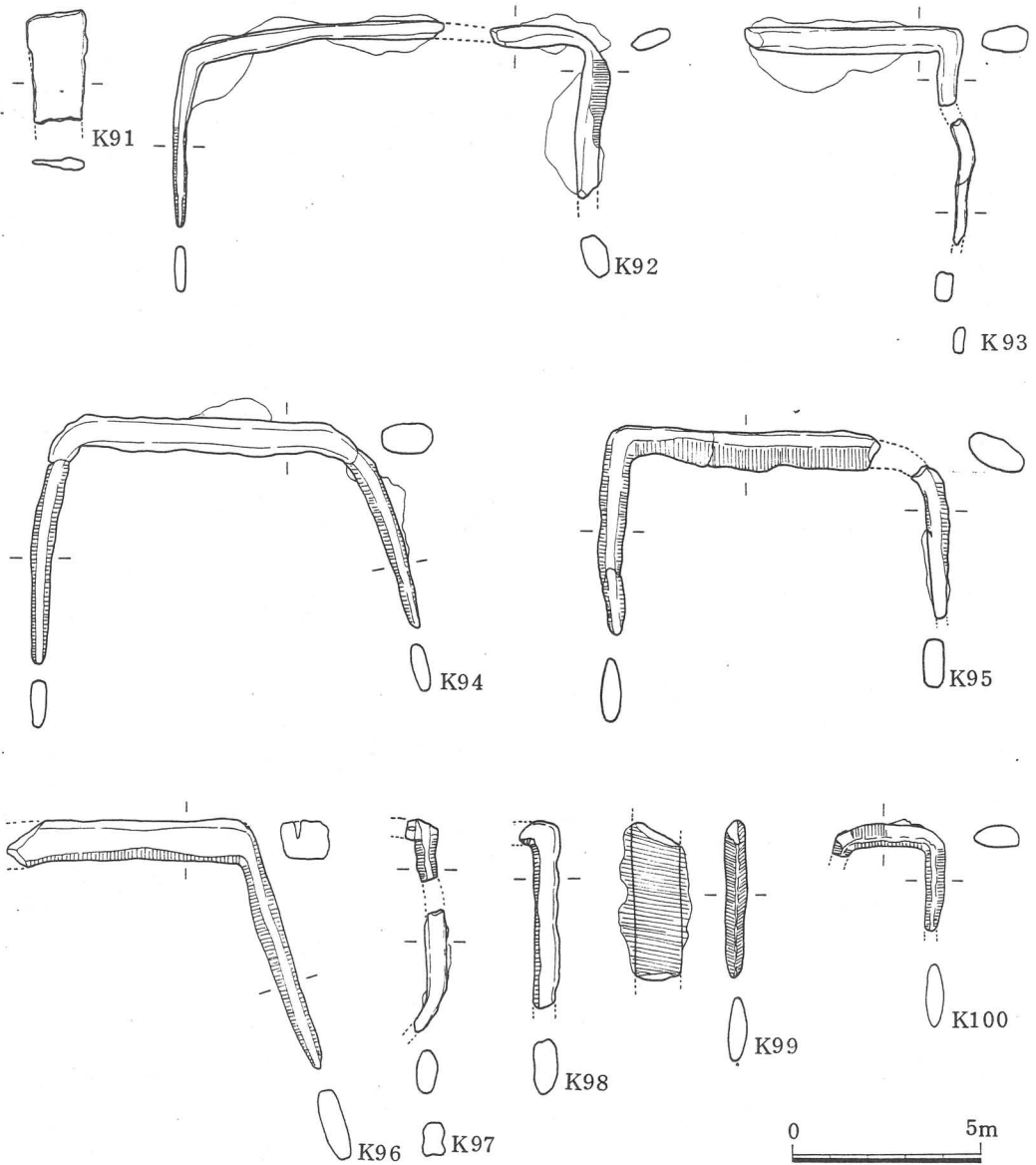


第 55 图 3 号墳出土金具〔1〕 (S = 1/2)



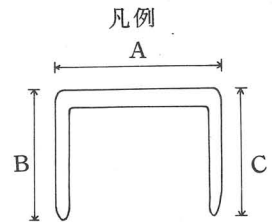
0 5 cm

第56图 3号坑出土金具〔2〕 (S=1/2)



第57図 3号墳出土金具〔3〕(S=1/2)

グループの存在が指摘できる。このような鉄釘の断面値の差は鉄釘の使用目的の差、あるいは棺材の厚さの差とも考えられるが、原位置を動いたものが多く、その差異は不明である。鏝(K92~K100)はいずれも胴部断面は丸みを帯びた長方形であるが、脚部断面は胴部に比べ扁平である。これは鏝の脚部製作の際、脚部を叩き出して折り曲げたためと思われる。K91は扁平な金具であるが、用途不明である。また、底部の厚さは木目の付着状況より8cm以上を測ると思われる。



第13表 3号墳出土金具計測表〔1〕

単位：cm

番号	全長（現存長）	頭部形態	断面形態	断面最大値	断面最小値	備 考
K 44	( 9.7 )	無 頭	正 方 形	1.1 × 1.1	0.8 × 0.8	横方向の木目残存。
K 45	( 8.9 )	無 頭	正 方 形	1.1 × 1.1	0.9 × 0.9	
K 46	( 6.6 + 4.7 )	—	正 方 形	1.0 × 1.0	0.9 × 0.7	
K 47	( 4.3 )	—	正 方 形	1.2 × 1.2	1.1 × 1.1	
K 48	( 8.1 )	—	正 方 形	1.0 × 1.0	0.7 × 0.7	
K 49	( 8.7 )	無 頭	正 方 形	0.7 × 0.7	0.3 × 0.3	
K 50	( 3.0 )	無 頭	正 方 形	0.8 × 0.9	0.7 × 0.7	横方向の木目残存。
K 51	( 3.9 + 4.6 )	—	正 方 形	0.8 × 0.8	0.4 × 0.2	横方向の木目。 縦方向の木目残存。
K 52	( 2.9 )	—	正 方 形	0.8 × 0.7	0.7 × 0.7	
K 53	( 6.1 )	—	正 方 形	0.7 × 0.7	0.2 × 0.2	縦方向の木目残存。
K 54	( 2.8 )	—	正 方 形	0.6 × 0.6	0.5 × 0.5	
K 55	( 4.3 )	—	正 方 形	0.4 × 0.4	0.3 × 0.3	
K 56	( 3.6 + 9.1 )	—	長 方 形	1.2 × 0.7	0.9 × 0.5	
K 57	( 11.6 )	—	長 方 形	1.0 × 0.8	0.4 × 0.2	
K 58	( 9.2 )	—	長 方 形	1.3 × 0.5	0.9 × 0.4	
K 59	( 8.3 )	—	長 方 形	1.0 × 0.7	0.9 × 0.6	
K 60	( 8.5 )	—	長 方 形	0.9 × 0.5	0.7 × 0.4	
K 61	( 3.7 )	—	不 整 形	0.9 × 0.7	0.7 × 0.6	
K 62	( 7.8 )	—	長 方 形	0.9 × 0.8	0.8 × 0.7	横方向の木目残存。
K 63	( 11.1 )	無 頭	長 方 形	0.8 × 0.6	0.7 × 0.6	横方向の木目残存。
K 64	( 8.4 )	無 頭	長 方 形	0.9 × 0.8	0.3 × 0.2	
K 65	( 7.7 )	無 頭	長 方 形	0.8 × 0.6	0.5 × 0.4	
K 66	( 4.5 )	無 頭	長 方 形	0.8 × 0.5	0.5 × 0.4	横方向の木目残存。
K 67	( 5.4 )	無 頭	長 方 形	0.9 × 0.5	0.6 × 0.5	
K 68	( 2.6 )	折 頭	長 方 形	0.5 × 0.7	0.3 × 0.7	



単位：cm

番号	全長（現存長）	頭部形態	断面形態	断面最大値	断面最小値	備 考
K 69	（ 8.9 ）	—	長方形	0.8 × 0.5	0.7 × 0.5	
K 70	（ 2.1 + 3.4 ）	—	長方形	0.7 × 0.5	0.4 × 0.3	
K 71	（ 5.1 ）	—	長方形	0.6 × 0.3	0.4 × 0.3	
K 72	（ 5.4 ）	—	長方形	0.8 × 0.5	0.7 × 0.4	
K 73	（ 4.3 ）	—	長方形	0.7 × 0.5	0.2 × 0.1	
K 74	（ 7.5 ）	—	長方形	0.5 × 0.6	0.3 × 0.4	
K 75	（ 3.6 ）	—	長方形	0.7 × 0.5	0.4 × 0.2	横方向の木目残存。
K 76	（ 3.6 ）	—	長方形	0.7 × 0.5	0.5 × 0.2	
K 77	（ 3.0 ）	—	長方形	0.7 × 0.5	0.2 × 0.1	
K 78	（ 3.1 ）	—	長方形	0.4 × 0.3	0.2 × 0.1	
K 79	（ 2.8 ）	—	長方形	0.6 × 0.4	0.5 × 0.4	
K 80	（ 3.3 ）	—	長方形	0.9 × 0.3	0.6 × 0.2	
K 81	（ 4.5 ）	—	長方形	0.9 × 0.3	0.7 × 0.2	
K 82	（ 3.0 ）	—	長方形	0.8 × 0.2	0.7 × 0.2	
K 83	（ 2.9 ）	—	長方形	0.5 × 0.2	0.3 × 0.1	
K 84	（ 9.9 ）	—	長方形	0.5 × 0.4	0.2 × 0.4	
K 85	（ 8.5 ）	—	長方形	0.5 × 0.6	0.4 × 0.5	
K 86	（ 4.5 + 4.8 ）	—	長方形	0.4 × 0.8	0.3 × 0.4	
K 87	（ 5.0 ）	—	長方形	1.0 × 0.4	0.8 × 0.2	
K 88	（ 5.5 ）	—	長方形	0.7 × 0.6	0.3 × 0.5	
K 89	（ 4.2 ）	—	長方形	0.6 × 0.8	0.4 × 0.6	
K 90	（ 3.8 ）	—	長方形	0.5 × 1.0	0.3 × 0.9	
K 91	（ 3.0 ）	—	長方形	1.6 × 0.3	1.3 × 0.2	

第14表 3号墳出土金具計測表〔2〕

単位:cm

番号	A	B	C	A断面	B断面	C断面	備考
K 92	(6.8+3.1)	4.7	(4.5)	1.1×0.4	0.3×1.2~ 0.2×0.9	0.7×1.2	Cに横方向の木目残存。Cが歪む。
K 93	(5.7)	—	(2.1+3.4)	0.7×1.2	—	0.4×1.0~ 0.3×0.8	Cに横方向の木目残存。
K 94	8.6	6.7	5.7	1.0×1.3	0.4×1.5~ 0.3×1.0	0.5×1.2~ 0.2×0.8	B・Cに横方向の木目残存。
K 95	(7.2)	5.6	(4.2)	1.5×0.7	0.5×1.4~ 0.4×1.0	0.4×1.3~ 0.3×0.9	A・B・Cに横方向の木目残存。
K 96	(6.6)	—	(7.0)	1.3×1.0	—	0.6×1.3~ 0.3×1.0	A・Cに横方向の木目残存。
K 97	—	—	(1.6+3.3)	—	—	0.6×1.4~ 0.2×0.2	横方向の木目残存。
K 98	—	—	(5.0)	—	—	0.6×1.4	横方向の木目残存。
K 99	—	—	(5.2)	—	—	0.5×1.7	横方向の木目残存。
K100	3.0	—	(3.3)	—	1.3×0.5	0.5×1.8	A・B・Cに横方向の木目残存。

## 4. まとめ

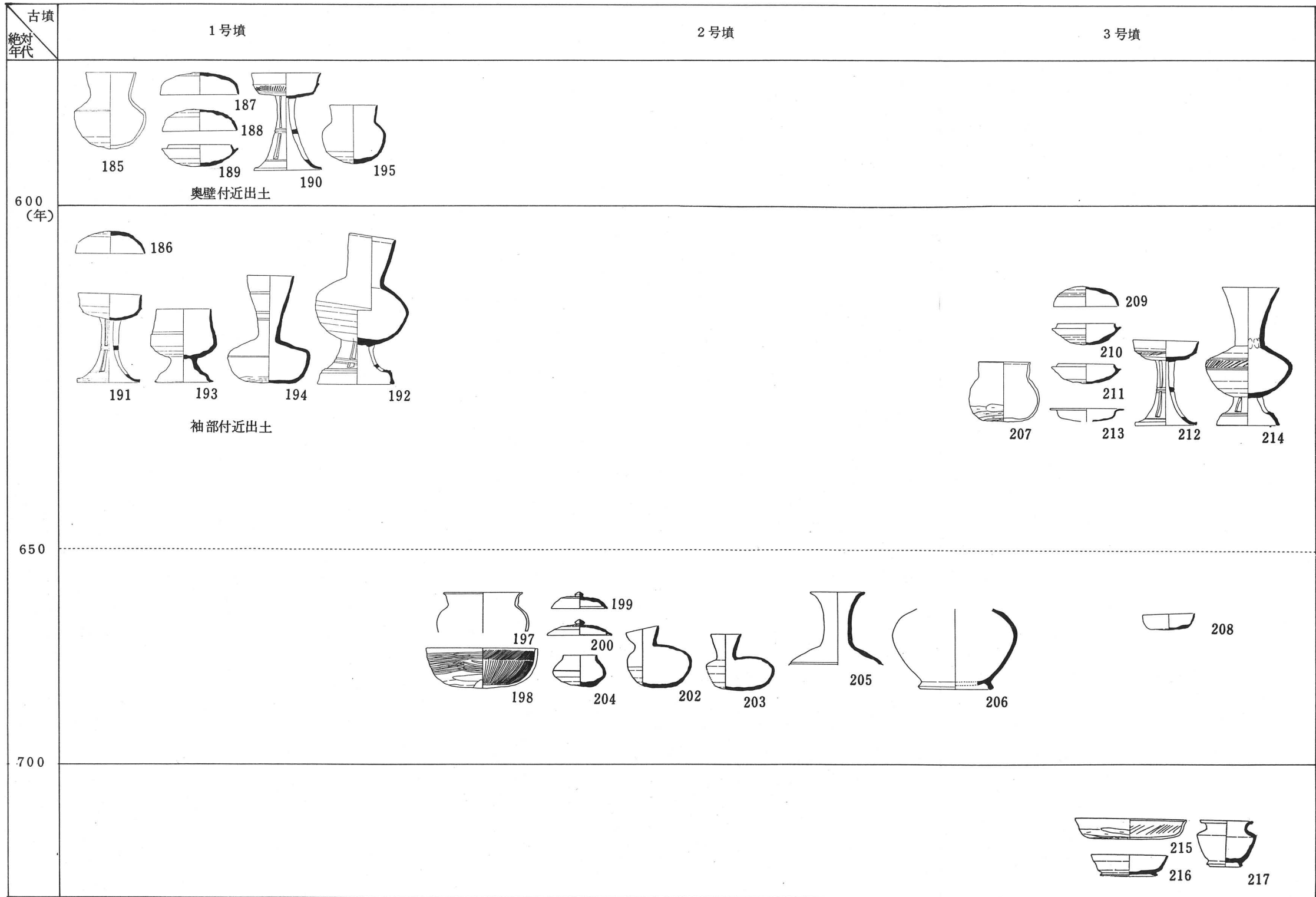
今回の調査では南東から北西にのびる尾根上に3基の古墳の存在を確認することができた。以下、各項目別に若干のまとめをしたい。

支群の群構成 同一尾根の上には昭和41年度に大阪府教育委員会によって石室の実測調査が行なわれた181・182号墳<sup>5)</sup>の他に梅岩寺境内に5基の古墳があり、7基の古墳が存在している。今回の調査で検出された3基の古墳を合わせると同一尾根に10基の古墳が築造され一支群を形成していることがわかる。この支群中、梅岩寺境内の東側に位置する古墳は垣内2号墳と同様、無袖式の横穴式石室を内部主体とし、明らかに7世紀代に築造された古墳であることがわかる。また、調査区に隣接する181・182号墳は両袖式横穴式石室を内部主体とし、いずれも石室の方位はN-20°-W前後を指し、垣内1・3号墳の石室とはほぼ方位を同じくする。したがって、この支群は7世紀代の無袖式の横穴式石室と、南東方向に開口する片袖式の横穴式石室を内部主体とする古墳によって構成されていることがわかる。

墳丘の築造方法について 垣内1・3号墳の墳丘土層断面観察の結果、ここでは特に垣内1・3号墳の墳丘の築造方法について述べる。垣内1・3号墳はいずれも石室の奥壁を尾根筋に設定し、尾根筋に直交して石室を構築されており、明確な墳丘をもった古墳である。垣内1号墳では尾根筋に直交して大きく斜面をカットして平坦面を削り出したのち、石室を構築しており、高所を削り、低所に盛土を行なって墳形を整えている。同様に大きく斜面をカットしたのち、石室を構築している古墳に羽曳野市切戸1・2号墳<sup>6)</sup>がある。切戸1・2号墳は尾根筋に平行に石

室を構築している。地形に対する石室の方向に差異はみられるが、垣内1号墳と切戸1・2号墳はいずれも石室構築面をいったん平担に削り出したのち、盛土をしており、墳丘の築造の方法は共通する。垣内3号墳は垣内1号墳と同一尾根の下方に石室を平行にして築造された古墳であるが、垣内1号墳とは別の方法によって墳丘が築造されている。垣内3号墳は石室構築場所を決定したのち、斜面の低所に盛土することによって石室構築面をいったん平担にしたのち、墓坑を掘削しており、墳丘は斜面の高所に溝を掘削し、斜面の低所に盛土することによって整形されている。垣内3号墳は垣内1号墳と墳丘の築造方法は異なるが、いずれも斜面に築造された古墳であり、石室平坦面をいったん平担にしたのち、石室の構築を行なうことに関しては共通している。したがって、斜面に横穴式石室を内部主体とした古墳を築造する場合、石室構築面を平担にするために高所を削り出すか、低所に盛土するかのいずれかの方法で整地したのち、墓坑を掘削し、横穴式石室の構築を行なったことがわかる。以上のことから、墳丘の築造方法は石室の占地と密接に係わり、地形に従って臨機応変に行なわれたと考えられよう。

石室内出土土器よりみた各古墳の築造・埋葬年代(第58図) 垣内1～3号墳石室内出土土器は前述したように埋葬回数を考慮して出土位置によって群に分けることができる。群に分けた土器を型式学的方法によってこれまでの土器編年に照らし合わせ、垣内1～2号墳の築造時期、埋葬時期を検討したい。垣内1号墳は出土位置から奥壁付近の土器群、袖部付近の土器群に分けることができ、両群を比較すると蓋坏の器径の減少などの新しい要素を袖部付近の土器群に読みとることができる。したがって、奥壁付近出土土器群は石棺に伴なう副葬品で、袖部付近の土器群は石棺のあとに埋葬された木棺に伴なう副葬品であると考えられる。垣内2号墳は主体部が無袖の横穴式石室で、石室の規模から石棺だけの単独埋葬であると考えられ、石室床面出土土器は同一時期に副葬されたものととらえられる。垣内3号墳は支室が再利用されているため、第一次埋葬に伴なう土器が石室内に残存していたかどうかは疑わしい。石室内出土土器は、その出土位置によって群に分けることは不可能であるが、型式学的に3時期に分けることが出来、新しい様相を呈する土器群は確実に追葬に伴なう副葬品と考えることができる。これらの土器群を型式学的に検討し、図に示したのが第58図である。垣内1号墳は袖部付近の土器群に新しい様相が認められるのは前述したとおりである。次に、垣内1号墳袖部付近の土器群と垣内3号墳出土土器の最古に位置付けられる群とを比較したい。蓋坏(189と209・210・211)では後者に器形の減少がみられる。台付長頸壺(192と214)では台部のスカシが前者では2段3方であるのに対し、後者は1段3方である。後者に台部の簡単化がみられ、後者のほうに新しい様相が認められる。また、垣内3号墳出土土器の中で中間に位置付けられる蓋坏(208)と垣内2号墳出土の蓋坏(199)はほぼ同一の口径をもち、同時期のものであることがわかる。また、これらの土器群は、「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」<sup>7)</sup>・「平城宮発掘調査報告Ⅶ」<sup>8)</sup>の年



第 58 図 1 ~ 3 号墳 石室内出土土器

代観に従うと第58図のような年代が与えられる。これらの結果、垣内1号墳は6世紀末に築造され、7世紀初頭に追葬が行なわれたと考えられる。また、垣内2号墳は7世紀後半に築造され、垣内3号墳は7世紀前半、7世紀後半、奈良時代に埋葬が行なわれたと考えられよう。

高安古墳群の形成について 今回の調査で検出された垣内1～3号墳をはじめとする梅岩寺周辺の支群は高安古墳群の南部に位置する。高安古墳群は古くから大型群集墳として知られており、幾度か分布調査がなされてきた。なかでも白石太一郎氏は分布調査の結果を分析され、横穴式石室の型式編年にもとづいて高安古墳群の形成過程を考察され、一部に7世紀代の古墳が存在するが、7世紀初頭にはほぼ古墳の築造が終わると考えられた。白石氏の呼称する「高安千塚古墳群」は高安古墳群の中で古墳の最も密集する服部川・大窪・山畑地区周辺のみを指すものである。ここでは、狭義の高安古墳群と呼ぶ。したがって、垣内1～3号墳をはじめとする前述の一支群は狭義の高安古墳群には含まれない。狭義の高安古墳群内では昭和58年度、八尾市教育委員会の発掘調査によって郡川に所在する法蔵寺境内で7世紀代の無袖式横穴式石室を内部主体とする古墳が検出されている<sup>10)</sup>。また、法蔵寺の北約600mに位置する来迎寺境内には、無袖式横穴式石室を内部主体とし、白石太一郎氏にも指摘されているように「玄室内の家形石棺は棺蓋頂部の平坦面の幅の2分の1よりやや広くなり、さらに突起を全く欠いていて明らかに7世紀前半のものである」刳抜式の無突起の家形石棺を納める7世紀代の古墳がみられる。これらの例より狭義の高安古墳群中にも7世紀代の古墳は数基存在していることがわかり、神立に所在する7世紀後半のおんち山古墳<sup>11)</sup>、今回調査した垣内2号墳や、垣内2号墳と同一支群中の無袖式横穴式石室を内部主体とする古墳と合わせて高安古墳群の全域にわたり7世紀代に築造された古墳が存在すると考えられる。したがって、高安古墳群の消滅は従来のように7世紀初頭ととらえることはできず、その消滅については再検討を要するであろう。(嶋村)

註 1) 大阪府教育委員会「陶邑Ⅰ」(1976)・「陶邑Ⅲ」(1978)

2) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ」(1978)

3) 註2)と同じ

4) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」(1966)

5) 大阪府教育委員会「八尾市高安古墳群の調査」(1966)

6) 羽曳野市教育委員会「古市遺跡群Ⅵ」(1985)

7) 註2)と同じ

8) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅶ」(1976)

9) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一考察—河内高安千塚及平尾山千塚を中心として」『古代学研究』42・43号(1966)。「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集(1982)

10) 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書」(1984)

11) 八尾市教育委員会「神立おんち山古墳調査概報」(1968)

## 石材について

八尾市立刑部小学校 奥田 尚

### 1. はじめに

調査した3基の古墳には側壁・奥壁の下部の石材が残存している。また、石棺の一部、あるいは石棺材片と推定される岩石が出土した。これらの石材を裸眼で観察した。観察時、岩石種、礫形、加工面等に注意した。

石室に使用されている石材は、主として片麻状黒雲母花崗岩で、黒雲母花崗岩、両雲母花崗岩がごく僅かである。石棺材、石棺材と推定される岩石は、流紋岩質火山礫凝灰岩A、流紋岩質火山礫凝灰岩B、流紋岩質凝灰角礫岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩A、流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩Bである。これら石材の岩相について述べるとともに、石材の採取地についてふれる。

### 2. 石材の岩石種

各石材の岩石種について述べる。

黒雲母花崗岩：色は灰白色である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1mm～1.5mm、量が僅かである。長石は白色、粒径が1mm～1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm～1mm、量が僅かである。

両雲母花崗岩：色は灰白色である。長石の斑晶が点在する。造岩鉱物は石英、長石、白雲母、黒雲母である。石英は無色透明、粒状で、粒径が1mm～3mm、量が僅かである。長石は白色、粒径が0.5mm～3mm、量が多い。斑晶をなす長石は、粒径が5mm～12mm、量が多い。白雲母は無色透明、板状で、粒径が1mm～3mm、量が僅かである。長径2cm～5cmのレンズ状をなして集合する。

流紋岩質火山礫凝灰岩A：色は白色である。層理が顕著である。層理と礫の長軸方向とは平行する。構成礫種は流紋岩、輝石安山岩である。流紋岩は灰色、角礫で、礫径が7mm以下、量が多い。流紋岩は流理が顕著で、石英が細粒で少なく、稀に、自形の柘榴石がある。輝石安山岩は赤褐色、亜角礫で、礫径が7mm以下、量がごくごく僅かである。基質は白色、緻密でやや固い。

流紋岩質火山礫凝灰岩B：色は白色である。層理面が顕著である。角礫の長軸方向と層理面とは平行である。構成礫種は流紋岩、軽石である。流紋岩は灰色、角礫で、礫径が5mm以下、量が多い。流紋岩は流理が顕著で、石英が細粒で少なく、稀に、自形の柘榴石がある。軽石は白色、角礫で、礫径が6mm以下、量がごく僅かである。基質は白色、緻密でやや固い。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰白色である。構成礫種は松脂岩、軽石である。松脂岩は暗灰色、黒色で、亜角礫、亜円礫である。礫径は25mm以下で量が多い。軽石は白色、亜角礫で、礫径が5mm～40mm、量が僅かである。基質は白色、緻密で柔らかい。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩：色は白色である。弱い溶結構造がある。構成礫種は柘榴石黒雲母安山岩、松脂岩である。松脂岩は黒色、亜角礫、粒径が10mm～20mm、量が僅かである。柘榴石黒雲母安山岩は灰色、角礫で、礫径が4mm～20mm、量が多い。基質は白色、緻密でやや固い。

流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩A：色は白色である。弱い溶結構造がある。構成礫種は松脂岩、柘榴石黒雲母安山岩である。松脂岩は黒白、角礫で、粒径が5mm～25mm、量がごく僅かである。柘榴石黒雲母安山岩は灰色、角礫で、礫径が40mm以下、量在中である。流理が顕著で柘榴石・黒雲母は粒径が1mm～2mmで、量が僅かである。基質は白色、緻密で、やや固い。基質には黒雲母、柘榴石が含まれる。黒雲母は黒白、六角形板状、粒径が1mm～2mm、量がごく僅かである。柘榴石は濃赤色、偏菱二十四面体で、粒径が1mm～1.5mm、量がごく僅かである。

流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩B：色は白色である。弱い溶結構造がある。構成礫種は流紋岩、松脂岩、軽石である。流紋岩は青灰色、角礫で、礫径が5mm～15mm、量がごく僅かである。流紋岩の石基は玻璃質である。松脂岩は黒色、暗灰色で角礫である。礫径が25mm以下、量在中である。軽石は白色、角礫、亜角礫で、礫径が60mm以下、量在中である。基質は白色緻密で、やや固い。

片麻状黒雲母花崗岩：色は暗灰色である。片麻状構造が顕著で、長石の斑晶が点在する。黒雲母の板状面と片麻状構造の方向とはほぼ平行である。造岩鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1mm～2mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が1mm～5mm、量が多い。斑晶をなす長石は粒径が5mm～10mm、量が僅かである。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5mm～1.5mm、量が多い。

### 3. 石材の使用傾向

3基の古墳の石材について述べる。

1号墳： 残存する石室材は、角が残った割り石を主とし、谷川等に転がる水磨された様相を示し、角が円みを帯びている石はごく僅かである。片麻状黒雲母花崗岩が多く、両雲母花崗岩は4石、黒雲母花崗岩は1石である。石棺は組合式家形石棺であると推定される。石棺材は全て白色の凝灰岩である。岩石種は流紋岩質火山礫凝灰岩A、流紋岩質火山礫凝灰岩B、流紋岩質凝灰角礫岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩(S1)、流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩Aである。

2号墳：残存する石室材は角が鋭く残った割り石、角が少し円くなった角礫である。片麻状黒雲母花崗岩が多く、両雲母花崗岩・黒雲母花崗岩が僅かである。石棺材と推定される石材は流紋岩質火山礫凝灰岩A(S3)、流紋岩質火山礫凝灰岩B(S4)、流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩B(S2)である。

3号墳：石室に使用されている石材は、角が鋭く残った割り石を主とし、谷川等に転がるような表面が水磨された様相を示す石材は僅かである。片麻状黒雲母花崗岩を主とし、黒雲母花崗岩、両雲母花崗岩が僅かである。

#### 4. 石材の採取地

石室壁石に使用されている片麻状黒雲母花崗岩と同じ岩相を示す岩石は、高安山西斜面高安山ケーブルの設置されている谷から恩智神社上方の谷付近にかけて分布する。3基の古墳が築造されている付近では同じ岩相の岩石が露出する。使用石材の表面が谷川等に転がっている礫というよりも、割り石であるため、当付近のいづれかに露出する岩石を割り出して、石材としたと考えられる。一部の片麻状黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、両雲母花崗岩は角がやや円くなり、表面がやや滑らかであることから、谷川等に転がる礫を採取したと考えられる。当付近は前述のように片麻状黒雲母花崗岩が広く分布し、部分的に、黒雲母花崗岩、両雲母花崗岩が分布しているのが、当古墳上方の谷間や古墳北側の谷間に僅かであるが礫として見られる。角が僅かに円くなった石材はいずれかの谷から採取されたのであろう。

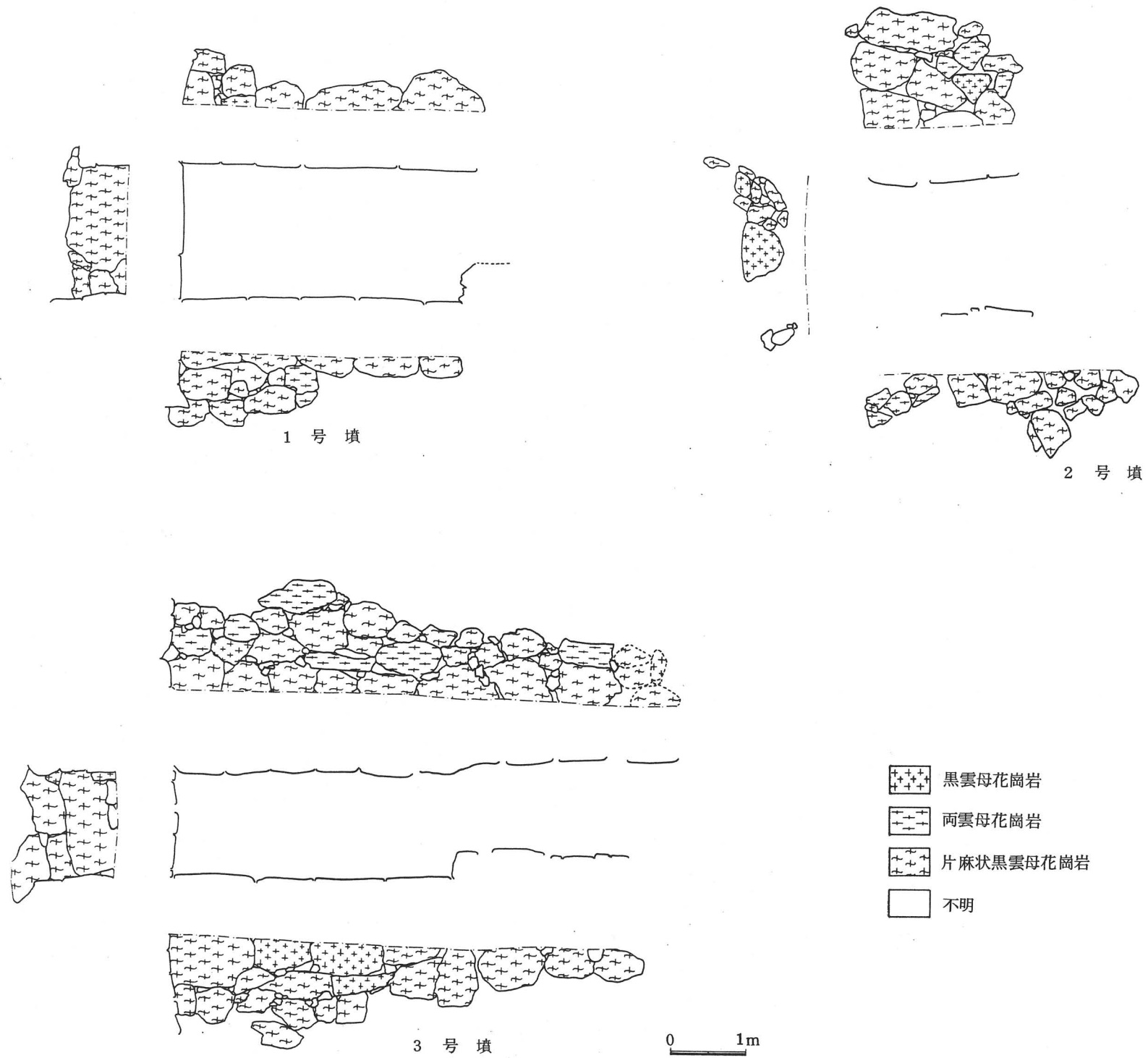
流紋岩質火山礫凝灰岩Aと流紋岩質火山礫凝灰岩Bとは、礫種が僅かに異なるが、灰色の流紋岩台礫を多く含む。この岩相と同じ岩石は奈良県北葛城郡香芝町ドンズルポー付近に分布する二上層群上部ドンズルポー層の一部に相当する。礫種構成、礫形、礫径が似た岩石が上部ドンズルポー層中に見られる。

流紋岩質凝灰角礫岩には松脂岩、軽石が含まれ、溶結していないことから、この岩石と同じ岩相の岩石は、ドンズルポー南方、牡丹洞付近に分布する二上層群下部ドンズルポー層の岩相の一部に相当する。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩と流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩Aとは、構成礫種は同じで、礫径が異なるのみであることから、採石地はほぼ同じ地点であると推定される。この岩相と同じ岩相を示す岩石は、柘榴石黒雲母花崗岩が含まれ、基質中には黒雲母と柘榴石が含まれることから、二上山岩屋峠付近から雌岳中腹部に分布する二上層群中部ドンズルポー層の岩相の一部に相当する。

流紋岩質凝灰角礫岩質溶結凝灰岩Bには青灰色流紋岩・松脂岩の礫が含まれ、基質が溶結していることから、この岩石と同じ岩相を示す岩石は、二上山南西鹿谷寺付近に分布する二上層





第59図 古墳に使用された石材

群下部ドンズルポー層の岩相の一部に相当する。

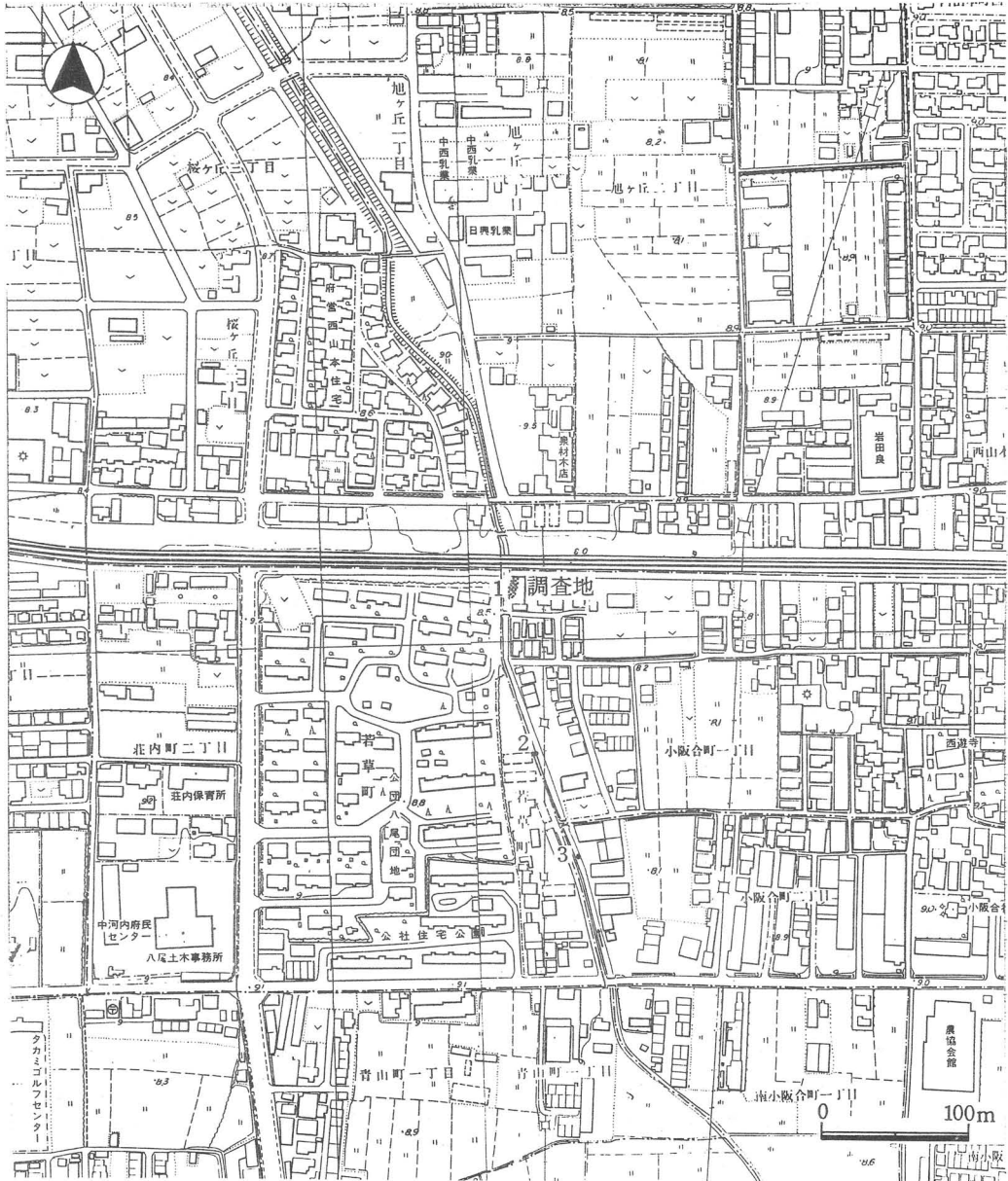
以上のように、石室の石材はごく近くの間腹や谷川から採取され、石棺材には二上山付近の種々の凝灰岩が利用されている。また、1号墳棺のように、組合棺の石材にはドンズルポー付近、岩屋峠付近、牡丹洞付近から採取されたものがあることから、凝灰岩を切り出した二上山の石工集団は一つの集団であったことがうかがえる。

## 4. 小 阪 合 遺 跡

調 査 地 八尾市小阪合町1丁目

調 査 面 積 20 m<sup>2</sup>

調 査 期 間 昭 和 61 年 2 月 7 日 ~ 8 日



第 60 図 調査地周辺図 ( S = 1/5000 )

## 1. 調査の経過

小阪合町1丁目と若草町の間を流れる楠根川を改修して下水道汚水渠を築造する旨の通知が昭和60年7月10日付であった。これに基づき、埋蔵文化財の有無を確認する為、8月30日～9月3日の間に工事予定地内3ヶ所で試掘を実施したところ、下表のとおり結果となり、工事予定地内ほぼ全域に古墳時代から中世に至る遺物包含層が存在することが明確になった。また、第1Gでは深さ約30cm程度の遺構も確認されていた。

第15表 試掘調査一覧表

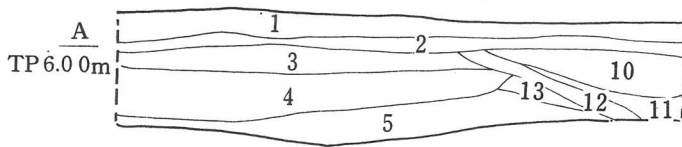
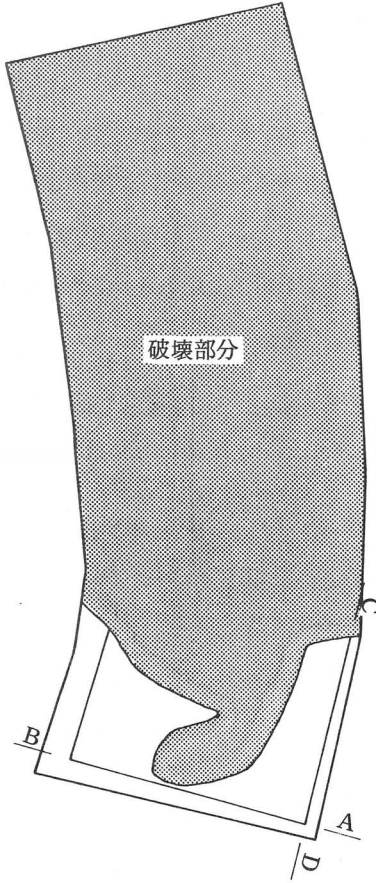
調査区	調査日	包含層深度	包含層土質	出土遺物	時期
第1G	60年8月30日	地表下2.0～2.4m	灰青色粘土～ 暗灰青色粘土	須恵器・土師器	古墳時代
第2G	60年9月2日	地表下1.8～2.3m	青灰色粘土～ 暗青灰色粘土	瓦器・羽釜・土師器・瓦	鎌倉時代
第3G	60年9月3日	地表下1.6～1.9m	淡青灰色粘土～ 暗灰色粘土	羽釜・摺鉢・瓦器・瓦	鎌倉時代

この結果に基づき、工事予定地全域について発掘調査を実施するよう早速担当課に通知したが、残念なことに、調査指示範囲の一部について事前着工されるに及び、大阪府教育委員会に連絡し、工事の中止を要請した後、現地において協議を行なった。その結果やむをえず掘削残存部分について調査を実施した。調査は2月7・8日の両日で実施した。

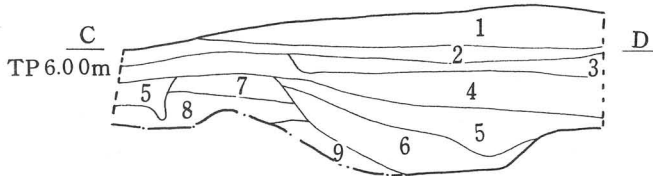
## 2. 調査の概要

発掘調査は破壊されずに残存している部分の遺構・遺物の残存状況と層位を確認し、今後の調査に備えることを目的として実施した。しかし、旧地表下1.9mまで削り取られ、包含層が露頭している状況であった。調査は全て手掘りで行った。方法は当初計画どおり、調査地全体を約50cm掘り下げた後、さらに現表土下1mまでトレンチ掘りを実施した。以下詳細を報告する。

第1層は灰色の粘土の上に褐色の砂礫が入り混じった土層で、遺物の量は希薄である。2層は水平に堆積する砂礫層で、中世の遺物が混入している。3・4層は古墳時代の須恵器・土師器が包まれる粘土層であり、3層上面から切り込む10～13層の砂・粘土が堆積する河川跡とみられるものが、調査地の西側に南北方向にみられた。なお、10層からは布留式の小型丸底壺が完形で出土していて、同じ層に瓦器片も混じって出土した。7・8・9層は地山と推定され、これを切り込む5・6層は調査地の東南付近で深く落ち込んでおり遺構を思わせた。ここからは須恵器片が多数出土した他、5層下面からは瓦片が、6層下面からは瓦器片が出土している。



- 1 灰褐色砂礫混り粘質土層
- 2 灰色粘質土混り砂礫層
- 3 青灰色砂礫混り粘土層
- 4 灰色粘土層
- 5 暗灰色砂礫混り粘土層
- 6 暗灰色微砂混りシルト層
- 7 淡灰色粘質シルト層
- 8 淡灰色粘土層
- 9 灰色微砂シルト層
- 10 灰白色粗砂層
- 11 青灰色粘土層
- 12 暗青灰色粘土混り砂礫層
- 13 灰色砂礫混り粘土層



第 61 図 調査区平・断面図 (S=1/200, 1/80)

### 3. ま と め

遺物包含層は、調査地全域において認められ、検出した遺構としては、調査区南東で認められた第7層を切り込む落ち込み及び第3層を切り込む調査区南西にみられた河川がある。

出土した土器は中世～古墳時代に至るものであるが、最下層から中世の土器が出土することから、この時期に層位が逆転したことがわかった。時期的には6層から出土した瓦片と、河川遺構から出土した瓦器との間に大きな時期差があまりないことから、単期間に遺構が変遷し、埋没したことを示している。これらは、中世楠根川の氾濫に起因するものと考えられる。これらのことから今回検出した遺構は全て中世時期のものであり、平安末期～鎌倉時代に相当するものと思われる。(米田)

## 5. 昭和60年度の埋蔵文化財調査について

昭和60年度に実施した発掘調査、立会調査は、いずれも文化財保護法57条の2、または57条の3に基づく遺跡範囲内における土木工事の届け出に伴う調査ばかりで477件にのぼる。当市教育委員会文化財室では、これらの届け出に対し、基礎工事や浄化槽、防火水槽、管理施設等の掘削工事で地下遺構が破壊されるかどうかを判断し、試掘調査、立会調査、慎重工事に分けて対応を行なっている。これらの調査の結果、遺跡が破壊されることが明らかな場合は発掘調査の実施を指示している。今年度は70件の試掘を実施した結果、発掘調査を必要と認めた12件のうち7件については、財団法人八尾市文化財調査研究会が発掘調査を実施することとなった。しかし今年度、一部において発掘調査の指示が公然と無視され、工事中止の措置をとらざるを得ない事態があったことはきわめて遺憾である。発掘調査は開発側と保存側とが充分協議を尽くした結果として実施されるべきであることはいうまでもなく、開発側の先行した論理による判断は重要な文化財遺産のとりかえしのつかない破壊をもたらすことを、開発側と調査を施行する側の相方で充分に認識しておくべきである。

さて、第16・17表は、財団法人八尾市文化財調査研究会と八尾市教育委員会がここ5年間に実施した調査の一覧表である。財団法人発足以前の昭和56年度には、発掘調査件数（試掘を除く）が約30件あり、八尾市教育委員会文化財室が直営で受託事業として実施していたが、昭和57年7月から財団法人が発足し、それ以後、原因者負担による発掘調査については、財団法人が受託し、教育委員会は国庫補助金を使用して主として試掘、立会調査及び遺跡確認の為の学術調査を実施する予定であった。しかし、昭和59年度以後、財団法人の調査員数の減少とともにその原則が崩れ始め、財団法人における事業量は年々減少し、教育委員会では、それまで実施していた学術調査をとりやめ、原因者負担または一部原因者負担による発掘調査を独自に実施しなければならなくなった。八尾市の文化財保存行政をとり扱うサイドとしても、今後の開発に対応して発掘調査体制そのものを抜本的に見直さなければならない時期に来ていることがわかる。

第18表には、八尾市教育委員会が今年度実施した調査状況を記載した。このうち重要な調査成果については本書に記すとおりであるが、調査成果を掲載できなかったものも多数存在していることを明記しておくとともに後日の報告にゆずることとする。また、大阪府教育委員会と合同で実施した成法寺遺跡の発掘調査成果については、大阪府教育委員会より概報が刊行される予定である。（米田）

第16表 財団法人八尾市文化財調査研究会事業成果一覧

	57年度	58年度	59年度	60年度
100 m <sup>2</sup> 以下の発掘調査	4	3	0	0
101 m <sup>2</sup> 以上の発掘調査	13	22	11	7
調査面積	23,135.18	15,812	8,549	9,582.6
刊行図書	2	4	2	2
調査員数	6	7	5	4
受託事業費	79,854,677	105,932,379	58,879,000	48,747,000

第17表 八尾市教育委員会文化財室調査状況

	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度
試掘・立会	189	206	252	192	190
学術調査	1	1	1	0	0
100 m <sup>2</sup> 以下の発掘調査	16	0	0	4	6
101 m <sup>2</sup> 以上の発掘調査	14	1	0	2	4
発掘調査面積	6,100	420	60	1,194	1,600
刊行図書	1	3	2	2	2
担当者数	3	4	2	2	2







遺構検出状況（北から）



SX1 土器出土状況（北から）



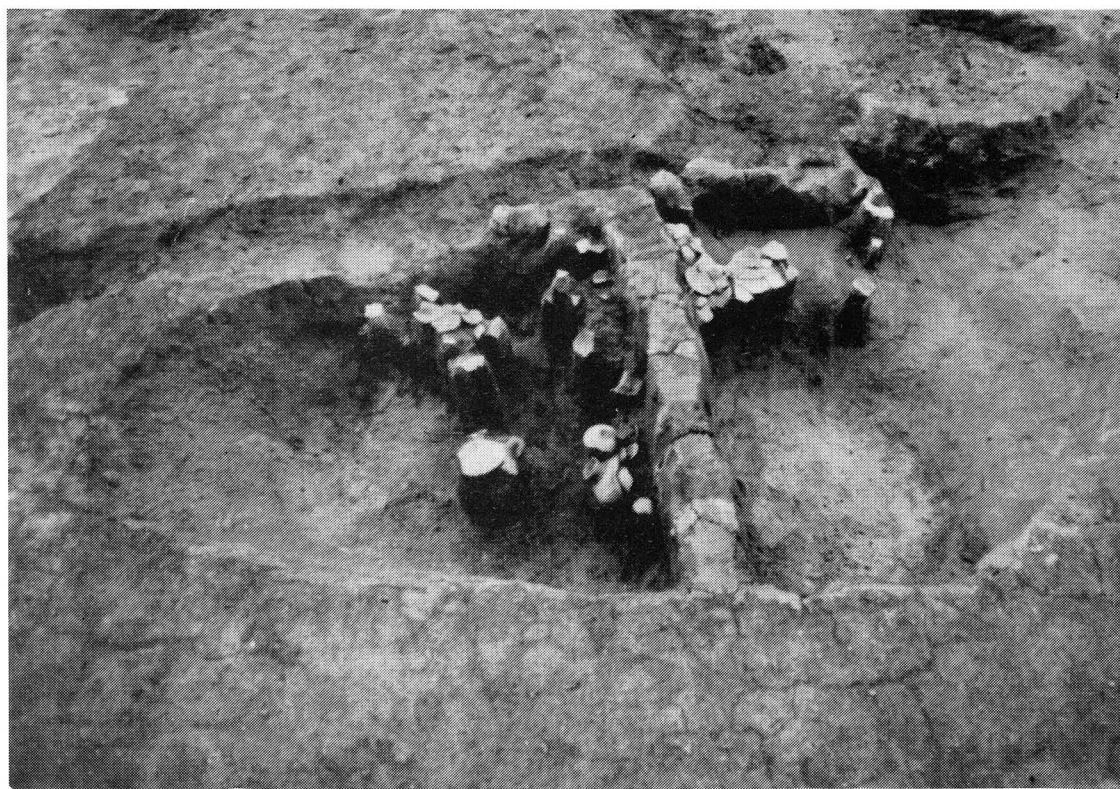
S X 1 土器出土状況（南から）



S X 1 土器出土状況（西から）



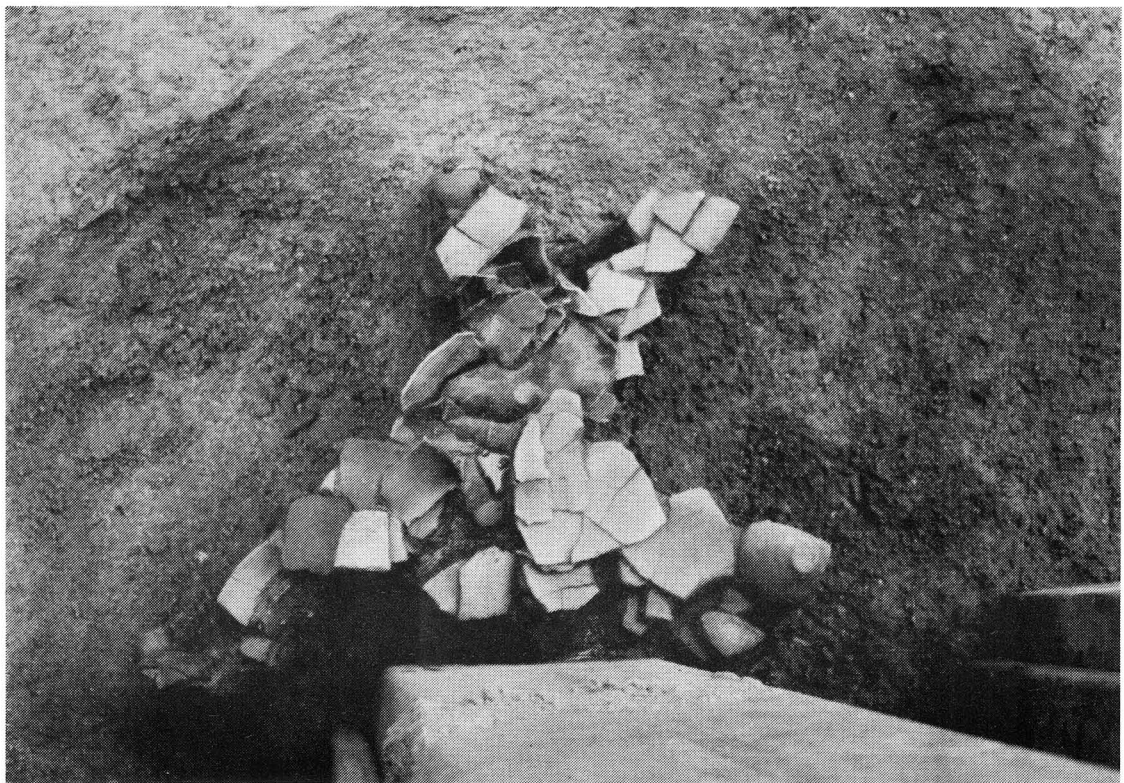
SX 1 土器出土状況（東から）



SK 2 土器出土状況（西から）



SK1 土器出土状況（東から）



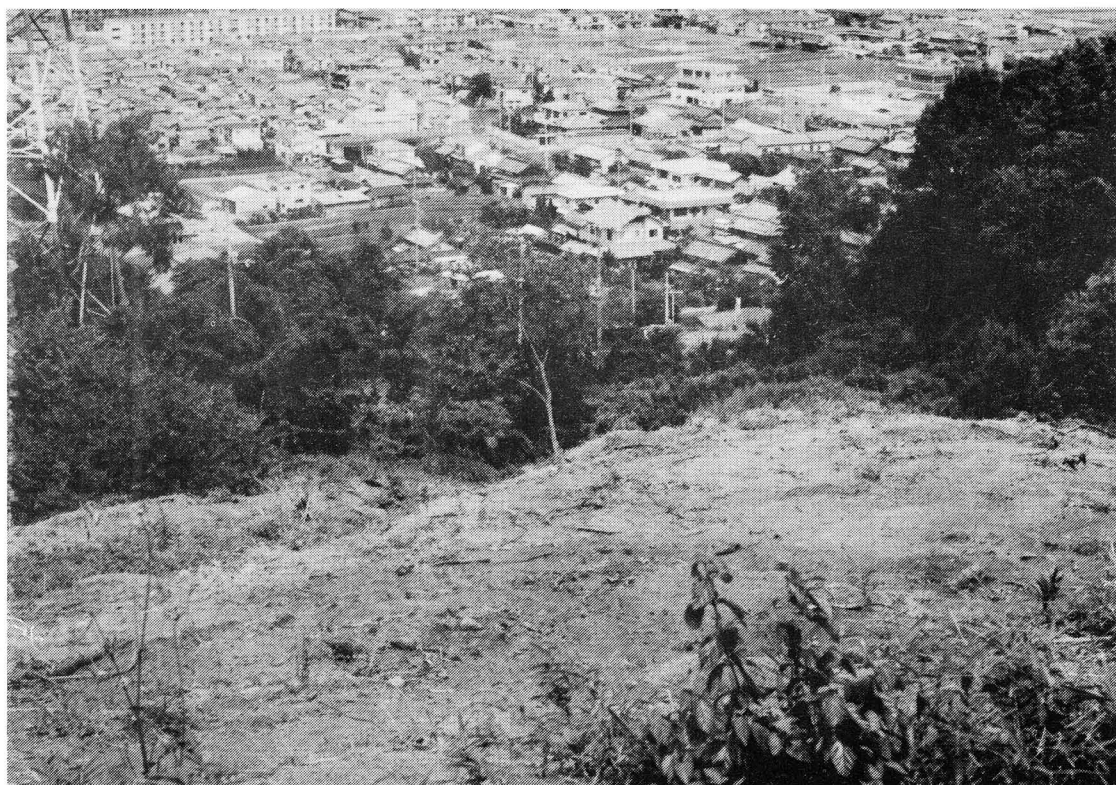
SK4 土器出土状況（南東から）



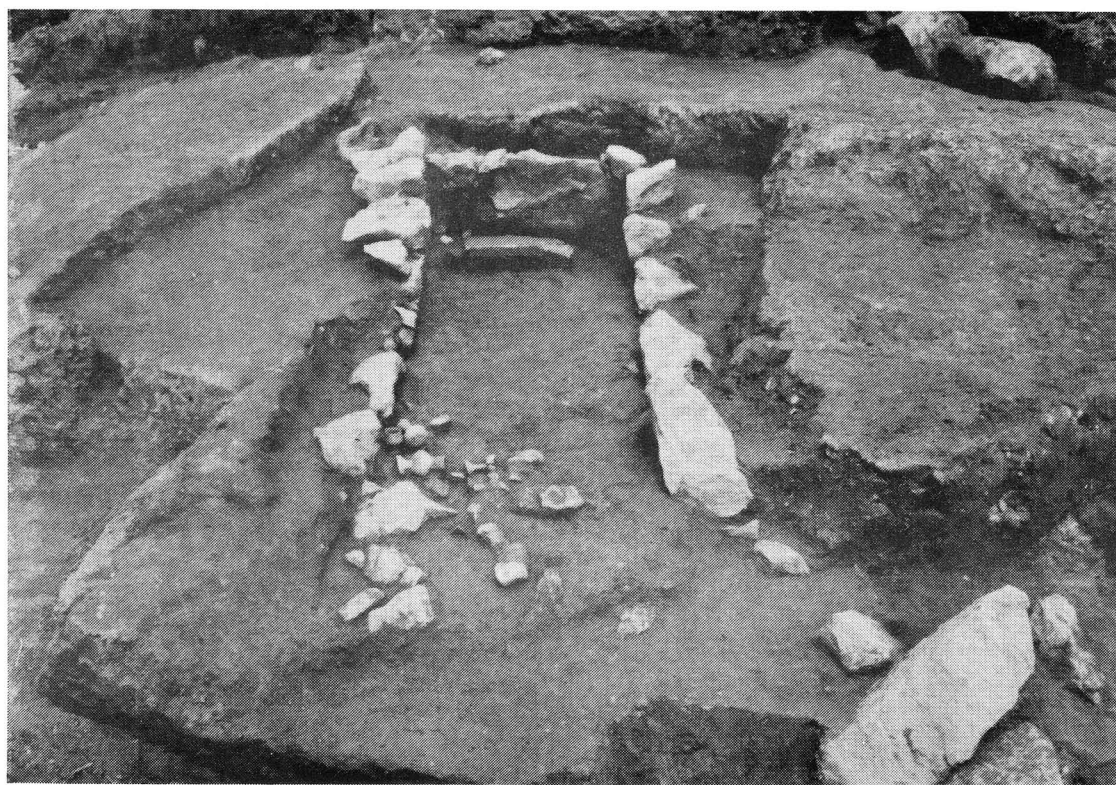
調査前全景（北から）



調査前全景（南から）



調査前全景 3号墳付近(北から)



1号墳石室(南西から)

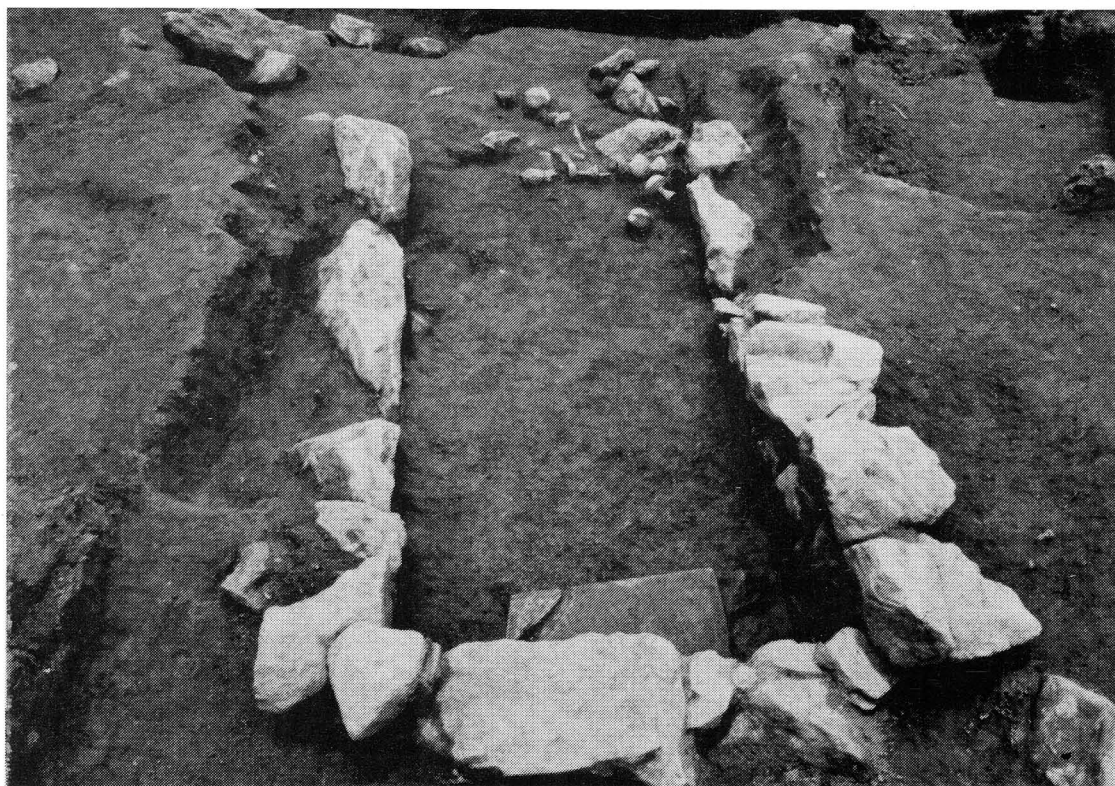


1号墳（南西から）



1号墳（南から）

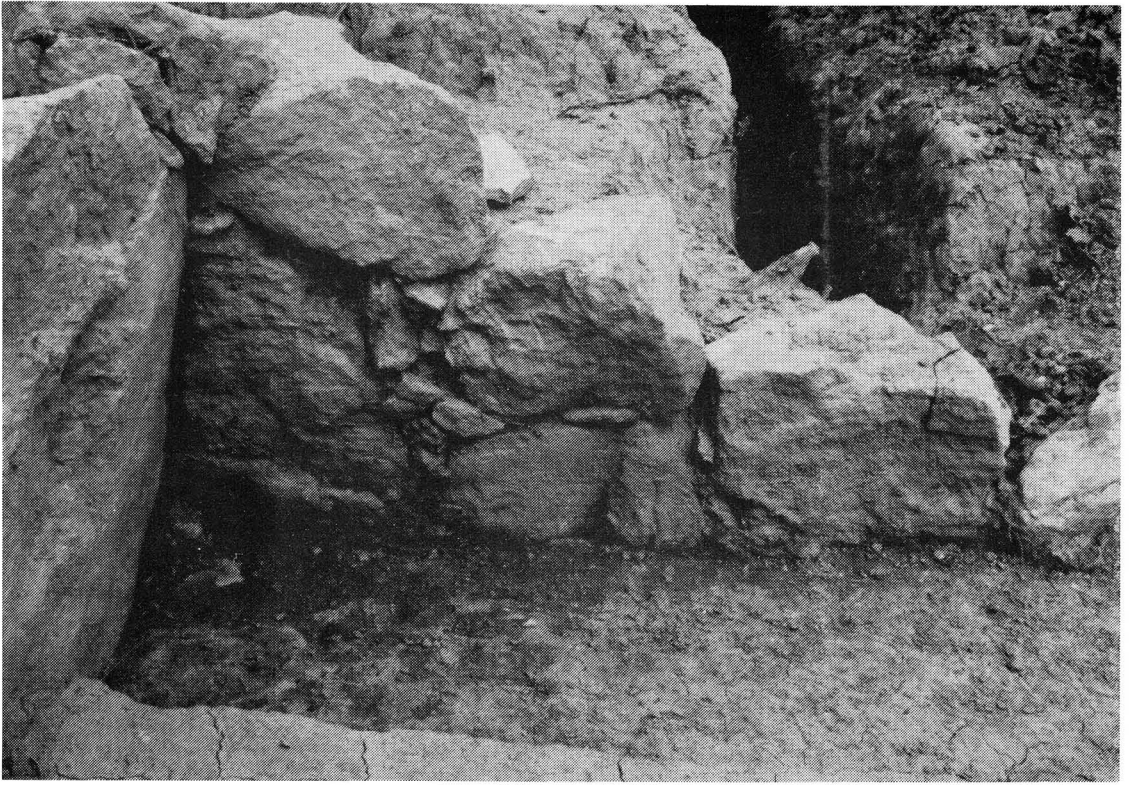




1号墳石室（北東から）



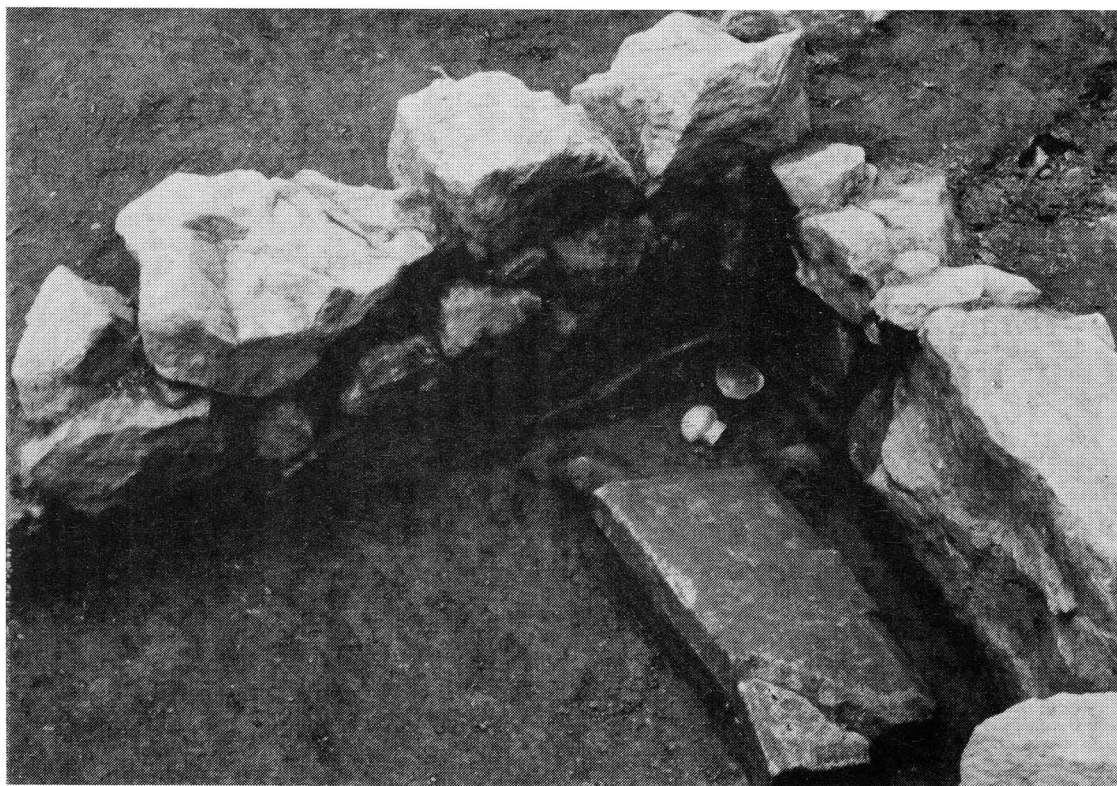
1号墳石室奥壁（南西から）



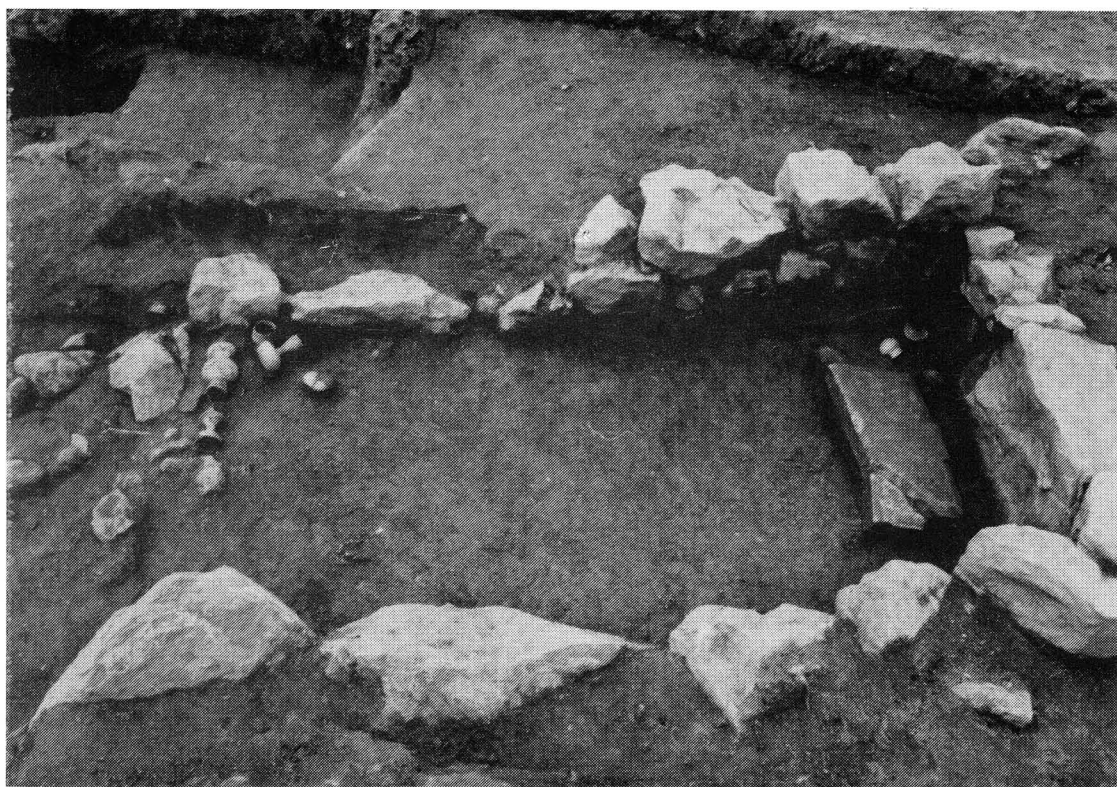
1号墳側壁（北西から）



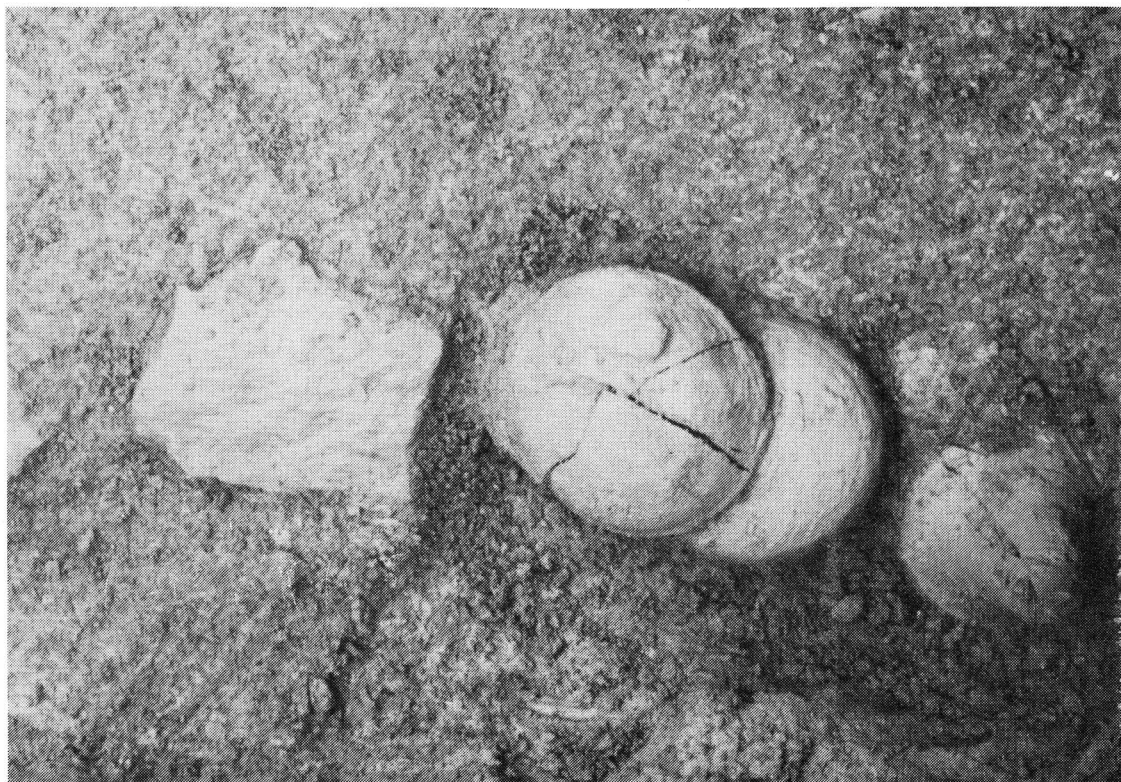
1号墳石室遺物出土状況（南西から）



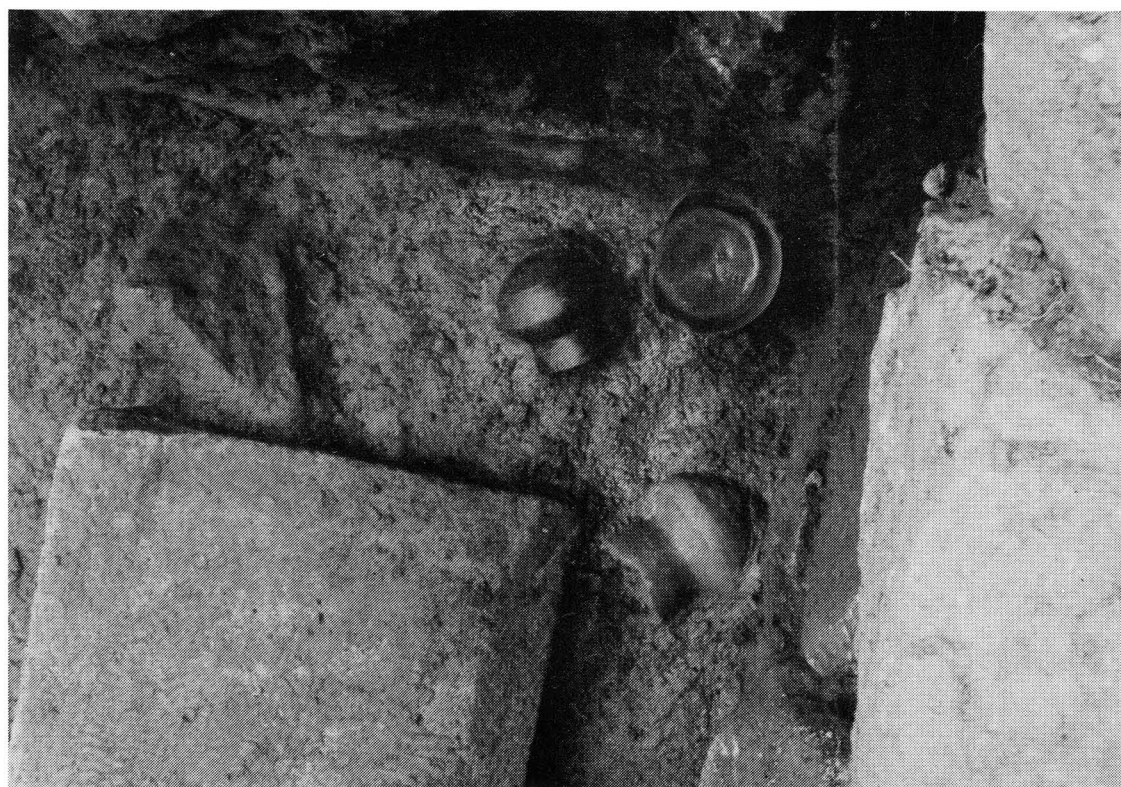
1号墳奥壁付近遺物出土状況（南から）



1号墳石室遺物出土状況（南東から）



1号墳奥壁付近遺物出土状況（東から）



1号墳奥壁付近遺物出土状況（南東から）



1号墳袖部付近遺物出土状況（南東から）



1号墳袖部付近遺物出土状況（南東から）



1号墳石室金環出土状況（南西から）



2号墳石室検出状況（南から）



2号墳石室（南から）



2号墳石棺材出土状況（東から）



2号墳側壁（東から）



2号墳側壁（西から）





2号墳石室遺物出土状況（南から）



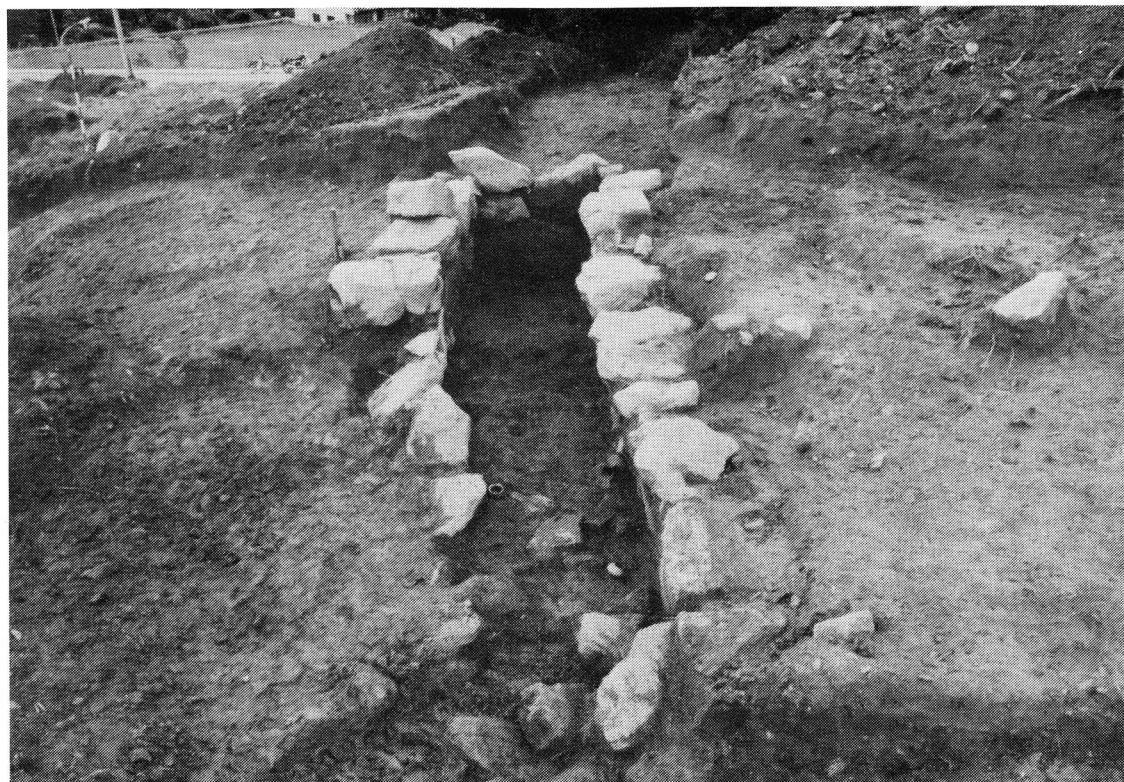
2号墳石室遺物出土状況（南から）



3号墳全景（南東から）



3号墳石室検出状況（南西から）



3号墳石室（南西から）



3号墳石室（南西から）



3号墳奥壁（南西から）

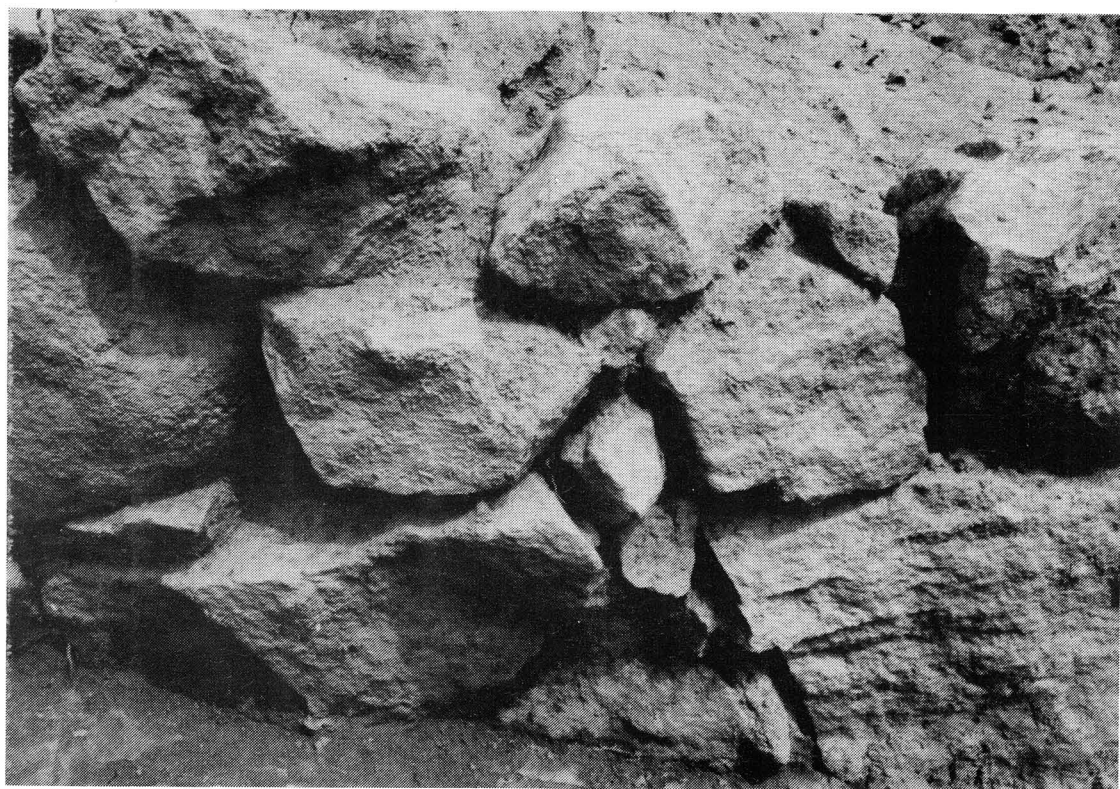


3号墳側壁 奥壁→羨道部（北西から）

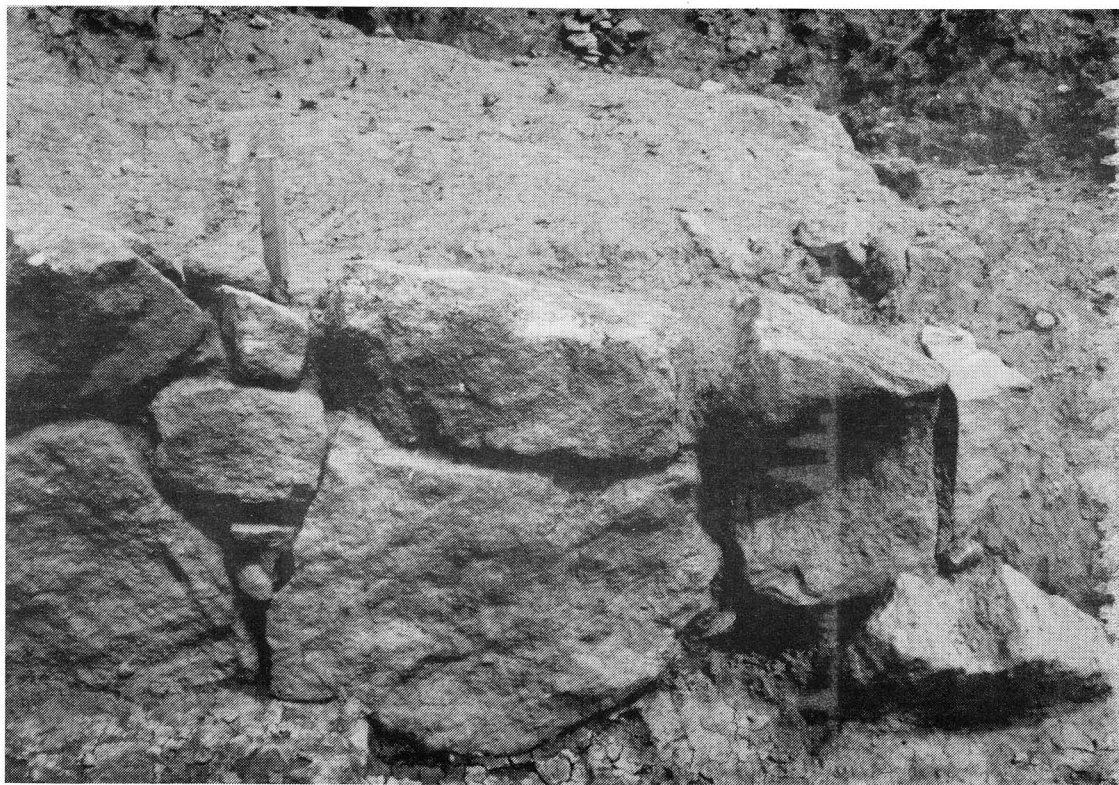


図一

3号墳側壁 奥壁→羨道部（北西から）



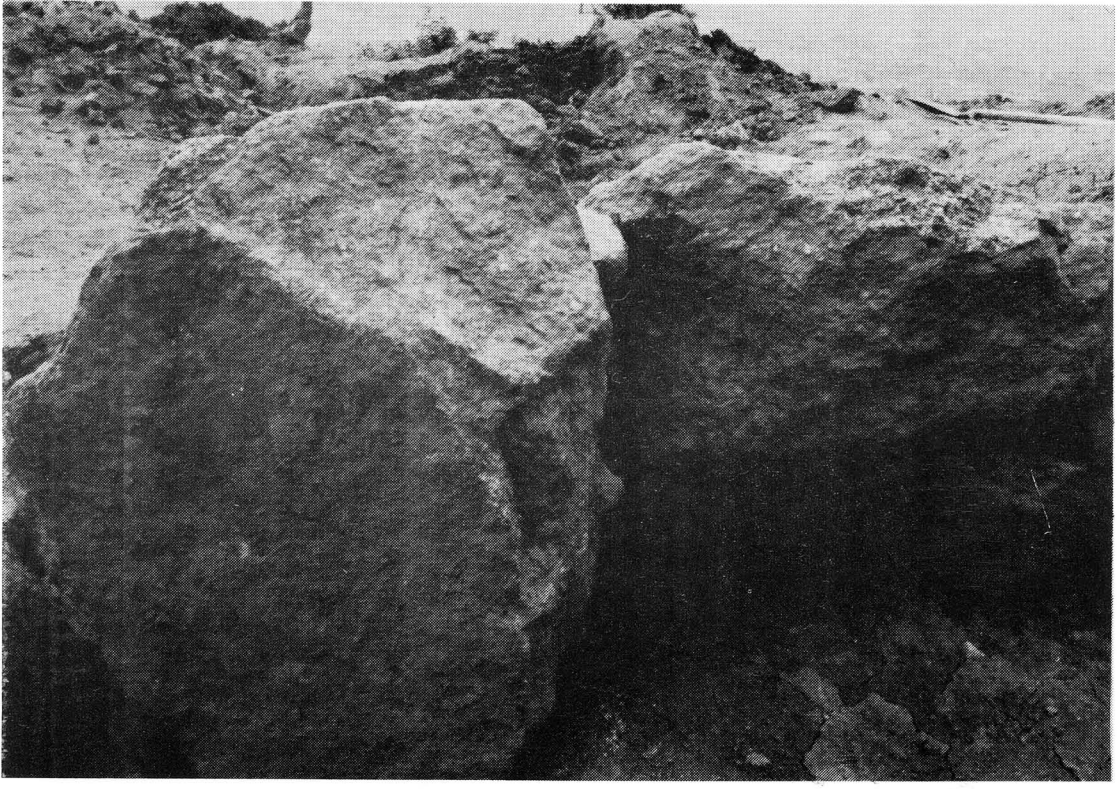
3号墳側壁 奥壁→羨道部（北西から）



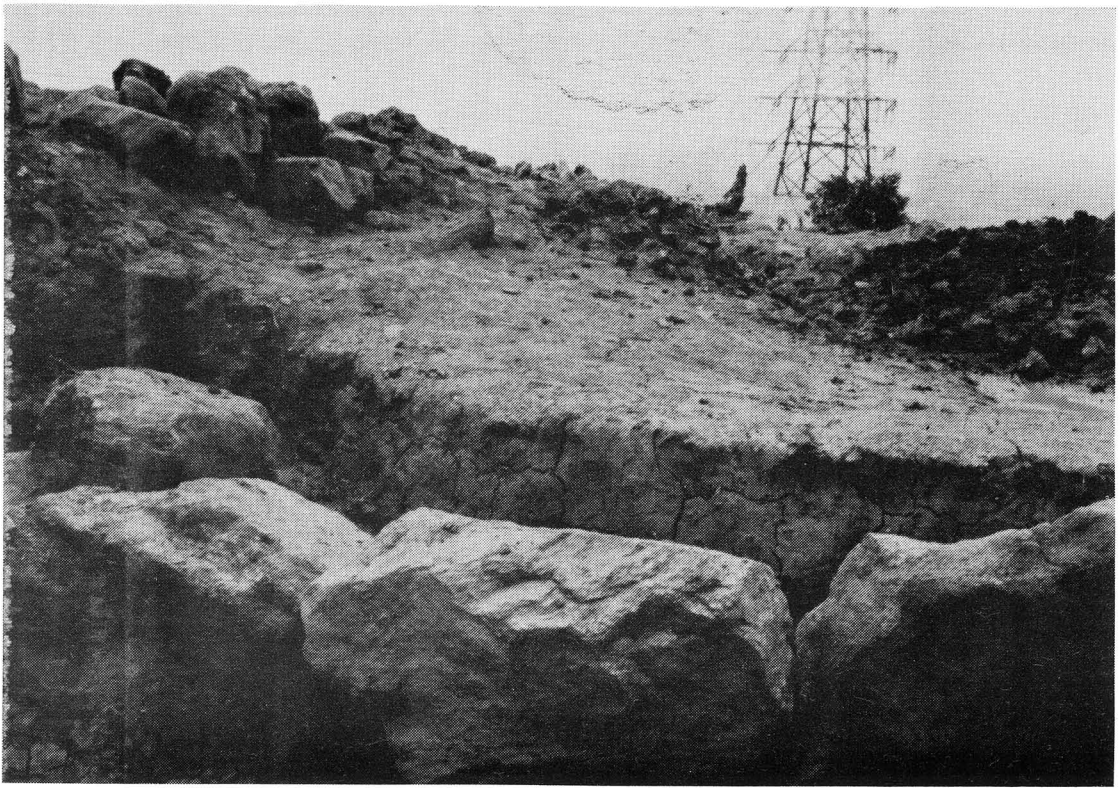
3号墳側壁 奥壁→羨道部（北西から）



3号墳側壁 奥壁→羨道部（北東から）



3号墳側壁 奥壁→羨道部（北東から）



3号墳側壁 奥壁→羨道部（北東から）



3号墳石室遺物出土状況（南西から）



3号墳石室羨道部遺物出土状況（北西から）





3号墳袖部付近遺物出土状況（南東から）



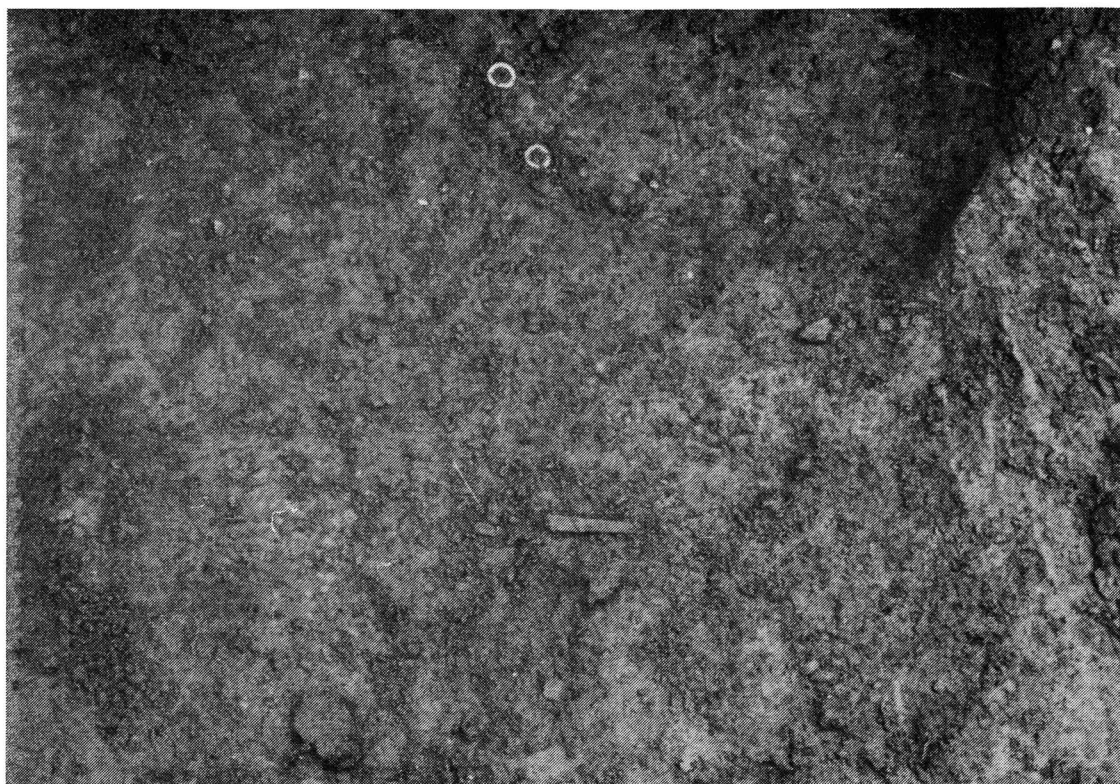
3号墳羨道部遺物出土状況（南東から）



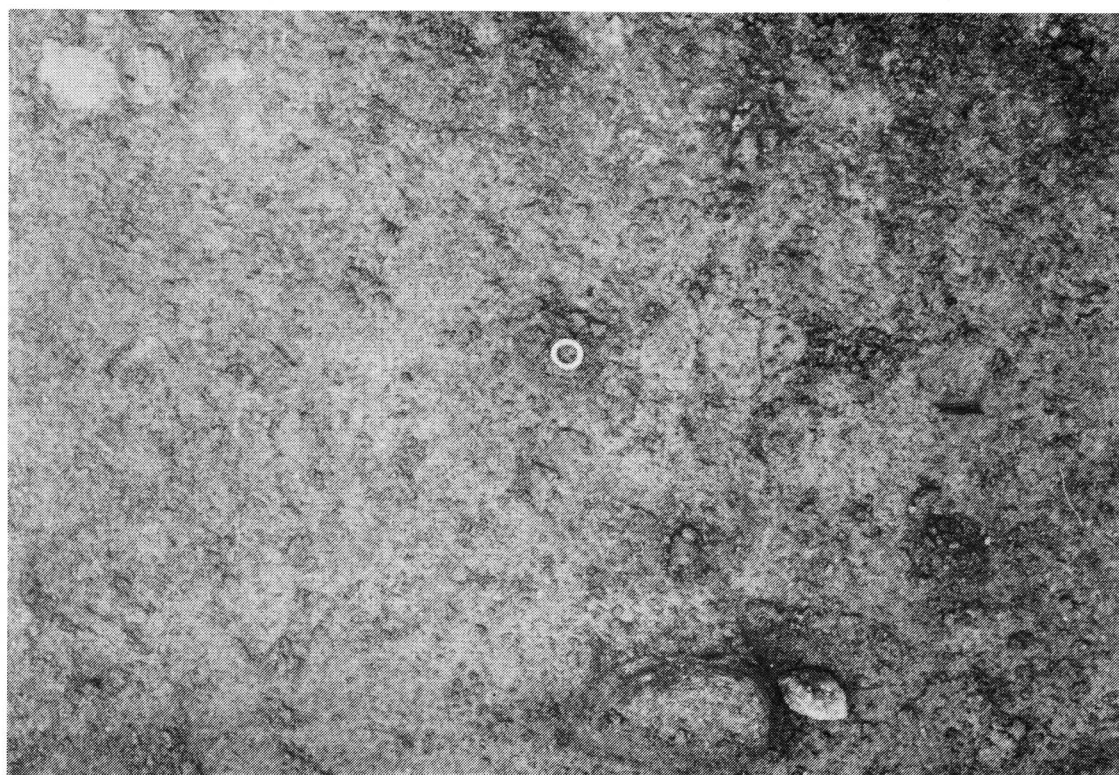
3号墳石室金環・鉄製品出土状況（南東から）



3号墳石室管玉出土状況（南西から）



3号墳石室金環・鉄製品出土状況（北西から）



3号墳金環出土状況（北西から）



3号墳鉄製品出土状況（北東から）



3号墳鉄製品出土状況（北東から）



3号墳直刀出土状況（北西から）



現地説明会風景



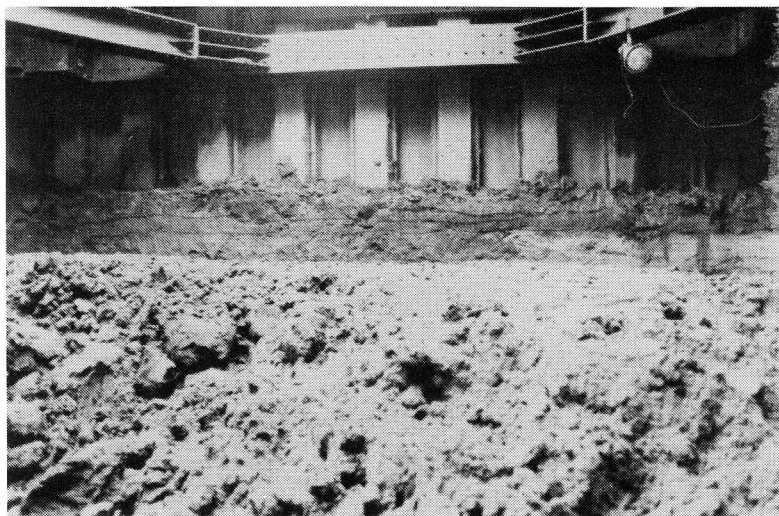
遺跡破壊状況



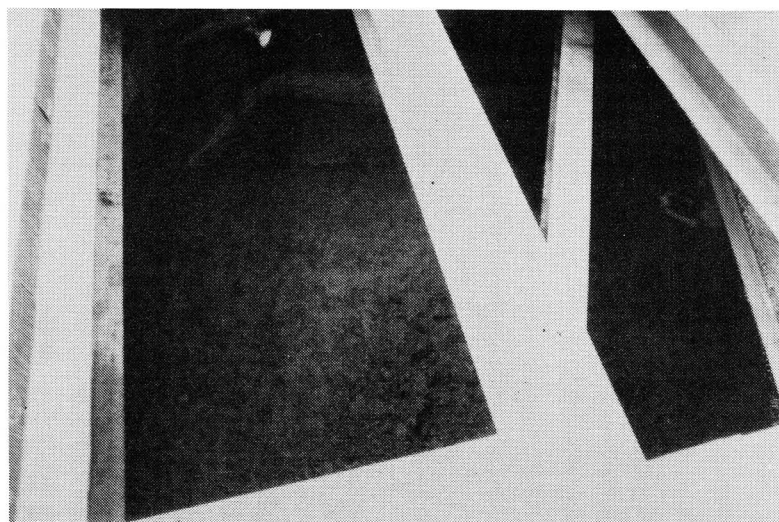
調査状況



遺構面調査状況



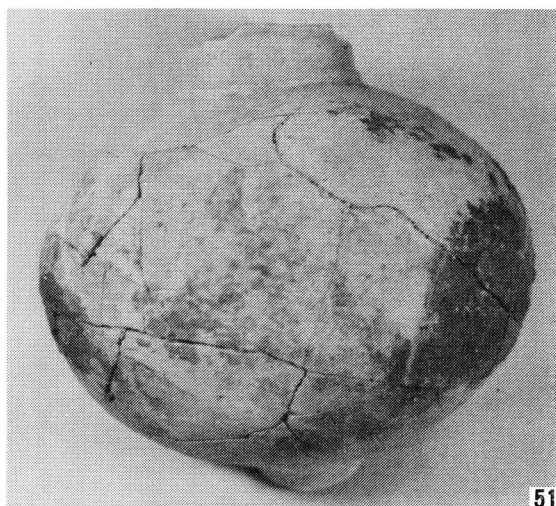
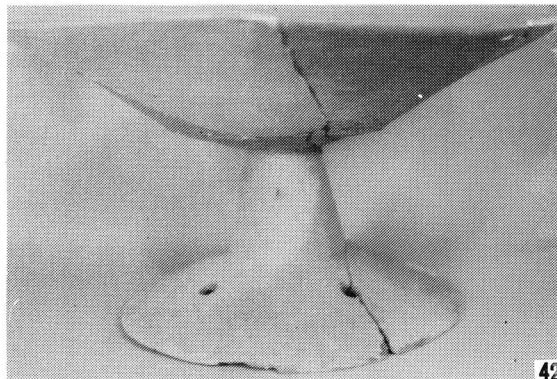
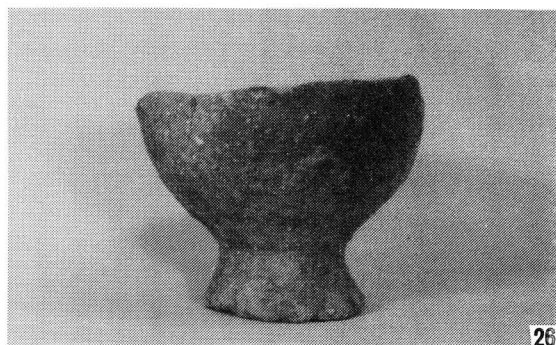
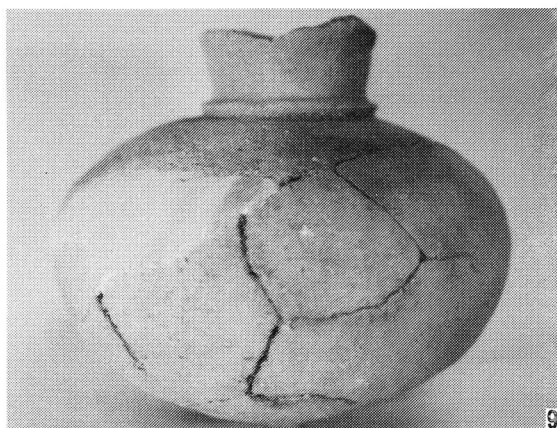
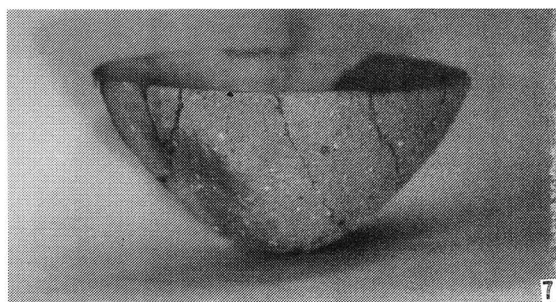
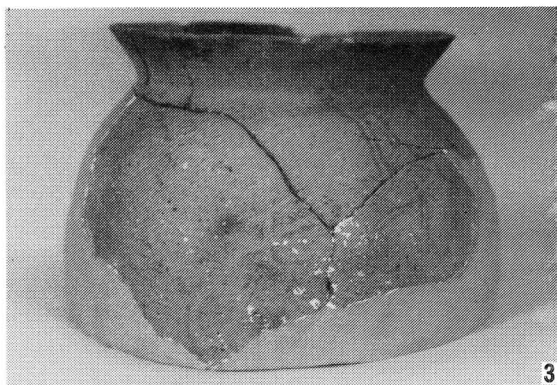
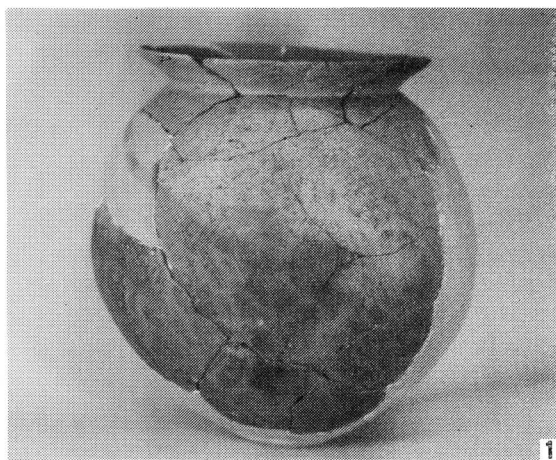
土層断面(北から)



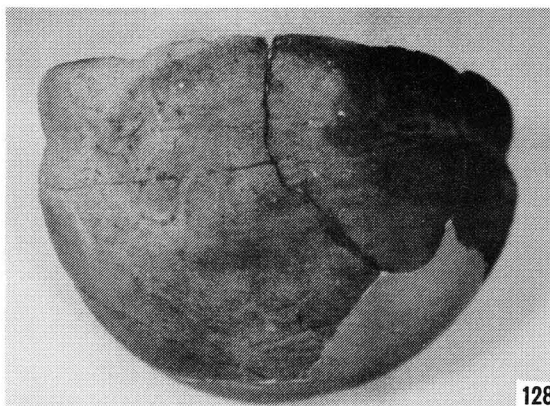
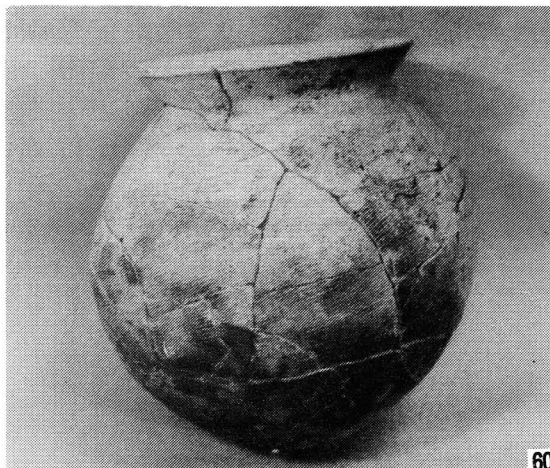
完掘状況(東上から)

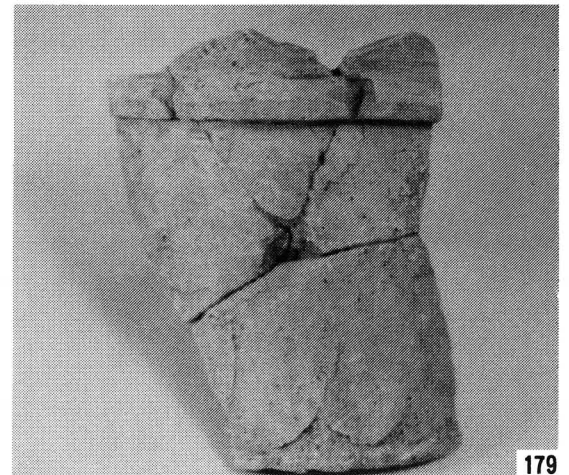
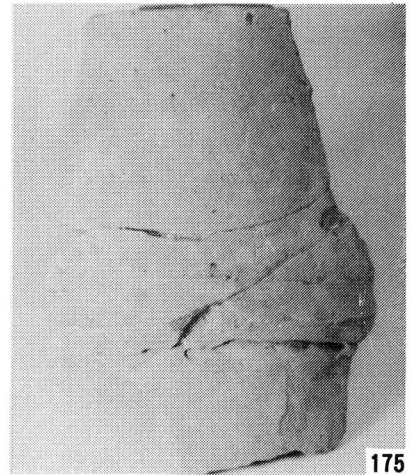
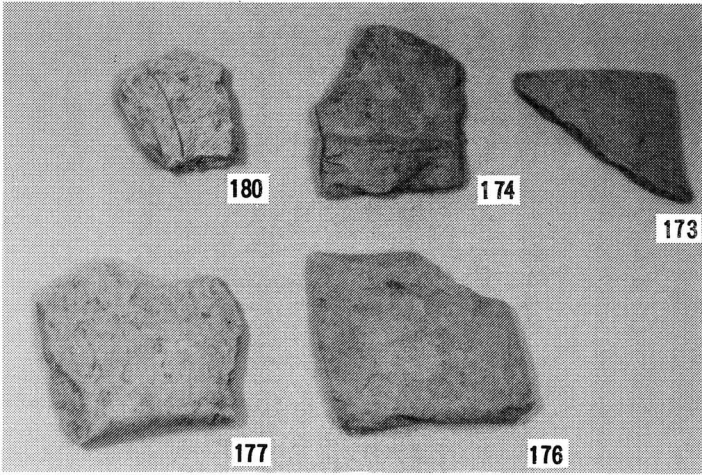
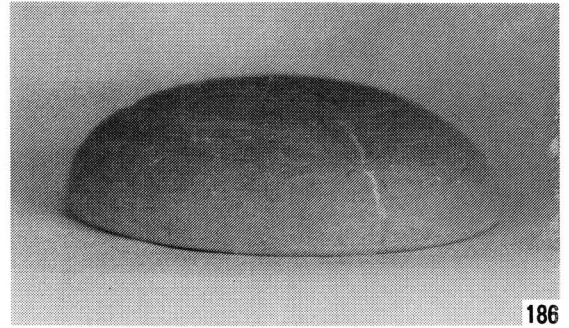
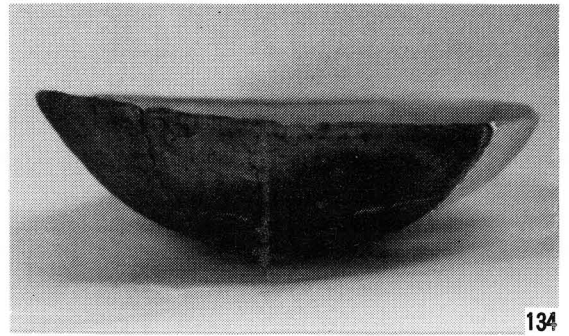


布留式土器出土状況



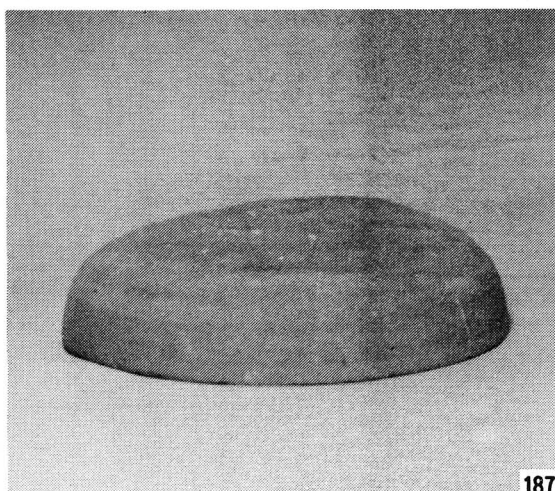








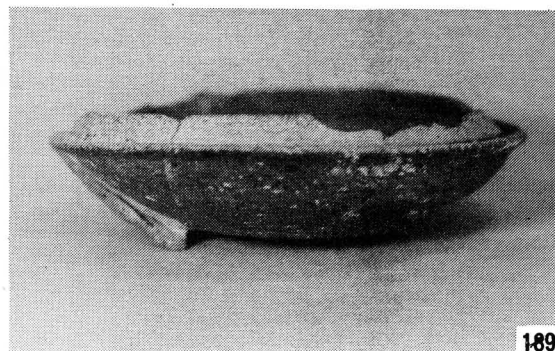
185



187



188



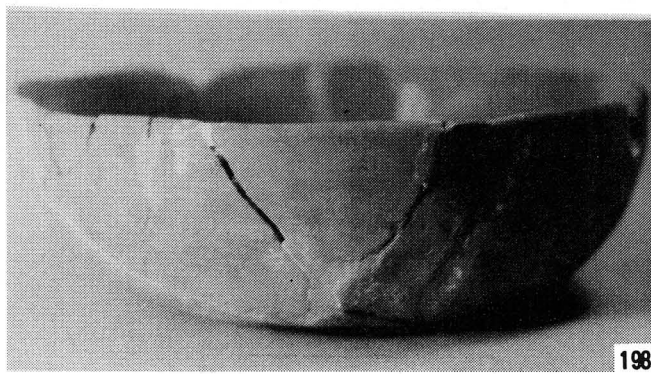
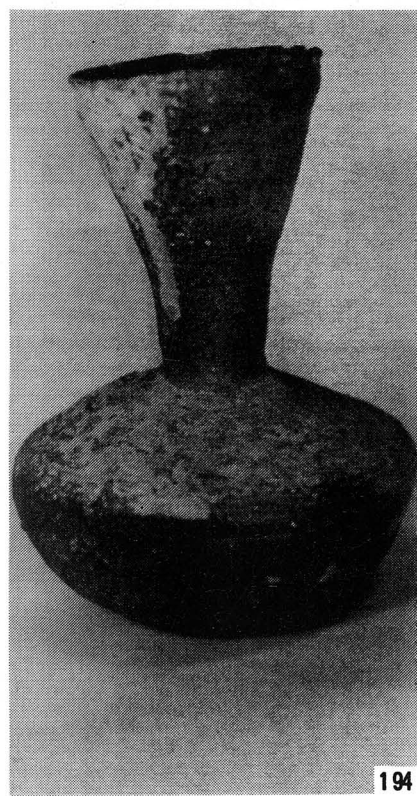
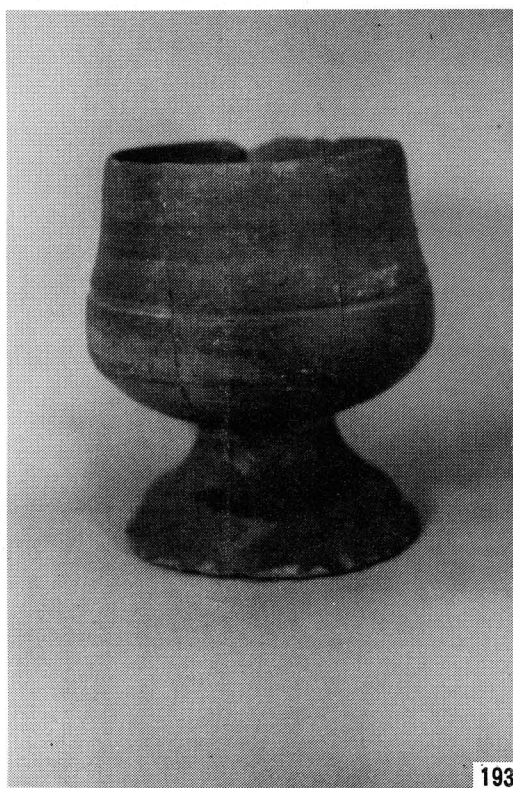
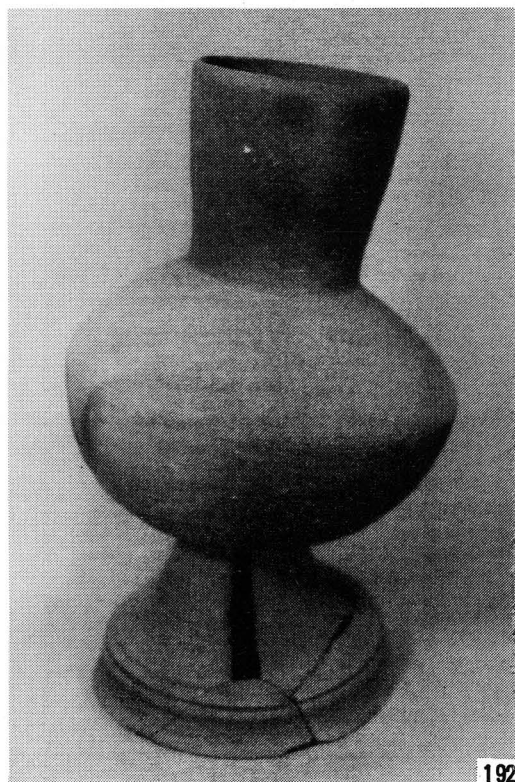
189

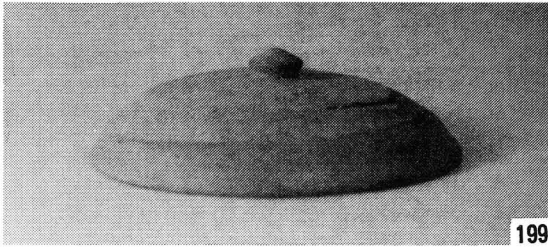


190

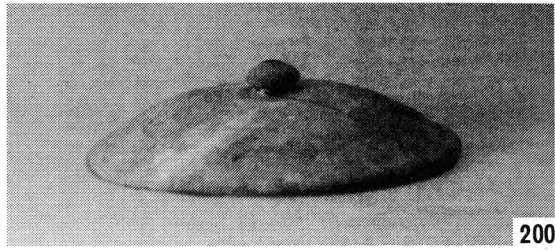


191

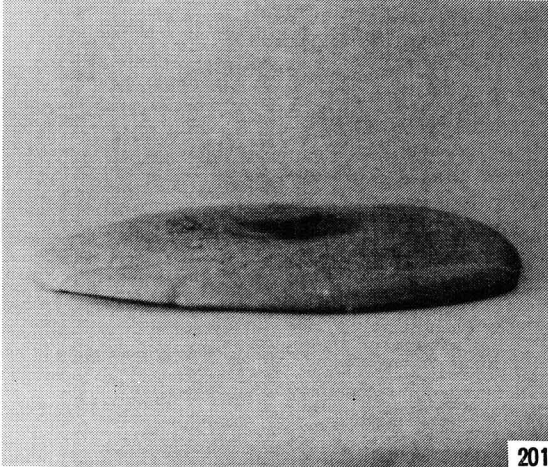




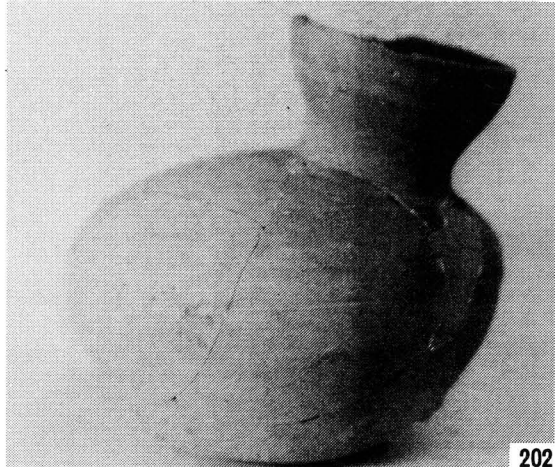
199



200



201



202



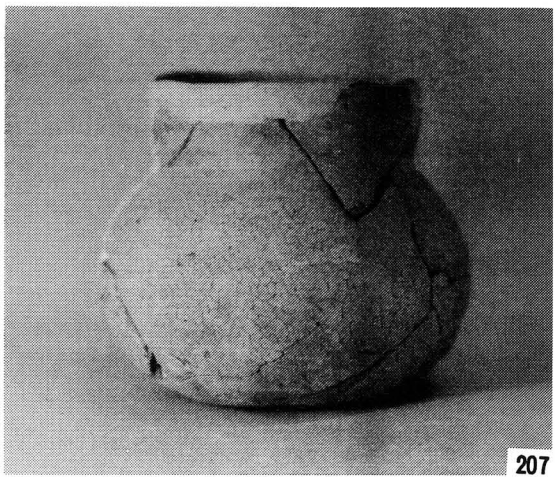
203



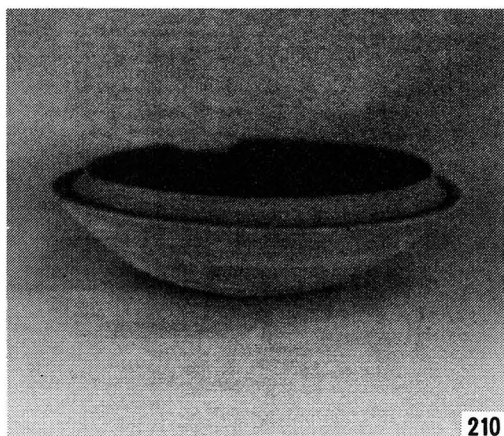
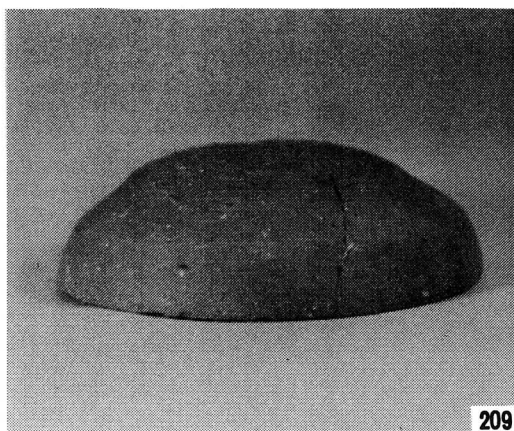
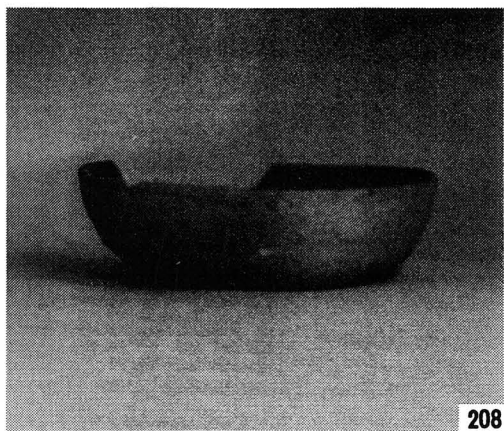
204

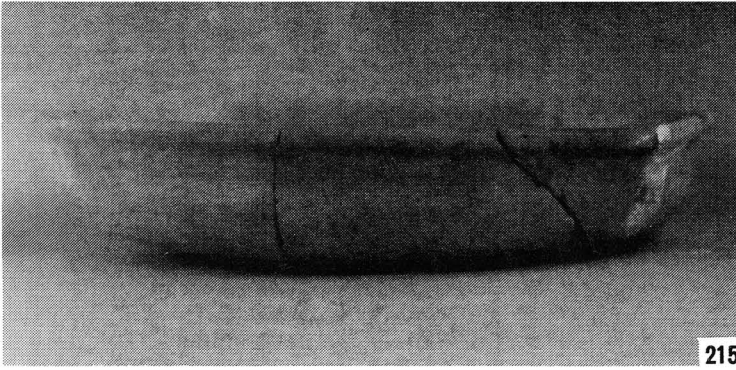


205

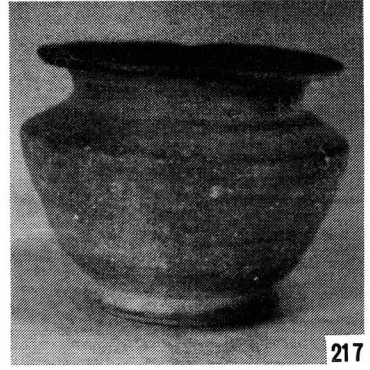


207

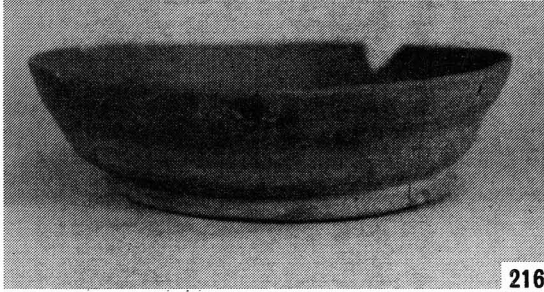




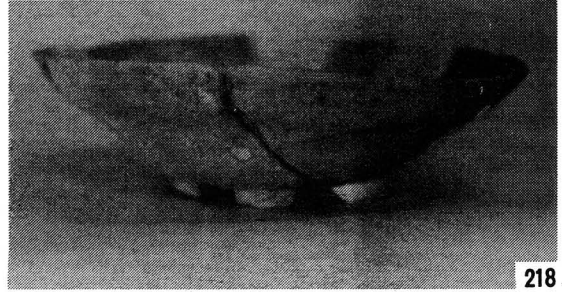
215



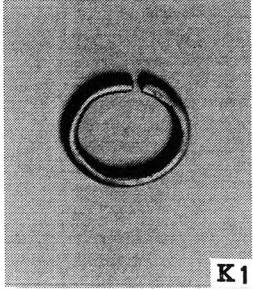
217



216



218



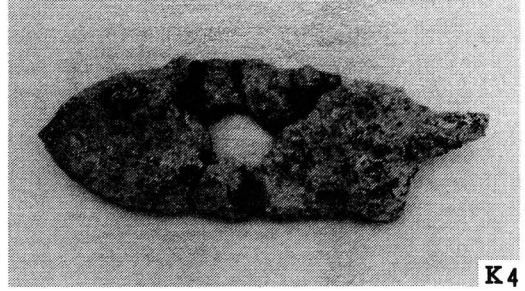
K1



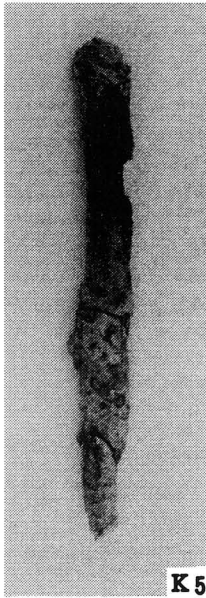
K2



K3



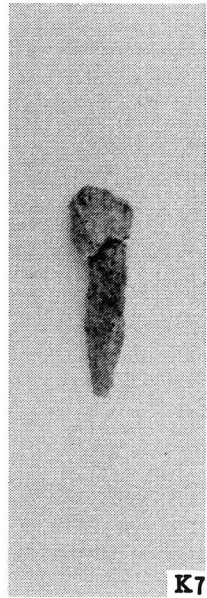
K4



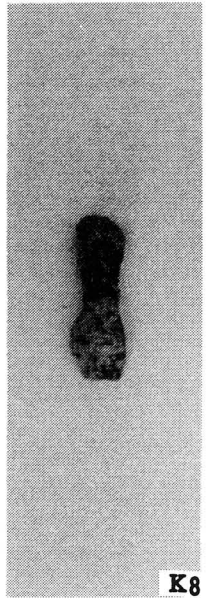
K5



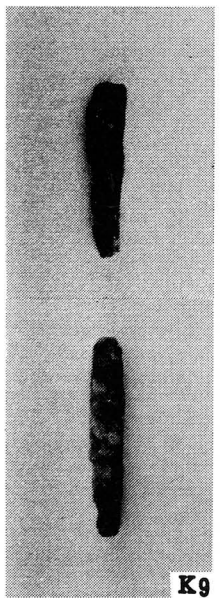
K6



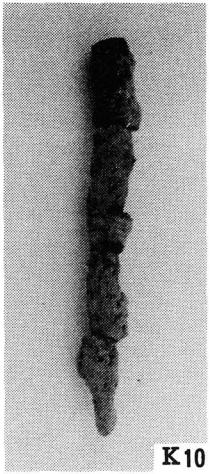
K7



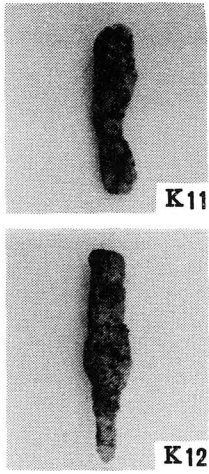
K8



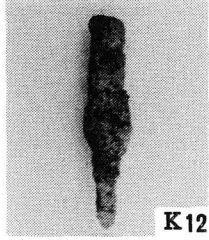
K9



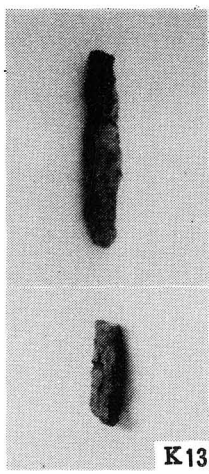
K10



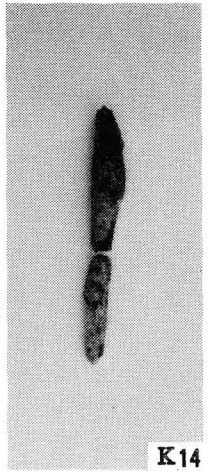
K11



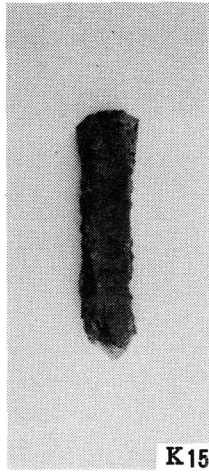
K12



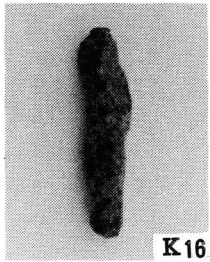
K13



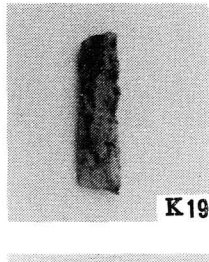
K14



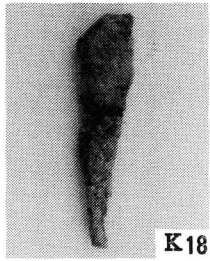
K15



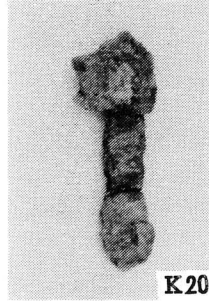
K16



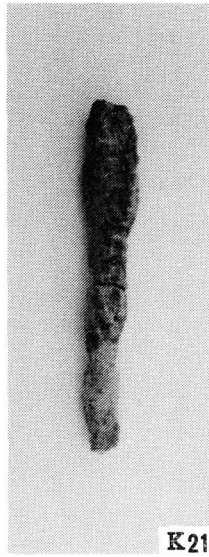
K19



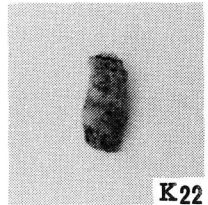
K18



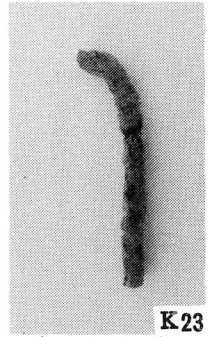
K20



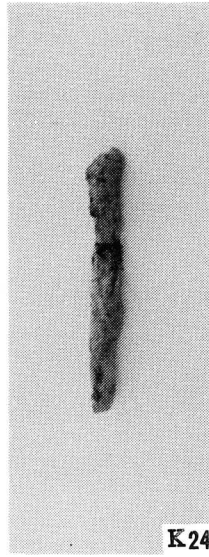
K21



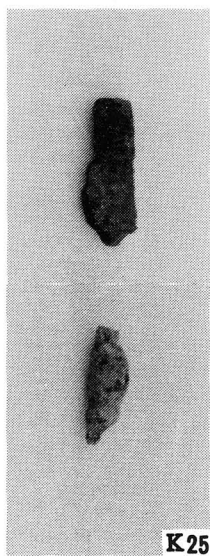
K22



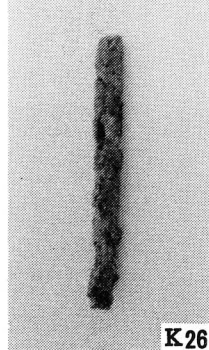
K23



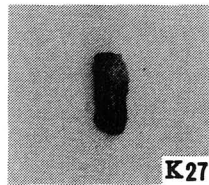
K24



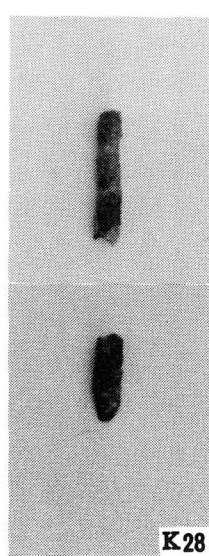
K25



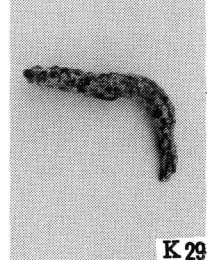
K26



K27



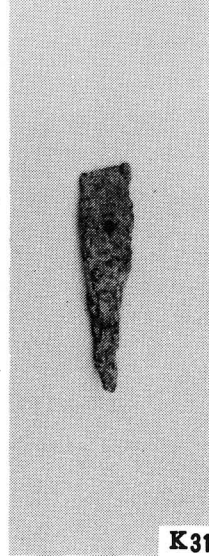
K28



K29

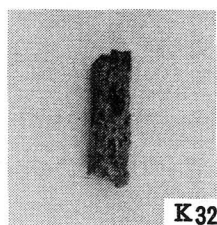


K30

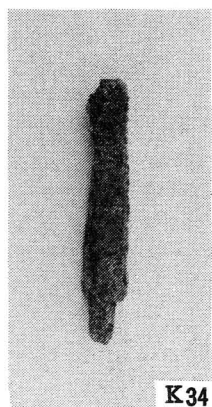


K31

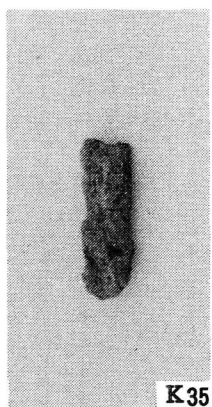




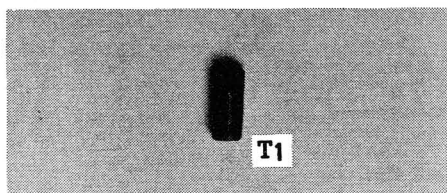
K32



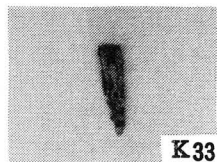
K34



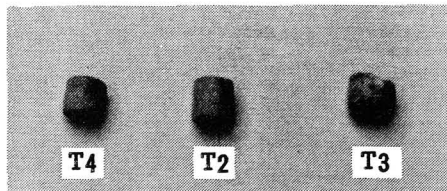
K35



T1



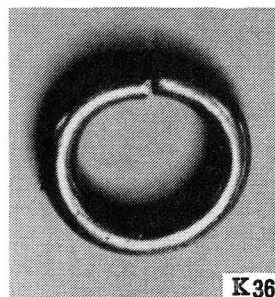
K33



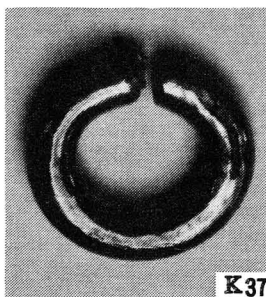
T4

T2

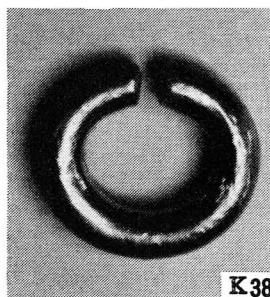
T3



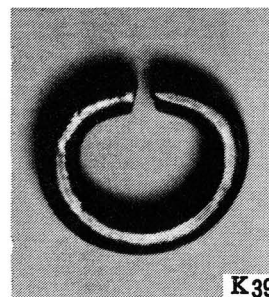
K36



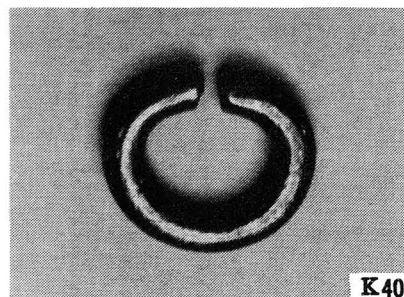
K37



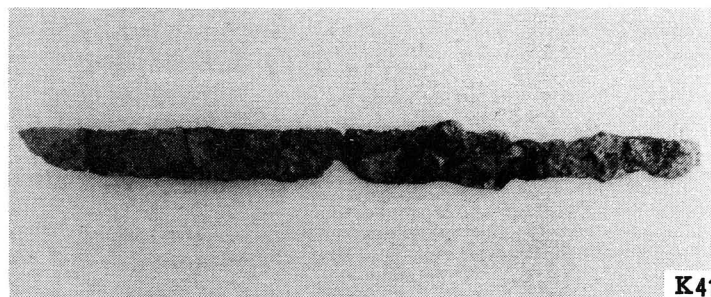
K38



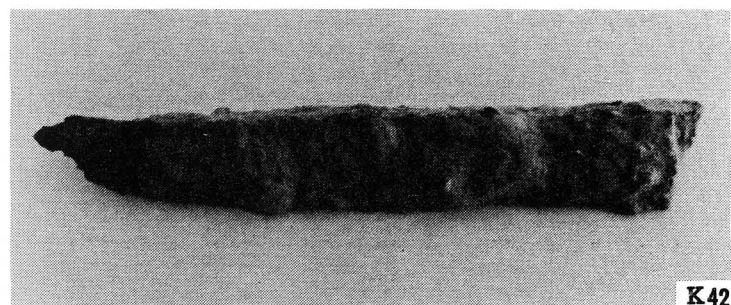
K39



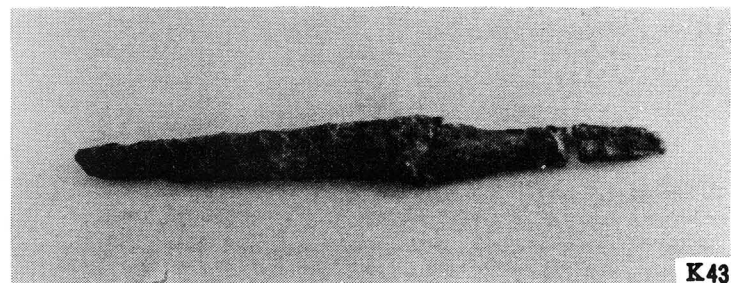
K40



K41



K42



K43



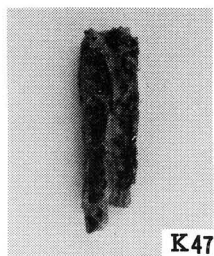
K44



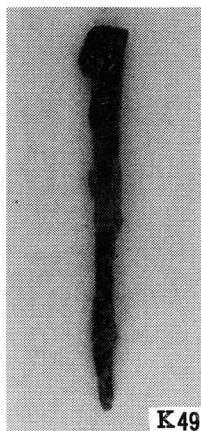
K45



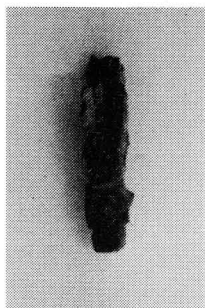
K46



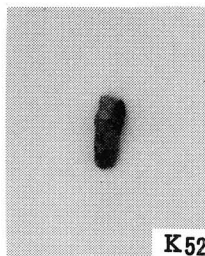
K47



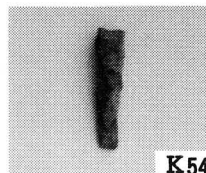
K49



K51



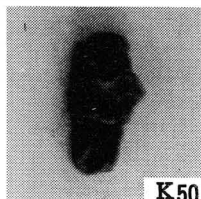
K52



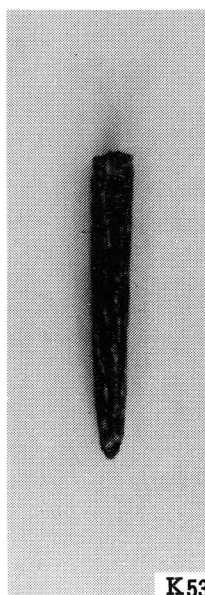
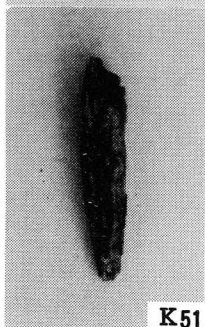
K54



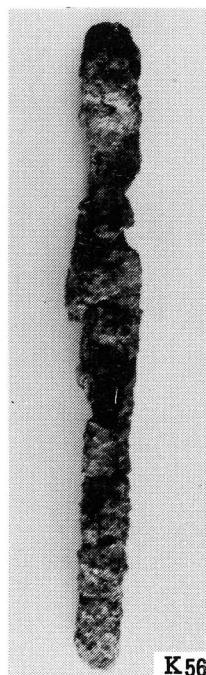
K48



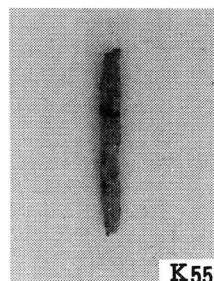
K50



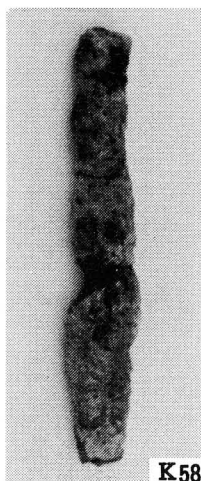
K53



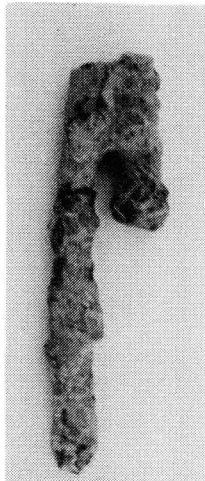
K56



K55

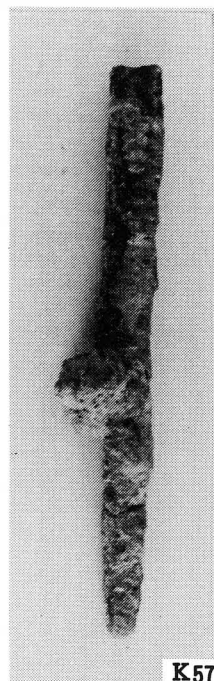


K58

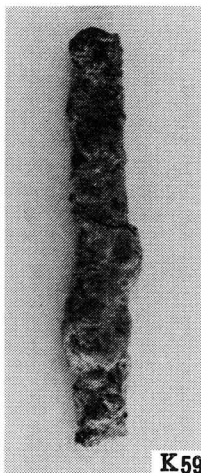


K60

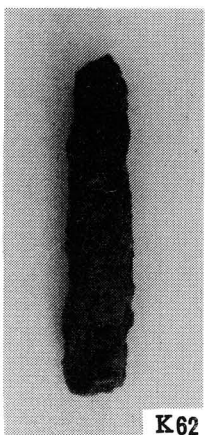
K61



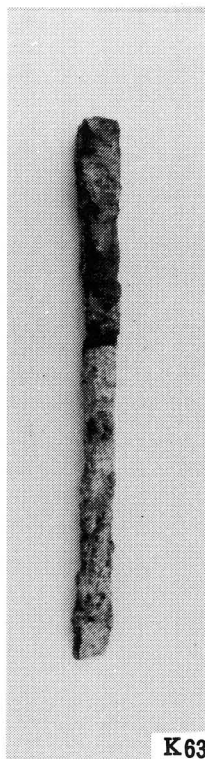
K57



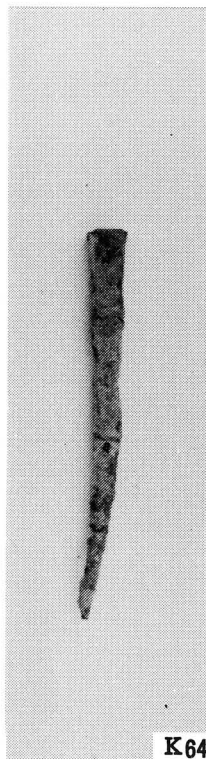
K59



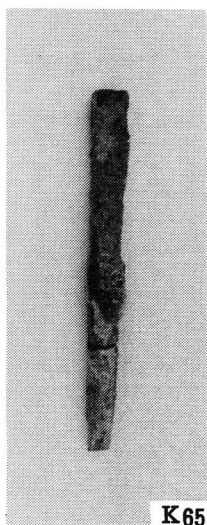
K62



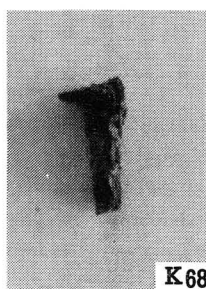
K63



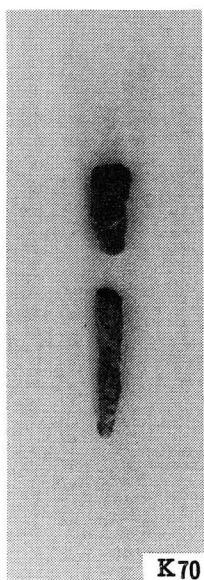
K64



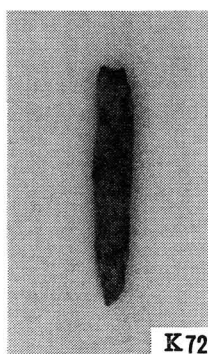
K65



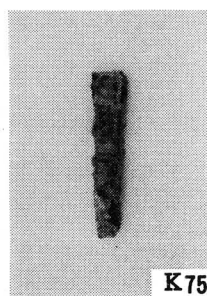
K68



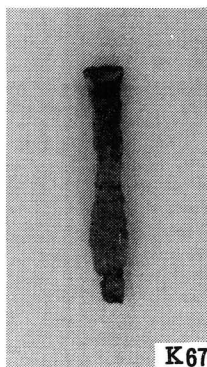
K70



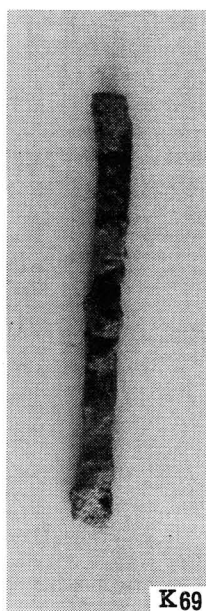
K72



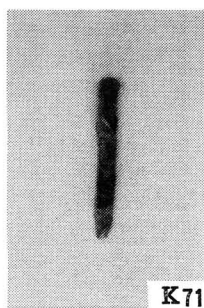
K75



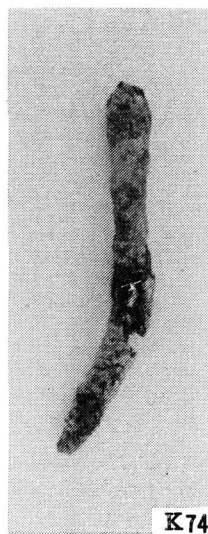
K67



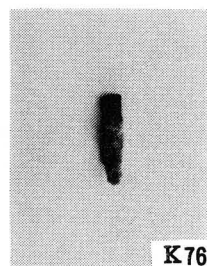
K69



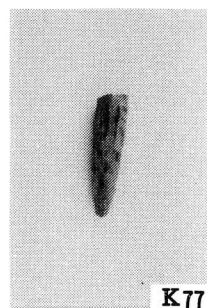
K71



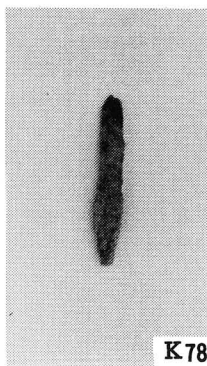
K74



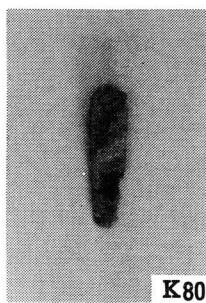
K76



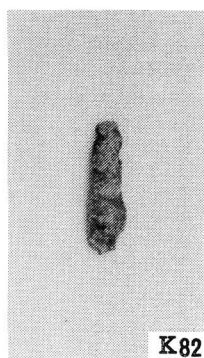
K77



K78



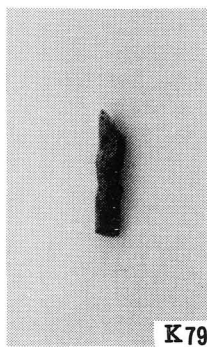
K80



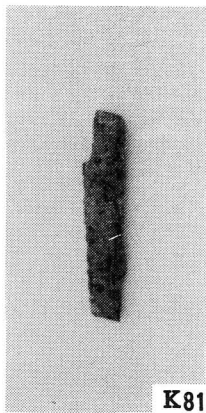
K82



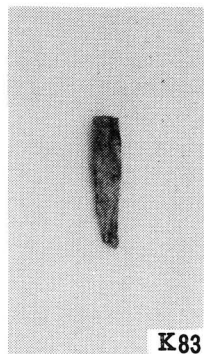
K84



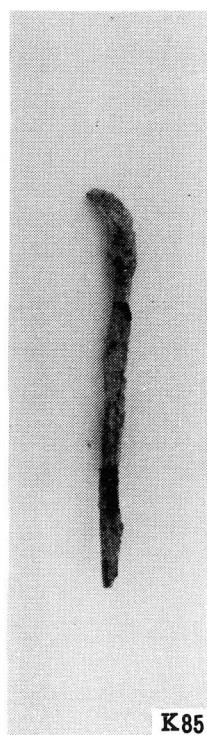
K79



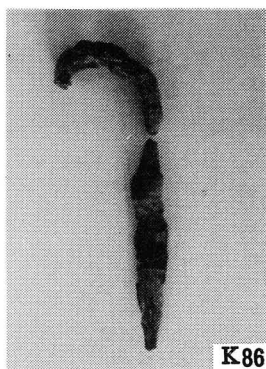
K81



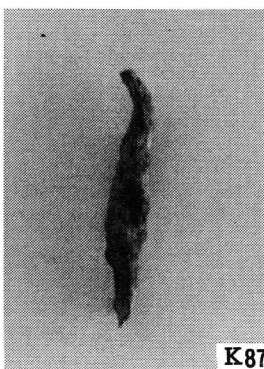
K83



K85



K86



K87



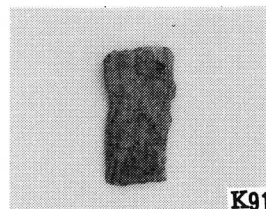
K88



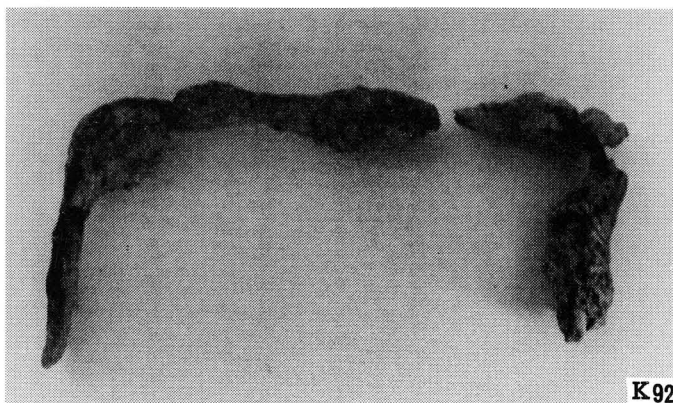
K90



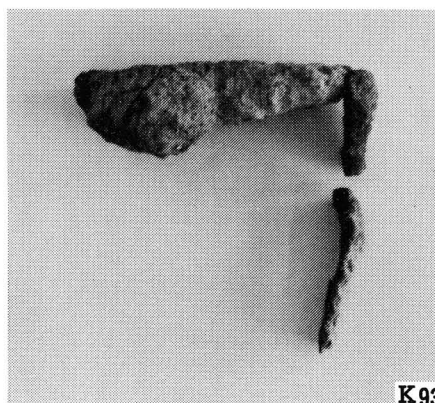
K89



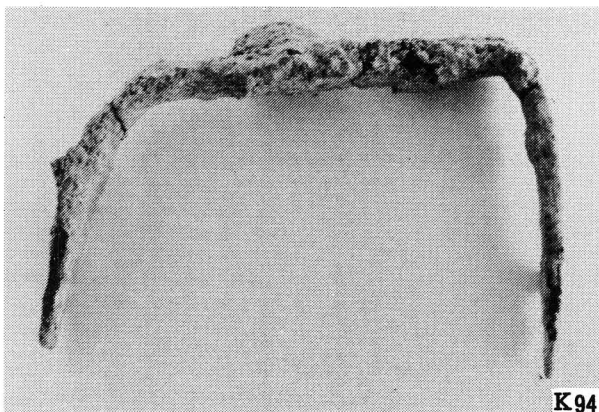
K91



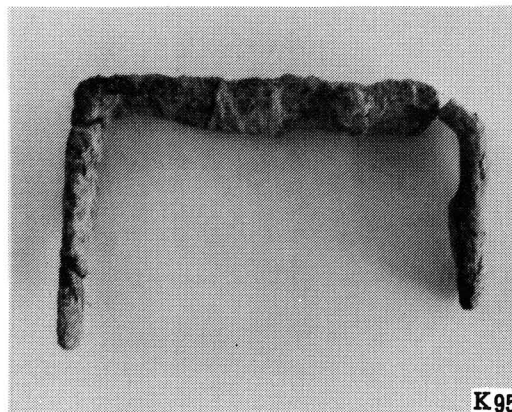
K92



K93



K94



K95



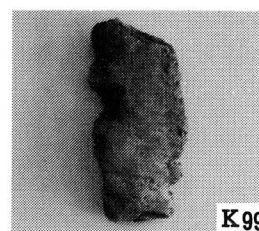
K96



K97



K98



K99



K100

八尾市文化財調査報告12  
昭和60年度国庫補助事業

八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581 八尾市本町1丁目1番1号

